

1 2 3 4 5 6 7 8  
Inches  
1 2 3 4 5 6 7 8  
cm

# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



# Kodak Gray Scale



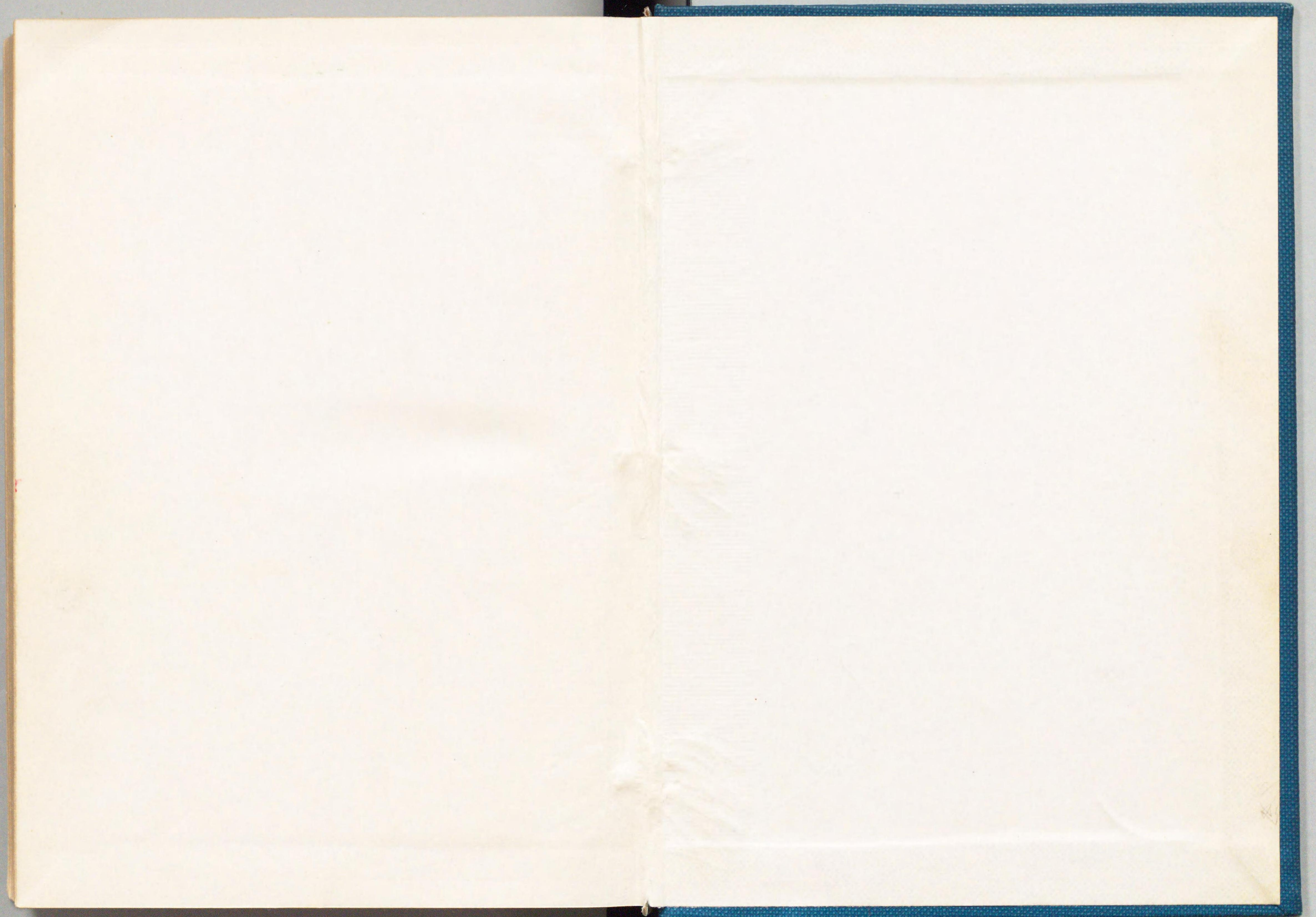
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

222.057  
G29c  
Nt  
  
00031499

〇  
複写







那珂通世譯注

成吉思汗實錄 全

筑摩書房刊



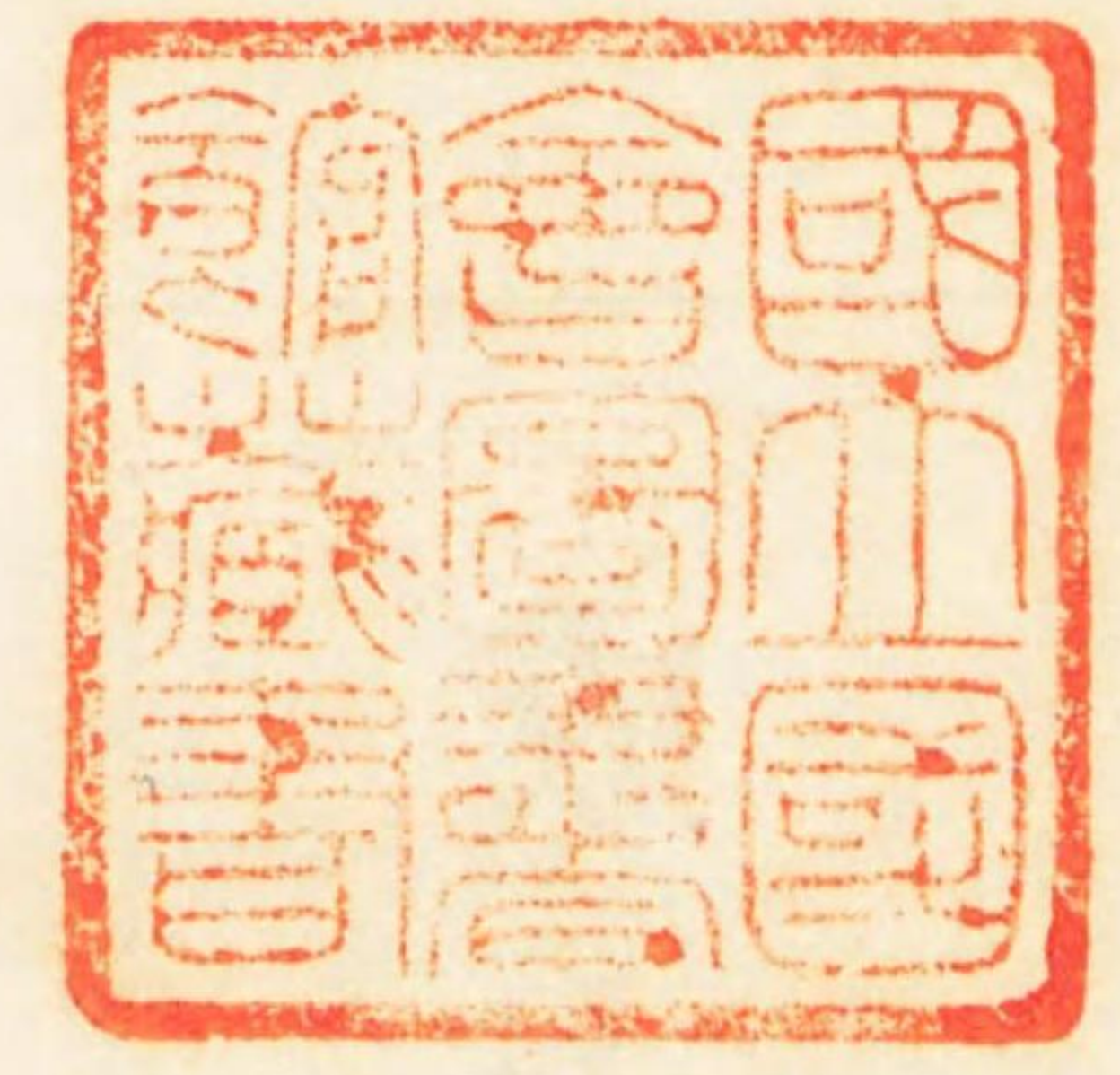
~~222.057 G29t N~~

222.057  
G29c  
Nt

序

恩師那珂通世博士逝かれて茲に三十有四年、歲月流るゝが如くにして、當年紅顏の一學生であつた私は、何等爲す所なくいつの間にか博士晩年の壽齡に達した。曾て大塚の覺舎に於て、蒙古文字を板書し、新刊の「成吉思汗實錄」を手にならせられつゝ、博士が「この書に魯魚の誤りが一つでもあつたら指摘せよ」と得意氣に述べられたあの倂は、今猶髣髴として眼前に浮び出て來るが、博士の該博なる學問、卓拔せる識見、雄大なる氣魄に對して、餘りにもかけ離れてゐる今の私自身を顧みる時、忸怩として序筆の甚だ進まざるを嘆ずるのは、累を恩師に及ぼすなきかを惧るゝが爲である。

わが國の東洋史學科創設の元勳那珂博士は、嘉永四年盛岡城下に生れ、幼にして聰



31499



敏、長じて和漢の學に通じ、養父通高先生が吉田松陰先生と親交ありし感化をも受けられ、二十二歳の時慶應義塾に學び、後十數年教職を轉々して、明治二十二三年の頃、四十歳ばかりで「支那通史」五冊を刊行された。これは劃期的の名著で、支那の太古から宋末に至る迄の政治文化上の重要な史實を、流暢な漢文で敘述されてゐるので、後に支那にも翻刻せられ、今日でも吾等の好參考書として座右に缺く可からざるものであるが、博士は宋に次ぐ元代の研究に於て、蒙古語學修の必要を痛感し、一旦史筆を抛つて語學の修養竝に根本史料の検討に没頭せられ、晩年遂にその學を大成して本書を著作されたのである。

本書の原文は、長篇の序文にも詳敘されてゐる如く、元朝に秘藏されてゐた特殊の史料で、蒙古の太祖成吉思汗の事蹟を主とし、これに祖先の傳説及び子太宗窩濶台の行實を附加したものであり、もと蒙古語を禿兀兒字クワウルで書いてゐたのを明初に漢字に書き改めたが、その際先づ漢字を音標文字として蒙古語を音の儘に記し、次に各語に漢字の傍訓を施してその意義を示し、別に本文の大意を部分的に漢文に要約せるも

のを附してゐたのである。後に坊間には、右の大意の漢文のみが纂輯されて「元朝秘史」の名に依り行はれてゐるが、人名や事實の誤謬が少くないので、博士は前記の三様の體を具へた「忙豁侖紐察マフハルンニウサ 脫卜察安トフサア」譯して「蒙古の秘史」といふを得て、蒙古語法に基き嚴密に修訂せられたのであり、その内容がわが「古事記」に該當するといふ趣旨から古體の假名交り文に翻譯せられ、これに精緻な注釋を加へて「成吉思汗實錄」と名づけ出版されたのである。

されば本書の編纂中に於ける博士積年の勞苦は、洵に察するに餘りあるのであるが、これに依つて蒙古創業時代の真相が闡明されたことは、内外の學者が今に至る迄感謝措く能はざる所で、別に「那珂通世遺書」に含まれてゐる「成吉思汗實錄續編」百五十二頁、校正増注親征錄「百四十九頁、及び別冊の那珂博士校訂「元史譯文證補」五百二十六頁等と共に、博士がわが國の蒙古史研究に先鞭を著け、榛莽を披いて大道を築き上げられた學界の偉功は、恰も本書の主題たる成吉思汗の鴻業にも比肩すべきものであると謂はなければならぬ。



然るに本書は、初版僅に數百部に限定されてゐたものと見え、出版後兩三年にして早くも店頭に姿を没し、世の篤學者をして披閱の難を嘆ぜしむるもの年既に久しく、近時偶々古書肆の目錄に發見することあるも、數十金を投ぜざれば入手し得られな  
い程の貴重なものとなつてゐる。時局下蒙古研究の益々勃興せる際、筑摩書房の奉  
仕的出版に依り、茲に本書の再版を見るに至つたのは、眞に學界の慶事であつて、私は  
恩師の尊い精神が再び甦つて學術の進歩竝に現今の國策に貢獻せられる所の偉大  
なるものある可きを、深き感激を以て期待してゐるのである。

昭和十七年(成吉思汗紀元七百三十七年)十月廿八日、

蒙古聯合自治政府建設五周年記念日に當りて

門弟 有 高 巖 謹識

### 成吉思汗實録の目錄。

序文。 有 高 巖 四一より 四まで

序論。 八六より 一 八六まで

元朝秘史の來歴

皇元聖武親征録、喇失惕額丁の集史の來歴

修正蒙古秘史附けたる蒙古秘史の子孫本支の系圖

蒙古秘史の和文譯本の標題

蒙古の古文と和譯文

元朝秘史の音譯法

卷の一。 成吉思合罕の根原、蒼狼白鹿より也速該巴阿禿兒の死まで

蒼狼白鹿の子孫十一世

豁哩刺兒の阿闌豁阿を朶奔篋兒干の娶り

兀浪罕の貧人の子と鹿の肉との取換へ

阿闌豁阿の生める天の子三人

成吉思汗實録の目錄

九 七 三 一 四一より 四〇まで 六八 五五 四六 三二 二五 一 八六より 一 八六まで 四一より 四まで



孛端察兒蒙合黑の侘住ひ

統格里克小河に居る民を孛端察兒兄弟の襲ひ取り

札荅囉の札木合の祖

忙豁勒のあまたの支族

合不勒合罕の管き、塔塔兒の主因の民に俺巴孩合罕の虜はれ

也速該巴阿禿兒の妻狩

忽圖刺合罕の即位

帖木眞拙赤合撒兒、合赤溫額勒赤、帖木格幹惕赤斤、帖木侖女の生れ

也速該巴阿禿兒と翁吉喇惕の德薛禪と結べる子女許婚の約

塔塔兒の民に也速該巴阿禿兒の害せられ

卷の二。帖木眞の幼き時より篋兒乞惕の難まで

訶額侖兀眞と俺巴孩合罕の二妃とのいさかひ、乞牙惕泰赤兀惕の分離

訶額侖兀眞の艱難せる子育て、兄弟の不和、母の厳しき叱り

泰赤兀惕の襲ひ、帖木眞の虜はれ、速勒都思の鎖兒罕失喇父子の助け

母子の再會、桑古兒小河の邊に母子の移住

一二

一六

一七

一八

二六

二八

三一

三二

三三

三八

四一より  
七二まで

四一

四四

四九

五七

馬盗人を帖木眞の追驅け、阿魯刺惕の孛斡兒出の義侠

翁吉喇惕の孛兒帖兀眞を帖木眞の親迎

阿魯刺惕の孛斡兒出の來屬

客喇亦惕の脱斡哩勒罕を帖木眞兄弟の訪問、脱斡哩勒罕の喜び

兀浪罕の者勒篋の來屬

三種の篋兒乞惕の襲ひ、孛兒帖兀眞ら三女の虜はれ

不兒罕嶽に救はれたる帖木眞の感謝

卷の三。忙豁勒客喇亦惕札荅囉の合力より成吉思合罕の即位の初まで

帖木眞の求に應ずる脱斡哩勒罕札木合の援け、篋兒乞惕の脱黑脱阿の遁れ去り

帖木眞孛兒帖の再會、孛兒帖を收めたる赤勒格兒孛闊の懺悔

別勒古台の母の逃げ匿れ、三百の篋兒乞惕の殲滅

脱斡哩勒罕札木合に帖木眞の感謝、拾ひ子曲出、三將の引上げ

帖木眞札木合三たびし直せる安荅の盟

札木合の異心、帖木眞の分離、拾ひ子別速惕の闊闕出

帖木眞に屬する忙豁勒諸部の眾、巴阿囉の豁兒赤兀孫の神告

七三より  
一〇四まで

七三

八二

八五

八六

八九

九〇

九三



忙豁勒諸部の眾に戴かるゝ成吉思合罕

忙豁勒の新庭の政務分任

舊臣を勞ひ新附を獎むる諭旨、脱斡哩勒罕の賀辭

卷の四。

札木合のいやみごとより鎖兒罕失喇者別の來屬まで

兀魯兀惕忙忽惕晃豁塔惕の來屬、國來の祝ひ、宴席の狼藉

乞塔惕の阿勒壇罕の塔塔兒征伐、成吉思合罕脱斡哩勒罕の應援

札兀惕忽哩となる成吉思合罕、王罕と呼ぼるゝ脱斡哩勒罕

塔塔兒の營より拾はるゝ失乞刊忽都忽

主兒勤の撤察別乞泰出の滅ぼされ、札刺亦兒の木合里らの來屬

主兒勤の營より拾はるゝ孛囉兀勒、訶額命額客の養ひ子四人

主兒勤に屬せし勇猛なる民の緣由、別勒古台に不哩孛闊の殺され

札木合を君に戴く十一部の亂、成吉思合罕王罕の出馬、闊亦田の役

諸部の潰走、兩罕の追撃、成吉思合罕の重傷を者勒篋の看護

帖木眞を喚ぶ合答安鎖兒罕失喇の女、鎖兒罕失喇別速惕の者別の來屬

卷の五。 泰赤兀惕の誅滅より客喇亦惕の軍議の漏泄まで

泰赤兀惕の誅滅、主君を逃がす巴阿囉の納牙阿の明智

王罕の弟札合敢不の來屬、王罕也速該の昔の親交、客喇亦惕の内亂、王罕の逃げ走り、

父の友に對する成吉思合罕の厚遇

王罕の弟ども官人どもの王罕を譏り、王罕に辱められ

成吉思合罕の塔塔兒征伐、答蘭捏木兒格思の戰、阿勒壇忽察兒答哩台の軍法違反

四種の塔塔兒の屠られ、密議を漏す別勒古台

塔塔兒の也速干合屯、その姉也速合屯也、遂合屯の塔の殺され

王罕の篋兒乞惕征伐

成吉思合罕王罕の乃蠻征伐、札木合の離間、成吉思合罕の離れ還り

乃蠻の名將に王罕の襲はれ、四傑の救ひ、王罕の感謝、父子の盟約

媼談の不協、札木合らの協議、讒言その子你勒合桑昆の線言に王罕の迷はされ

成吉思合罕を欺く桑昆の陰謀、晃豁壇の蒙里克額赤格の警告

不意打の謀を也客扯噠の口走り、成吉思合罕に巴歹乞失里克の密告

成吉思合罕を欺く桑昆の陰謀、晃豁壇の蒙里克額赤格の警告

不意打の謀を也客扯噠の口走り、成吉思合罕に巴歹乞失里克の密告

成吉思合罕を欺く桑昆の陰謀、晃豁壇の蒙里克額赤格の警告

成吉思汗實錄の目錄



卷の六。

成吉思合罕の東走より客喇亦惕の王罕の敗滅まで

一七七より  
二二〇まで

成吉思合罕の東走王罕の追襲兩軍の力を較ぶる王罕札木合の問答

一七七

合刺合勒只惕の沙漠の戰桑昆の負傷

一八二

軍の引上げに孛斡兒出、斡闊歹、孛囉忽勒の後れ

一八四

塔兒忽惕の合答安答、斡都兒罕の情報

一八七

合刺合河の行軍、忙忽惕の忽亦勒答兒の死、翁吉喇惕の帖兒格阿、篋勒の降附

一八八

統格小河の駐營、王罕の背信を責むる成吉思合罕の二使、王罕の悔痛

一九〇

札木合を嘲り、阿勒壇忽察兒を責め、速客虔の脫斡哩勒に告ぐる使命

二〇〇

桑昆の不孝を誡むる安答の忠言、桑昆の冥頑

二〇五

巴勒主納、兀兒の駐營、注、飲渾水即、巴勒主惕の諸説

二〇七

拙赤合撒兒の逃げ還り、王罕をたばかる成吉思合罕の二使

二一三

者者額兒、溫都兒の戰、王罕、桑昆の敗走、忽亦勒答兒の遺族の賞賜

二一七

卷の七。

塔孩、巴歹、乞失里克の恩賞より、篋兒乞惕征伐まで

二二一より  
二五四まで

速勒都思の塔孩の恩賞、札合敢不の二女、巴歹、乞失里克の恩賞、捕虜の分配

二二一

乃蠻の將に王罕の殺され、桑昆を棄てたる闊闊出馬丁の誅せられ

二二四

乃蠻にて王罕の頭の祭、可克薛兀撒卜喇黑の慨み言、塔陽罕の大言

二二六

老将の諫に塔陽罕の忤ひ、汪古惕の嚮背、帖篋延客額兒の軍議

二三〇

斡兒訥兀山の駐營、千戸百戸牌子頭六扯兒賓の任命、宿衛侍衛等の選擇職掌

二三三

乃蠻征伐、兩軍斥候の衝突、朶歹扯兒必の疑兵の謀

二三七

敵の銳を避くる塔陽罕の協議、父を罵る古出魯克罕、君を罵る豁哩速別赤

二三九

塔陽罕の奮進、忙豁勒の逆戰、塔陽罕、札木合の問答

二四三

札木合の心變り、乃蠻の潰敗、塔陽罕の虜はれ、古出魯克の遁れ

二四九

篋兒乞惕の脫黑脫阿、別乞の敗走、答亦兒兀孫の女、忽闌の拜謁、納牙阿の忠勤

二五一

卷の八。

篋兒乞惕の敗滅より、兀嚕兀惕の主兒扯歹の恩賞まで

二五五より  
二九九まで

斡歌歹の妻となる篋兒乞惕の婦、台合勒の寨を沈白の攻撃、脫黑脫阿父子を成吉思

二五五

合罕の長追、脫黑脫阿の戰死、乃蠻の古出魯克罕、脫黑脫阿の諸子の奔竄

二五九

兀嚕罕の速別額、台巴阿、忝兒の受くる鐵車窮追の勅

二六三

己が従士に札木合の虜はれ、不忠の臣の誅せられ、舊友を憐む英雄の寛厚

二六三

札木合の慙悔、命に安ずる善言、成吉思合罕の情あり義ある處分

二六五

斡難河の源なる第二次の即位、札刺亦兒の木合里の王號、別速惕の者別の西征

二六九



佐命の功臣八十八人、九十五の千戸の官人 二七二

功臣の恩賞、塔塔兒の失吉忽秃忽の愛だれ、太祖の溫諭、斷事官の任命 二八五

晃豁壇の蒙力克額赤格の舊恩、羣臣の首位 二八九

阿魯剌惕の孛斡兒出の義俠忠烈、右手の萬戸 二九〇

札剌亦兒の木合黎の受けたる神告、左手の萬戸 二九三

巴阿喇の豁兒赤兀孫の讖言、三十妻の舊約の履行 二九四

兀魯兀惕の主兒扯歹の數度の戰功、札合敢不の長女亦巴合別乞の下賜 二九五

卷の九。 忽必來を賞する勅より番士の貴重職掌威嚴まで 三〇一

巴魯剌思の忽必來の武功、四狗四駿二先鋒の稱、注意を受くる木匠別都溫 三〇一

格你格思の忽難の忠勤、拙赤の下の萬戸、闊闊搠思迭該、豁兒赤と四人の直臣 三〇二

をさななじみなる兀魯罕の者勒篋、父と別に千戸となる晃豁壇の脫倫扯兒必 三〇四

汪古兒厨官の巴牙兀惕統領、孛囉忽勒と二人にて食物の給散 三〇六

訶額命兀眞の養ひ子四人の恩返し、拖雷斡歌歹を救へる孛囉忽勒夫妻の功 三〇六

女子の恩賞、豁兒赤兀孫に賜はる別乞の位 三一〇

忙忽惕の忽亦勒答兒捏古思の察罕豁阿二人の遺族の恩給 三一〇

速勒都思の瑣兒罕失喇父子の舊恩、瑣兒罕失喇巴歹乞失里黑三人の答兒罕 三一三

巴阿喇の納牙阿に賜はる中の萬戸、者別速別額台迭該、古出古兒の封戸 三一六

宿衛箭筒士侍衛一萬人の選び入れ 三一八

一千の宿衛一千の箭筒士八千の侍衛の長官どもの任命 三二一

侍衛の四班の宿老どもの勤務 三二六

番士の貴重職掌威嚴 三二八

卷の十。 老宿衛大侍衛等の美稱より晃豁塔惕の破滅まで 三三一

老宿衛大侍衛老勇士大箭筒士の稱愛撫すべき萬の番士 三三一

宿衛の雜務從征陪審、箭筒士侍衛の屯營、朶歹扯兒必の殿中取締 三三三

忽必來那顏に合兒魯兀惕の降り 三三六

篋兒乞惕の遺孥を速別額台巴阿秃兒の追ひ窮め 三三八

乃蠻の古出魯克罕を者別那顏の追ひ窮め 三三九

委兀惕の亦都兀惕の降附、皇女阿勒阿勒屯の下嫁 三四一

皇子拙赤に林の民の降附、斡亦喇惕汪古惕に皇女の下嫁 三四四

孛囉忽勒那顏の戰死、朶兒伯多黑申の秃馬惕征服、豁兒赤忽都合別乞の助かり 三五〇



母と子弟とに民の分配、三弟四子の傳 三五二  
 晃豁塔惕に合撒兒の打たれ、帖卜騰格哩の讒言、母に怒られたる太祖の愧懼 三五五  
 帖卜騰格哩の横暴、帖木格斡惕赤斤の泣き訴へ、孛兒帖兀眞の慨み言 三五九  
 帖卜騰格哩の打取り、死體の失せ、蒙里克額赤格の責められ 三六四  
 三六九より  
 四八五まで

卷の十一。金國征伐の始まりより(今考定太祖西征之役)まで

金國征伐の始まり、綰山の戰、居庸關の戰、東昌の不意打ち 三六九  
 金の丞相の請和の建議、金帝の屈服 三八〇  
 唐兀惕征伐、駱駝貢獻の願ひ、辛未の一舉に二國の降服 三八三  
 甲戌の金國再征、潼關の戰、注撒勒只兀惕の撒木合巴阿禿兒の南侵 三八六  
 中都の近郊の駐蹕、塔塔兒の失吉忽禿忽の廉直 三九一  
 金の質子、拙赤合撒兒の東略 三九四  
 西域征伐の始まり、注闊喇自姆の異稱勃興、覺端也遂合屯の建議、太祖の嘉納、拙赤察  
 阿歹兄弟の爭、察阿歹の傅闊關搦思の訓諭 三九八  
 皇子四人の意見、斡歌歹相續の承諾、太祖の兄弟五人の相續人 四〇七  
 唐兀惕の徵發、阿沙敢不の直言 四一〇

己卯の出征、注太祖西征の路順、者別速別額台脫忽察兒三將の速勒壇追擊、脫忽察兒  
 の軍令違反、失吉忽禿忽の敗北、注西游記の月日の確實、信度河の戰、巴魯安原の駐  
 夏者刺列丁を札刺亦兒の巴刺の追驅け、者別ら三將の賞罰 四一一  
 拙赤察阿歹斡歌歹の兀兒堅只せめ、拖雷の闊喇散侵掠、斡歌歹の統軍 四二九  
 斡惕喇兒の落城、卜哈兒薛迷思干の戰、注二城の名稱地理沿革、集史の敘事、金寨嶺の  
 避暑、注鐵門關の地理紀行、拖雷の凱旋、注闊喇散諸城の地理 四三四  
 三皇子の我儘を太祖の怒り、三大臣の諫め、三豁兒赤の建議、搦兒馬罕の出征 四四六  
 朶兒伯朶黑申の出征 四五二  
 速別額台巴阿禿兒の遠征、注十一部落の地理、喇失惕多遜喀喇姆津元史の記事 四五三  
 答魯合赤の設け、牙刺哇赤馬思忽惕父子の用ひられ 四六四  
 七年の遠征、巴刺の印度侵掠、太祖の凱旋、注西游記なる壬午の回駕、角端の奇談、額兒  
 的失の駐夏、注丘長春の歸路、癸未甲申の駐夏駐冬、乙酉の歸國 四六八  
 四七五

(今考定太祖西征之役)

卷の十二。唐兀惕最後の征伐より庚子の大忽哩勒台まで

唐兀惕最後の征伐、太祖の負傷、阿沙敢不の暴言、注阿刺篩額哩合牙額哩折兀の解、賀 四八七より  
 五九一まで



蘭山の戰、雪山の駐夏、元勳の恩賞

四八七

唐兀惕の不兒罕の來降(注、兀喇孩、兒篋該の解、元史に委しき征夏の師、不兒罕の貢

獻(注、九を尙ぶ蒙古の俗、不兒罕の殺され、脱命の恩賞

四九六

唐兀惕の殲滅、太祖の昇遐(注、集史の記事、太祖の崩じたる地と日と、太祖臨終の言、起

輦谷の所在、太祖紀の滅國四十)

五〇三

太宗の即位(注、多遜の述べたる即位の禮、幼子に産を讓る北狄の俗、元史の考證、番士

國民の交付

五〇九

巴黑塔惕の再征、十一部落の再征、長子出征の定め

五一四

金國征伐の議

五一九

太宗の親征(注、金史哀宗紀、元史太祖紀の摘録、山川の神の祟、拖雷の身替り

五二六

金國の平定(注、探馬臣の解、金元兩紀の摘録の續、合喇豁魯木の考證)

五四二

巴黑塔惕の征服、貢賦、十一部落の平定(注、西史なる巴秃西征の摘録、女眞高麗の征定、

(注、莎郎合思の稱、元史高麗史の摘録)

五五五

主帥巴秃を不哩古余克の罵り、二人を太宗の怒り、諸王官人の奏議、二人を太宗の叱

り(注、巴秃と古余克不哩との永き不和)

五六二

宿衛箭筒士侍衛の舊制の申飭

五七〇

羊牝馬の賦、倉庫の設け、營盤の分與、徹勒地方の井掘り、站の設け、察阿歹の協贊、諸王

羣臣の大同(注、元史站赤の制)

五七八

太宗の四功四過(注、訶倭兒思の引ける太宗の逸事、西人の批評)

庚子の大忽哩勒台(注、太祖の四つの斡兒朶、遊牧の民に行はるゝ聚會、定宗即位の大

會の盛況)

六〇一

元朝祕史關係文獻簡目

六一

索引

三〇

那珂博士引用書索引

三九

年表

一

88 功臣表

七

諸部の人々

七

後記

七

成吉思汗實錄の目錄終り。



成吉思汗實録の序論。

元朝秘史の來歴。

成吉思汗實録は、余が今翻譯したる元の初の舊史にして、その原本は、東京高等師範學校に藏する元朝秘史の寫本なり。この來歴の中に「此書又は「今本」こあるは、皆この原寫本を指せるなり。此書は、蒙古字の書を漢字に譯したる者にて、その蒙古字の原本の名は、忙豁侖紐察脱卜察安こ云ひ、譯すれば蒙古の秘史なり。忙豁侖は即ち忙豁勒温、忙豁勒は蒙古、温は「の」にて、蒙古の「なり。紐察即ち你兀察は、你兀は秘す、察は動詞を形容詞にする語尾にて、「秘したる」秘さる



る「又は」秘密なる「なり。今の蒙古語にては你古察nigchaとなり元史語解に「尼古察nigcha秘密也」なりあり。脱卜察安tobchayanは正しくは脱卜赤顔tobchayanにて元史には脱卜赤顔tobchayanも脱必赤顔tobchayanも書き元史語解に「托卜齊延tobchayan總綱也」なりあり。綱要を總録したるものにして即ち實録なり。三語にて「蒙古の秘密なる實録」即ち蒙古秘史なり。

此書の原本の成れるは、元の太宗の時なり。此書の最末に「大聚會に會して、鼠の年七月に、客魯噠河Kelurenの闊迭額阿喇勒Khodes aralの朶羅安Doluan孛勒答Botakhi黒失勒斤Shighimcheik扯克兩地ordの閒なる幹兒朶ordに下馬して居る時、書きて畢へたり」なりあり。鼠の年は、元の太宗の十二年庚子の歲にして、我が四條天皇仁治元年、宋の理宗嘉熙四年、西紀一二四〇年、今年丙午より六百六十六年前なり。阿喇勒ordは河中島を云ふ。闊迭額洲ordは、客魯噠ordの

河中島ordなり。幹兒朶ordは、合罕Khaganの帳殿なり。闊迭額洲ordの幹兒朶ordは、元の太祖の四つの幹兒朶ordの中の大幹兒朶ordにして、蒙古の國會ordの常に開かれたる處なり。國會ordに參列して大幹兒朶ordにて書けり云へば、當時文筆を能くする委兀兒人Dairなごの勅命を受けて書ける者なるべし。此書は、十二卷に分れ、卷の一より卷の十までは、太祖の祖先より始めて、太祖即位の後、金國征伐の前までの事蹟を敘べ、第十一二卷は、續集卷一、續集卷二と題して、羊の年ord元の太祖六年辛未、太祖崩御の前二年の金國征伐より始め、太祖の金國を平げたる後に及び、太宗の自ら己の四功四過を述べたる勅語を以て結べり。然れば正集十卷は、既に太祖の朝に作られ、太宗十二年に至り、續集二卷を補ひ作りて、全書ordこなせるなり。篇末に太宗の勅語を載せたるは、必ず太宗の



直に史臣に命じて書かせたる者ならん。

此書今は蒙古語を漢字にて音譯したる者のみ傳はりたれども、本は蒙古の國書なる委兀兒字にて書きたる者なるべし。蒙古には、もこ文字なかりしが、太祖の乃蠻を滅ぼしたる時より始めて委兀兒字を用ひて蒙古語を書く事Zaimanとなれり。元史の塔塔統阿の傳に依るに、塔塔統阿は、畏兀の人にて、その國の文字に委しく、乃蠻の大陽罕Tatunggaに重んぜられ、その金印と錢穀を掌りしが、乃蠻滅びたる時、塔塔統阿は、その印を懷き逃れんとして擒はれ、太祖に「大陽の人民疆土、悉く我に歸したるに、汝印を持ちて何くにか往く」と詰られ、之を守るは、臣の職なり。故主を求めて之を授けんと欲す」と云ひたれば、太祖は「忠孝の人なり」と感じて、「この印は、何にか用ふる」と問へり。塔

塔統阿は「錢穀を出納し、人材を任用する一切の事に用ひて信驗とするなり」と對へたり。太祖實にもこて、此人を左右に居き、これよりすべて勅を發するには、始めて印章を用ひ、仍て此人に命じて之を掌らしめたり。又、汝は、本國の文字を深く知れりや」と問はれて、知れるだけを悉く對へたれば、太祖の旨に稱ひ、遂に命ぜられて太子諸王に教へ、畏吾字を以て蒙古語を書く事としたる由見ゆ。委兀兒は、唐の回紇にて、捏思脫兒宗の傳道師の教化を受けて、夙くより文字を用ひたりしが、元の太祖四年に、委兀兒國主、蒙古に降りてより、委兀兒の名士の蒙古に事へて文臣となれる者多く、委兀兒字は遂に蒙古の國書となれり。されば此書の文字は、もこ委兀兒字なりけん。ここ疑ひなく、之を書きたる人も蓋委兀兒人ならん。



世祖の時、西蕃の聖僧八思巴に命じて、蒙古新字を作らしめ、天下に頒行したれども、その新字は、不便なる文字にて、遍くは行はれざりし程なれば、此書の原字を書き改むるには至らざりしなるべし。後に引ける鄭曉の今言の文に據れば、此書の原字の委兀兒字の儘なりしこと甚だ明かなり。

元史察罕に非ず。この察罕は、卷の百三十七なる西域班勒紇の人なり。の傳に「博覽強記、通諸國字、書云云嘗譯貞觀政要以獻帝(仁)大悅、詔繕寫、徧賜左右、且詔譯帝範、又命譯脫必赤顏、名曰聖武開天記、及紀年纂要、太宗平金始末等書、俱付史館」とあり。貞觀政要帝範を譯したるは、漢文を委兀兒字、蒙古文に譯したるなり。脱必赤顏を譯したるは、委兀兒字、蒙古文を漢文に譯したるなり。この聖武開天記は、即ち今の皇元聖武親征錄なること、は、後の親征錄の來歴の條に言ふべし。

又虞集の傳に、明宗の命を受けて、經世大典を編修する時、以累朝故事、有未備者、請以翰林國史院、修祖宗實錄時、百司所具事蹟、參訂翰林院、臣言於帝曰、實錄法、不得傳於外、則事蹟亦不當示人。又請以國書脱卜赤顏、增修太祖以來事蹟、承旨塔失、海牙曰、脱卜赤顏、非可令外人傳者、遂皆已」とあり。

脱必赤顏も脱卜赤顏も、紐察脱卜赤顏の略稱にて、此書の原本に修正を加へたる者なり。修正したりと云ふ理由は、後修正秘史の條に言ふべし。修正をば加へたれども、秘史は秘史として、深く内府に藏し、外人に示さざりし故に、世には廣まらざりき。

又虞集の傳に「初、文宗在上都、將立其子阿剌忒納答剌爲皇太子、乃以妥歡帖穆爾太子(文宗の兄なる)乳母夫言明宗在日、素謂太子非其子、



黜之江南驛召翰林學士承旨阿隣帖木兒奎章閣大學士忽都魯篤彌實書其事于脫卜赤顏又召集使書詔播告中外二こあり。これは、文宗その兄明宗を弑して立ちたる後、明宗の長子を誣ひて、八不沙皇后が他人に通じて生みたる子なりと云ひ、その事を祕史に書かしめたるなり。又前の察罕の傳の文を見るに、紀年纂要、太宗平金始末等の書こあるも、脫卜赤顏を譯して成れる趣おもむきに聞ゆ。其等に依りて思へば、祕史の書は、太祖太宗の事を録したる者のみならず、その後の歴朝の事を録したる者もありしならんが、其等の書は後の世には傳はずして、その斷簡殘編を見たる人ありし事も聞かず。

明の太祖の洪武二年三年、宋濂王禕等が勅を蒙りて元史を修むる時には、金匱之書悉入於祕府二こありて、元代には、法不得傳於外二こ

云へる十三朝の實錄も、皆北京の祕府より南京の祕府に移りたれば、原本祕史も修正祕史も、歷朝續修の祕史も、皆明人の手に渡りしならん。されども當時の史臣は、委兀兒字も蒙古語も解する者なきが故に、修史の際、蒙古文の書を參考に用ふるここ能はざりき。今太祖本紀の大抵察罕の譯したる聖武開天記即ち今の聖武親征錄に合へるは、直に開天記に本づきたるにも由り、又成宗の大徳七年に翰林國史院の奏進せる太祖實錄は、既に修正祕史に本づき、開天記に大に異ならずして、元史はその實錄に本づきたるにも由れるなり。

此書は、原本の蒙古文を原音のまゝに漢字にて音譯し、本文の右側に蒙古語を一語ごとに漢字にて俗語に譯し、一段一節の終りに、



又は段落の切れざる處にても、文章の長過ぐる處は程善く切りて、本文の大意を漢字にて俗文に譯し、本文よりは三字ほど下げて錄せり。故にこの譯本は、委兀兒字の漢字音譯と蒙古語の漢字俗語譯と蒙古文の漢字俗文譯と三様の譯を備へたる珍しき本なり。今の寫本は、全部十二卷を六冊に裝釘し、正集十卷は五冊、續集二卷は一冊となれり。

この翻譯は、明の太祖の史官にて蒙古語に通じたる者の手に成り、元朝秘史の名も、その時に與へられたるなり。明の鄭曉の今言卷の四に、鄭曉の吾學編四夷考「洪武十五年、命翰林侍講火原潔等編類華夷譯語、上以前元素無文字、發號施令、但借高昌書製蒙古字、行天下、乃命原潔與編修馬懿赤黑等、以華言譯其語、凡天文地理人事物類服食器用、靡不具載、復令取元秘史、以切其字、諧其聲音、既成、詔刊布、自是使臣往來朔漠、皆能得其情」とあり。顧炎武の日知錄之餘卷の四を張穆の引きたるには、「洪武十五年正月丙戌」とあり、又馬懿赤黑は、馬沙亦黑とあり、その他は大抵同じ。露西亞の僧正帕刺的兀思は、洪武實錄に此事見ゆと云へり。明の太祖の實錄は我輩いまだ閲讀の機會を得ず。高昌は、委兀兒の地の古き名なり。借高昌書製蒙古字、とは、委兀兒字を借りて稍増損して蒙古字としたるを云ふ。別に蒙古字を作

りたるには非ず。故に元史には畏吾字と云ひて蒙古字と云はず、又その畏吾字を直に國書とも云へるは、畏吾字は即ち蒙古字なればなり。

取元秘史、以切其字、諧其聲音、とは、秘史の蒙古字の音韻を分析し、



漢字を當て、善く諧はしむるを云ふ。蓋華夷譯語の書は、蒙古語の音も義も漢字を以て譯するが故に、その材料を祕史より取らんが爲に、先づ祕史を音譯語譯文譯したるなり。その目的は、蒙古の史を考ふるに在らずして、蒙古の語を考ふるに在りき。原文に人の名地の名部落の名なごあまた重なれる處を、譯文には只その一つを擧げて、その他は只「等」の字又は幾人幾部落などの語を用ひて略きたるここ多きは、これが爲なり。

語譯文譯の中に、音譯の忙豁勒蒙古を達達、撒兒塔兀勒、中亞細亞の莫哈篋惕教徒を回回、中都金の中都を北平、北京、金の北京、今の北京、喀刺沁右翼を大寧、南京、金の南京、今の河南を汴梁、譯したるが如きは、明人の譯なることを察するに餘りあり。殊に金の中都なる今の北京を北平と云ひたるは、明の成

祖の遷都の前に限れる名なれば、この譯本は、洪武の史官の手に成れるここ疑ひなし。又音譯の中にも、二人なる阿兒孩合撒兒と巴刺Arkhai Khassarとを一人の阿兒孩合撒兒巴刺とし、捏兀歹部の察合安兀洼を或は捏兀歹と察合安兀洼と二人とし、或は捏兀歹察合安兀阿と云ふ一人の名とし、塔塔兒名部の阿勒赤塔塔兒Tatar Alchi Tatar塔塔兒分部の名部の札鄰不合を塔塔兒の阿勒赤と塔塔兒の札鄰不合と二人とし、翁吉喇惕の迭兒格額Ongirat Jalimbukha Dergek-emei篋勒を迭兒格額と顯篋勒と二人とし、乃蠻名部の古出兀惕乃蠻Naiman Guchunt Naiman乃蠻の部の不亦嚕黑罕を乃蠻の古出兀惕Buirukh Khan乃蠻の西域の罕篋力克Khannelikと云ふ人を、音譯には罕と篋力克とを離して書き、罕なる篋力克とし、語譯には皇帝篋力克、文譯には篋力克王としたりが如き處甚だ多し。此等は、利仁將軍田村丸を一人と思ひ、田原



藤太藤原秀郷を二人と思ひ、三宮氏を皇族と誤れるの類にて、元代の人ならば、かゝる誤りある筈なけれども、蒙古の古史に暗き明人なればこそ、是等の讀誤りも有りしなれ。然るに顧廣圻の祕史の跋に、殘元槧本、影元槧舊鈔本など云ひ、李文田の祕史の注にも、殘元槧本、元槧足本など云ひ、又元代撰訖、殆非一刻、故兩本互異と云へるは、藏書家の言傳へたるままに、この譯本を元代の物と信じたるにて、この諸人は、此書の内容を善くも考へざりしと見ゆ。唯何秋濤は、夙く心附きて「祕史、蓋係明朝初年所譯、故稱燕京曰北平、博州曰東昌」と云へり。

明の永樂年中、永樂大典を作り、古今の羣籍を網羅して、韻に依り排纂したる時、元朝祕史も、その選に漏れず、その十二先の元字韻の中に收められたり。但その本は全部十五卷にして、續集の目なく、今本と分卷同じからず。此書の紙數頗る多きが故に、收録の際、何かの都合にて分割したるなるべし。明の黃虞稷の千頃堂書目に元朝祕史十二卷を著録し、明の文淵閣書目の字字號に「元祕史一部五册、又一部同」又「祕史續稿一部一册、又一部同」とあるは、洪武槧刻の原本にて、今の寫本の本書なり。然るに阮元の四庫未收書目提要に、千頃堂文淵閣の祕史を「竝闕佚之本」と云へるは、その時只十五卷本のみを見て、未六册十二卷の舊本を見ざりし故なるべし。

清の孫承澤が著せる元朝典故編年考の第九卷に、祕史の譯文を載せて、その小序に「元有祕史十卷、續祕史二卷、前卷載沙漠始起之事、續卷載下燕京滅金之事、蓋其國人所編記、書藏禁中、（明の文淵閣）不傳、偶從



故家見之錄續卷末以補史所不載云云云へるを、四庫全書提要に評して考其所引竝載永樂大典元字韻中互相檢勘一一相同疑本元時祕冊明初修書者或嘗錄副以出流傳在外故承澤得而見之耳所記大都瑣屑細事且閒涉荒誕蓋傳聞之辭輾轉失真未足盡以爲據然究屬元代舊文世所罕觀自永樂大典以外惟見於此書與正史頗有異同存之亦足以資參訂也云ひ又蒙古源流の評に與元朝祕史體例相近云へり祕史を以て傳聞の辭とし僅に蒙古源流に比ぶるがごときは乾隆の史臣も未祕史の眞價を知らざりしを見るべし。獨嘉定の錢大昕は永樂大典の中より祕史を寫し取りてその敘次頗る實を得たるを喜び跋を作りて元史の太祖本紀の荒謬を指摘し紀所書偵倒復查皆不足據論次太祖太宗兩朝事蹟者其必於此

書折其衷與云へり。その後元史考異元史氏族表を作るに頗るその書を參考せり。

又錢大昕は大典本の祕史を得たる後更に十二卷の舊本あるを聞きその大典本に勝れる眞本なることを悟りたりと見え元和の顧廣圻の祕史の跋に元朝祕史載永樂大典中錢竹汀小詹家所有即從之出凡首尾十五卷後少詹聞桐鄉金主事德興有殘元槧本分卷不同囑彼記出據以著錄於其元史藝文志者是也とあり。その藝文志史類の第四雜史類に元祕史十卷續祕史二卷を擧げて不著撰人記太祖初起及太宗滅金事皆國語旁譯疑即脫必赤顔也と云へり。國語旁譯とは本文は蒙古語の漢字音譯にて右旁に漢字語譯あるを云ふ。音譯語譯のみを云ひて文譯を云はざるは本文を主として譯文に



重きを置かず、且譯文の事をも旁譯の字に込めたるなるべし。

阮元の四庫未收書目提要に曰く「元祕史十五卷、不著撰人名氏、其紀年以鼠兒兔兒羊兒等、不以干支、蓋即國人所錄云云。此依舊鈔影寫國語旁譯記元太祖太宗兩朝事跡、最爲詳備。案明初宋濂等修撰元史、急於蕝事、載籍雖存、無暇稽求。如是編所載元初世系、李端又兒之前、尙有一十一世太祖本紀、述其先世、僅從李端又兒始。諸如此類、竝足補正史之紕漏。雖詞語俚鄙、未經修飾、然有資考證、亦讀史者所不廢也。」十五卷云へば、大典本の如くなれども、舊鈔に依り影寫す云ひて、大典より取れり云はざれば、大典の外にも十五卷の舊鈔本ありしならん。もし古くよりさる本ありしならば、大典は却てその本を收めたるならんか。

阮元は、太祖の先世の事を云云すれども、實は李端察兒以前の事は取るに足らず。その以後なる祕史の敘事は、事ごとに皆元史の紕漏を補ふに足れり。然るに其等の諸大事を何も言はずして、一例は云ひながら、李端察兒以前の事のみを云へるは、只祕史の卷首三四葉を讀みたるのみに非ずやと疑はるゝ程なり。是に於て余は益錢大昕の炯眼に感服せり。

顧廣圻の祕史の跋の續きに曰く「殘本金主事嘗攜至吳門、予首先見之。率率未得寫錄、近復不知歸何處、頗以爲憾。去年授徒廬州府、晉江張太守許、見所收影元槧舊鈔本、通體完善。今年至揚州、遂慫慂古餘先生、借來覆影壹部、仍見命校勘、乃知異於錢少詹本者、不特分元朝祕史十卷、續集二卷一事也。即如首卷標題下、分注二行、右忙豁命紐察五字、



左脱察安三字、必是所署撰書人名銜、而小詹本無之。當依此補正。其餘字句行段、亦往往較勝、可稱佳本矣。校勘既畢、記其顛末如此。若夫所以訂明修元史之疏略、少詹題跋、洎考異中、見其大槩、引而伸之、唯善讀之君子、茲不及詳論云。この跋は、即ち今本の跋にして、便宜の爲に、今の寫本に、今本の來歴を述べたる者なれば、今本は、即ち顧廣圻の校勘本なり。書の名を撰人の名と誤れるは、蒙古語を解せざる人に已むを得ざる事として、この完善なる古史を世に傳へたる功は没すべからず。

道光中、平定の張穆は、祕史の譯文を大典より寫し出し、仁和の韓氏より影鈔原本、阮元の十を借りて校對し、連筠蓀叢書に入れて出版し、光緒二十年、明治十七年、上海の復古書局にて復その本を石印に附し、

長春眞人の西遊記、張穆の蒙古遊牧記、一帙の縮本として賣り出したれば、十五卷本の譯文は得易くなりたれども、顧氏の校勘全本は、益希見の珍書となり、輾轉して國子祭酒宗室盛昱の藏に歸せり。光緒十一年、明治十年、翰林學士萍鄉の文廷式は、盛昱の本を借りて順徳の李侍郎文田と各一部を寫せり。文廷式の序に「於是海內始有三部」云へり。是より先に李文田は、祕史に注せんとし、連筠蓀本を以て主とし、陽城の張敦仁の本を參考に用ひたり。張本は、從元槧足本、影出、作二十卷、又續二卷、云ひ、題目の下に忙豁侖紐察脱察安なる夾注ありし由なれば、これも顧本の寫しなるべし。李氏は、初に張本を借り用ひ、後に盛昱本を寫し取れるなるべし。李氏の注成れる頃は、盛昱本の寫しも坐右にある筈なれども、今その注を見るに、蒙古



文より裨益を得たりと覺しき所なし。

明治三十二年、文廷式の來遊せし時、鹿角の内藤湖南、東京に居りて、廷式の歸りたらん後に、蒙古文祕史を寫し寄せられんことを求め、余も亦切に望みたりしかば、廷式歸りて閒もなく拳匪の亂起り、音信久しく絶えたれども、三十四年の末に至り、哀然たる六大冊の寫本を人に托して、大阪なる湖南の許に届けたり。湖南は、直に鈔胥を備ひて、一部を影寫し、東京に送りこしたるは、今高等師範學校の藏となれり。その後、早稻田大學も、一部を影寫して、その圖書館に備へたり。是に於て我が海内にも、亦始めて三部ある事となれり。

かくてこの全本は、世界に六部限りか云へば、さに非ず。猶外に一部あり。その一部は、遙に遠方に在り。その一部は、日本支那にあるよりも遙に大なる裨益を世界の史學に與へつゝあり。其は露西亞の帕刺的兀思本なり。

僧正帕刺的兀思は、支那の京師に居りて、初に連筠蓂叢書より元

Palladius

朝祕史を得て、露西亞文に翻譯し、譯者の序論と注釋と成吉思汗の家系の圖を加へて、成吉思汗の古き蒙古物語と題し、西紀一八六六年、同治五年、慶應二年、北京なる露西亞の傳道使命の報告の第四卷に載せて出版せり。その後一八七二年、同治十一年、明治五年、蒙古文を漢字にて音譯せる十五卷の明槩の寫本を偶得て、嘗て譯せる漢文の本は、この蒙古文の摘譯なることを知れり。十五卷の明槩の寫本と云へば、阮元の「依舊鈔影寫」と云へる者と同本なるべし。その本は、標題も無く、誤字脱字多しと云へば、十二卷の今本に劣れりと見ゆ。されども帕刺的



兀思は、漢字と蒙古語とを知らる人には、この本を蒙古字の原文に復すこと難からずと云へり。又清人は、十二卷本を元槩と名づけ、錢大昕すら原本譯本の別を混じ、即ち脱必赤顔なるか、疑ひて、元の藝文志に入れたる程なるに、獨帕刺的兀思は、逸速く明譯明槩と見定めたり。蒙古史を研究する人に大なる裨益を與ふる古代蒙古文のこの珍書は、今珀帖兒不兒古大學の圖書館の藏書となれり。蒙古語學に熟達せる教授頗自捏也富は、その書の現形のまゝに、即ち蒙古文を漢字にて寫せるまゝに、露西亞文の翻譯注釋を加へて、出版せんことを企て、一八八七年、光緒十三年、明治二十年、その序文と本文即ち蒙古の過半を石印板にて印刷して學生に頒てり。その業成れりや否やは、我いまだ知らず。露西亞は、軍には負けたれども、かゝる研究に掛け

ては、我が日本よりは遙に勝れる國なり。實に軍と内政との失敗を除きては、東方經略の事に善く行届きて、大英國と共に、亞細亞の諸部落を綏懷すべき資格ある大國なり。

聖武親征錄喇失惕集史の來歴。

聖武親征錄は、蒙古秘史に關係多き古書なり。四庫全書提要の雜史類存目に「皇元聖武親征錄一卷、不著撰人名氏云云。史記元世祖中統四年、參知政事修國史王鶚請延訪太祖事蹟、付史館。此卷疑即當時人所撰上者」と云へるは、只押當に言へるにて、何も旁證すべき事なし。西域の宗王珀兒昔阿合贊の曾孫翰勒齋禿合贊の弟に事へたる喇失惕額丁eddinの著せる蒙古集史札米兀惕帖伐哩黑は、詳備せる歴史にして、親征錄の比類に非ざれども、その中の敘事に往往親征錄と符節を



合するが如き處あり。親征録の敘事は、喇失惕額丁の史に於て其に類する敘事を見出さざることなし。又この二書の敘事は、同じく蒙古祕史に本づきたり。こ見ゆる處甚だ多し。然らば二書は、祕史を閱する機會ある人の作れる者にして、親征録は、提要に言へるが如く外人の作りて上れるには非ざること疑ひなし。察罕の祕史より譯し出せる聖武開天記の名は、後世に少しも聞えず。親征録の名は、元代の書に少しも見えずして、親征録の内容は、祕史に本づきたり。こ見ゆれば、親征録は即ち開天記にして、傳寫の間に標題を改められたり。こ見て誤り無からん。清の康熙二十八年に邵遠平の著せる元史類編に、屢今の親征録の文を引きて、聖武親征記と云へり。然らば三名一物にして、元の聖武開天記は、清の初に至り聖武親征記となり。

り、乾隆中に至り聖武親征録となりて、その上に皇元を冠らせたるなり。

親征録は、乾隆中、兩淮鹽運使司にて得て内府に上り、錢大昕これを寫し取り、それより輾轉鈔寫して、大興の徐松に歸したり。道光中、平定の張穆は、徐本を寫し取り、大興の翁方綱の家の藏本を借りて對校し、更に光澤の何秋濤に授けて校正せしめたり。光緒二十年、彰南の分巡道芳郭は、何氏の校本を瓦羨の姚士達に授け、校正元親征録と題して出版せしめたり。又順徳の李文田、嘉興の沈曾植、各何氏の校本を寫し取りて校注し、順徳の龍鳳鏤は、李沈の二注を合せて、何氏校本の出版に續きて出版し、知服齋叢書に收めたり。この錄につきて、露西亞は支那よりも早く、僧正帕刺的兀思は、何校親征録



の鈔本を得て、露西亞文に譯し、西紀一八七二年、明治五年、同  
 李沈校本の出版より二十餘年前に「東方の記録」に入れて出版せり。  
 喇失怛額丁は、元の定宗二年、後深草天皇寶治元年、西紀一二四七年、哈馬丹Hamadanに生れ、醫術  
 を以て合贊汗に仕へ、成宗の大徳二年、伏見天皇永仁六年、西紀一二九八年、王國の尙書  
 となり、幹勒齋禿汗の時も、その職に續き居りき。蒙古の史を集録す  
 る事を合贊より命ぜられたりしが、大徳十一年、後二條天皇徳治二年、西紀一三〇七年、に、  
 その書成りて、幹勒齋禿汗に上り、仁宗の延祐五年、花園天皇文保二年、西紀一三一八年、讒  
 に遭ひ、阿不賽徳汗Abu Said Khanの汗汗の子に殺されたり。その書は珀兒昔阿文にて、  
 書の名は札米兀怱帖伐哩黒Jamī Ut Levārikhと云ふ。札米は集録、兀怱は「屬く」と云ふ  
 前置詞、帖伐哩黒は歴史にて、歴史の集録と云ふ義なり。下文には集史又は蒙古集史  
 など書tevarikh。その書は、亞細亞の諸種族の狀態、その地方の形勢、元帝の祖

先の事より始めて、太祖の功業を詳敘し、太宗定宗憲宗三朝の事を  
 略敘し、世祖成宗二朝は最も略し、珀兒昔阿の列王、旭烈兀より合贊  
 までの事蹟は頗る委し。その自序に據れば、當時亦勒罕Ilkhanの祕府に、蒙  
 古の文書あまた保存せられて、幹勒齋禿汗より修史の参考に用ふ  
 ることを許され、殊に阿勒壇迭卜帖兒Allan Depter（黄金の書冊）即ち金冊と云へ  
 る蒙古の歴史、汗の寶庫に藏して、別克Beg（都邑）の長老の保管し居る者  
 をも参考に用ひ、又支那、印度、畏兀兒Uigur、乞卜察克Kipchakの學者だち、殊に大官  
 人普刺惕丞相Pulad Chingisankに命じて助けを與へさせられたり。この普刺惕丞相  
 は、王國の元帥宰相にして、東方の種族の古傳歴史、殊に蒙古の其を  
 誰よりも善く知れり。云へり。その書は、又阿來額丁Alai eddin、壓塔木Ata mlik、勒克主  
 費尼Juveniの蒙古史にも多く據れり。



主費尼は、主費因の人にて、地の名を以て姓とせり。その父巴海列

丁謨罕默德主費尼は、蒙古に仕へたる故に、憲宗元年、後深草天皇建長三年、西紀一二五一年

阿來額丁は、父に従ひ蒙古に到り、憲宗登極の大聚會に會せり。西書

の前年の六月なれば、紀年に誤りあらん。元史憲宗紀、この大聚會の續きに

「以阿兒渾充阿母河等處行尙書省事、法合魯丁佐之」とある。法合魯丁

は、即ち巴海勒丁なり。その後阿來額丁は、旭烈兀の西征に従ひ、文牘

を掌り、西域既に平ぎて、地方の大吏に任ぜられ、世祖の至元二十年

後、宇多天皇弘安六年、西紀一二八三年に没りぬ。その蒙古史は、塔哩黑只罕庫沙亦と名づ

く。塔哩黑は歴史、只罕庫沙亦は世界の征服者なり。その書は、二部に

分れ、前部は、太祖の末十年の事を詳敘し、太宗定宗の事、憲宗即位の

初の事、畏兀兒合喇乞台、闊喇自姆の事、太祖太宗の珀兒昔阿征伐の

事を述べ、後部は、旭烈兀西征の事、木刺希答興亡の事を述べ、憲宗の

七年、後深草天皇正嘉元年、西紀一二五七年にて終れり。

佛蘭西の朶遜は、喇失惕額丁の集史に本づき、蒙古史を作り、西紀

一八二四年、仁孝天皇文政七年、清の宣宗道光四年、その初版を世に出せり。されども朶遜

は、喇失惕額丁の書を辭のまゝに翻譯したるに非ず、主費尼その外

あまたの舊史に據り、喇失惕額丁を増補改修して、詳備せる新史を

作れるなり。珀帖兒不兒古の教授別喇津は、喇失惕額丁の全部を露

西亞文に譯せん事を企て、その譯の成るに従ひ、珀兒昔阿語の原文

と共に「露西亞の考古學會の記事」に載する事とし、東亞細亞に住め

る禿兒克種蒙古種の諸國諸部の事を述べたる第一卷三九二―

じは、一八五八年、孝明天皇安政五年、清の文宗咸豐八年、に出版せり。蒙古の先世より太祖



元年の騰極までを述べたる第二卷は、珀兒昔阿文二三九ページ、翻譯注釋三三五ページにして、一八六八年明治元年、同治七年に世に出でたり。一八八七年、明治二十年、光緒十三年出版に取掛れる第三卷にて太祖の事蹟終り、その次に猶三卷出づる積りなりしが、成れりや否やを知らず。喇失惕額丁を翻譯したる人は、別喇津の前にもこれかれ有れども、皆別喇津の譯に敵するここ能はず。別喇津は、蒙古集史の善き寫本を、あまた使用したるのみならず、東亞細亞の諸國語に通じたることは、珀兒昔阿人の記録を解するに大なる助けとなれり。

修正蒙古秘史。

喇失惕額丁の集史は、あまたの史料に據り集録したる者なれば、元初の史として、その詳備せること、東方の史傳の企て及ぶべき

に非ず。今聖武親征録を以て集史に較べて考ふるに、集史には親征録に少しも言はざる事蹟甚だ多し。その中に、東亞細亞の種族ごも、の事、蒙古の古傳の事の如きは、普刺惕丞相の記憶より出でたる者多からん。太祖太宗の西征、旭烈兀の珀兒昔阿經略の如きは、殆ど皆主費尼の歴史に本づきたり。然らば集史の敘事の親征録ご符節を合するが如き處は、何に本づきたる者なるか。其は、疑ひもなく阿勒壇迭卜帖兒即ち金冊より出でたるなり。洪鈞の元史譯文證補に「施特自謂親見本朝譜牒史策依據成書。今以元史親征録、元秘史較之、則尤與親征録符合。用知親征録實由脫必赤顏譯出。當日金匱副本、必然頒及宗藩。否則夷夏異文、東西異地、何以不謀而合若此」云へり。本朝譜牒ごは、金冊を云ひ、金匱副本ごは、脫必赤顏の寫しを云ひ、脫必



赤顔の寫しは即ち金冊なりと云へるなり。洪鈞の此說允に當れり。然らば金冊は即ち祕史にして、紐察脫卜赤顔は、書の實名なり。阿勒壇迭卜帖兒は、書の稱號なり。喇失惕額丁の史と察罕の記とは、兄弟にして、祕史の二孤子なり。數十年契闊の友忽然として遇へるすら、嬉しさに堪へざるものなるに、數百年の閒互に見も知らざりし兄弟の二孤子相攜へて古史を語るを見るは、史學上の一快事に非ずや。

二書は同じく祕史に本づきたりとすれば、その祕史なる者は、今の祕史の原本なりや否や。この間に答ふるは難からず。二書の符合したる處、今の祕史に合はば、その祕史は、今の祕史の原本なり。合はずば、その祕史は、今の祕史の原本に非ず。合ふか合はざるかを見よ。

今の祕史に據れば、太祖の父也速該は塔塔兒人に毒害せられたるを、二書は同じく只死にたりとせり。太祖の母子、泰赤兀惕部人に棄てられてより十三翼の戰まで二十餘年の閒、祕史に據れば、訶額倫夫人艱難して諸子を長育したる事、太祖と弟合撒兒と二人にて異母弟別克帖兒を殺して、母に痛く責められたる事、太祖は泰赤兀惕に擒にせられ、困苦して逃れたる事、太祖賊を追へる時、孛斡兒出これを援け、遂に親臣となれる事、翁吉喇惕の德薛禪の女孛兒帖を迎へたる事、太祖往きて父の友王罕に謁し、父と尊びたる事、篋兒乞惕人に襲はれて、孛兒帖虜はれたる事、王罕、札木合二人の援を得て、篋兒乞惕を擊破り、孛兒帖歸りたる事、太祖と札木合と營を共にして居り、既にして分離し、諸部多く札木合を棄て、太祖に歸し、遂に推



戴して成吉思合罕Chinghis Khaqanとなしたる事、これらの大事ありて、卷二卷三の二卷に書けるを、二書は全く略きて、十三翼の戦を以て直に太祖の幼時の事に續けたり。十三翼の戦に、二書は諸將諸部落の名を列記したるに、秘史には無し。十三翼の戦は、秘史にては太祖負け、二書にては太祖勝てり。二書には照烈部長來降の事あれども、秘史には無し。幹難の林の筵會に主兒勤部と争ひ起れる時、秘史には太祖自ら鬪へりとし、二書は其の眾鬪へりさせり。泰赤兀惕の潰散、乞濕勒巴失の戦、忽刺安忽惕の戦、土兀刺河の黒林の盟などは、秘史にては、十一部の亂の後Khudaankhutにあり、二書にては、皆前にあり。十一部の亂に、秘史は十一部の首長の名を擧げたるに、二書は只六部の名を擧げて、首長の名なし。十一部の會盟は、秘史にては一回、二書にては二回なり。闊

亦田の戦は、秘史にては十一部の亂の時にあり、二書にては塔塔兒征伐の後にあり。王罕を詰責する辭、秘史は簡直、二書は繁冗なり。乃蠻の古兒別速を秘史は塔陽罕の母とし、二書は妻とせり。札木合の末路、秘史は甚だ詳かなるに、二書は一語もなし。虎の年騰極の時、秘史には、親衛の制度、諸將の恩賞に關する許多の詔勅ありて、一卷半ほどを滿たせり。二書には一語もなし。かくの如き差異、末卷までに猶多し。然らば二書の本づきたる秘史は、今の秘史の原本その儘の者に非ざるこそ明けし。

然れども二書の敘事行文、今の秘史に合へる處も亦頗る多し。その例は、今一一は擧げず。只その最も著しき者を擧ぐれば、秘史卷十、畏兀兒の使者の太祖に奏したる辭に「雲霽れて母なる日Utur（母の如）を



見氷解けて河の水を得たるが如く云云云へるが如きは、二書共にこの句を直譯したるが如き句あり。故に不咧惕施乃迭兒は、喇失惕額丁よりこの句を譯して「この句は、元朝秘史より辭通りに譯したるが如く聞え、而して秘史の作者は、喇失惕額丁と同じ本源よりその聞知を得たり云ふ證據を呈す。その證據は、實にあまたの他の例にて確められ得るなり」と云へり。この辭に少し弊あり。秘史の作者は、秘史の原本の作者を云へるならば、その原本を書き畢へたる太宗の十二年は、集史の成れる成宗の大徳十一年より六十七年前に在り。又正集十卷の成れるは太祖の世に在り。すれば、又その二十餘年前に在り。その時は、畏吾兒歸服して未だ幾年も經ず、蒙古人始めて畏吾兒字を用ふることを知りたる頃なれば、その書の前には蒙古の記録も無かるべく、その書こそは、有らゆる蒙古の記録の本源なりけれ。故に秘史と集史とに相似たる處あるは、本源を同じくするが爲に非ずして、秘史の原本は集史の或部分の本源なるが爲なり。而して集史親征錄の符合したる處にて、秘史に合はざる處あるは、いつの世にか秘史の原本に修正を加へて、二書はその修正秘史に依れるが爲なり。

何故に修正を加へたるか云ふに、二書と秘史と合はざる處を善く見れば、その理由も推料らるゝなり。也速該の毒害は、諱みて刪れるなり。母子の貧しかりし事、弟を殺せる事、擒こなれる事、妻を奪はれたる事を刪れるは、太祖の恥辱を蔽へるなり。王罕に父とし事へ、札木合を兄弟として、二人の援を得たることを刪れるは、後來の



仇敵を恩人とするを嫌へるなり。太祖始めての大戦なる十三翼の戦に負を勝と改めたる理由は、言はずとも明かなり。幹難の筵會に太祖自ら鬪へるは、餘り大人しからぬ故に改めたらん。王罕を詰責する辭を増加したるは、その罪を重くせんが爲なり。札木合の末路を省略せるは、幼時の親交に關する問答あるが爲なり。その外今は略すれども、親征録證注には一一論じたり。

かゝる修正は、太祖の美を増さんと欲する心より出でたるべけれど、却て大英雄の實傳の眞價を失へり。少時の貧苦敗辱は、後來の成功をして光を放たしむる者なり。何ぞ諱むに足らん。此等の事を氣にして、二十餘年の間の事蹟を隱蔽しては、何を以てか太祖創業の艱難を知ることを得ん。何を以てか宣懿太后の賢明功烈を知

ることを得ん。太祖少時より王罕に父事し、その援助をも受けたる故に、その後王罕讒を信じて之を除かんとしたれども、太祖は誠を推して疑はず。最も英雄の宏量を見るべし。若少時恩を受けたること無かりせば、太祖の親切は、むしろ愚に近からずや。乃蠻の滅びたる時、祕史には札木合執へられ、從容として死に就ける事を敘べ、太祖札木合の問答を委しく載せたり。蓋二人幼くして親友となり、長じて仇敵となり、干戈の間に屢相見え、たれども、互に安答(結盟)の友と呼びて、終身渝らず。張耳陳餘が怨隙一たび開けて、忽ち路人と變じたるに似ず。而して札木合の自らその罪を知り、恥を重んじ、命に安んじたるは、亦感ずるに餘りあり。札木合の叛奴を太祖の誅したるが如きは、主君を逃したる納牙阿を褒めたる事と相對し、刑賞兩なが



ら中り誠に君道に協ひ、漢の高祖の季布を赦して丁公を誅したるに比ぶべし。太祖の札木合を遇する所以に至りては、寛仁大度、義に由り禮に遵ひ、最漢高の田横を待つに勝れり。是等の美談を修正秘史は悉く刪りたりと見えて、二書には更に無し。親衛の制功臣の賞を定むる詔勅は、蒙古の史にありて典謨に比すべき者なり。是等は何故に刪られたるか。その理由を知るこそ能はず。然らばその修正は、實に拙陋なる修正なり。その修正秘史の世に傳はらずして、原本秘史の譯本の通體完善に今に保存せらるゝは、史學上の吉祥事にして、太祖の威靈の呵護に頼れるに非ずやと思はるゝ程なり。洪鈞は、別咧津の譯に由り喇失惕額丁の集史を譯し、その親征錄に合へるを見て、却て秘史の誤れるを疑へるは、秘史の原本は蒙古史の本源なること、二書の本づきたる者は修正秘史なることを知らざるが故なり。

元朝秘史、聖武親征錄、喇失惕額丁の集史等の來歴を一目に見易からしめんが爲に、左の系圖を作れり。

忙豁命紐察脫卜赤顔 (蒙古秘史) 元太祖時撰。  
Monggholun Niucha Tobchiyan

元朝秘史 十卷、續集二卷、明洪武十五年譯。

元秘史 千頃堂書目十二卷、明文淵閣書目五冊、續稿一冊。

元秘史

十卷、續秘史二卷。乾隆中、金德輿所藏、稱殘元槧本。其譯文載孫承澤元朝典故編年考第九卷。

元朝秘史

五冊十卷、續集一冊二卷。廬州知府張氏所收、稱影元槧舊鈔本。

顧廣圻校勘本

宗室盛昱藏本



文廷式鈔本

内藤湖南鈔本

李文田鈔本

沈曾植鈔本

高等師範學校鈔本

早稻田大學鈔本

成吉思汗實錄  
那珂通世和文譯

元朝祕史  
十五卷、永樂大典十先元字韻中所收。

錢大昕鈔出本

張穆連筠鈔刻本  
有譯文、無蒙文。

帕刺的兀思露西亞文譯本  
Palladius

上海復古書局石印本

李文田注刻本

元祕史  
十五卷、依舊鈔影寫、見阮元四庫未收書目提要。

帕刺的兀思影明槧舊鈔本  
十五卷、無標題、今藏于露京大學圖書館。

頗自捏也富露文譯注漢字原書刻本  
Pozdneyeff

修正紐察脫卜赤顏  
元史察罕傳稱脫卜赤顏、虞集傳稱脫卜赤顏、  
Nincha Tobchyam

太祖實錄  
成宗大德七年、翰林國史院奏進。  
元史太祖本紀

聖武開天記  
仁宗時、察罕譯脫必赤顏以成。  
聖武親征記  
邵遠平元史類編所引。

皇元聖武親征錄  
兩淮鹽政探進本、四庫全書提要存目。  
錢大昕本

徐松本  
張穆校本  
何秋濤校本

翁方綱本  
帕刺的兀思露西亞文譯本

李文田沈曾植校注本  
那珂通世證注本



阿勒壇迭卜帖兒(金冊)即修正祕史、西域宗王寶庫所藏。 札米兀惕帖伐哩黑(集史)喇失惕額丁所撰  
 Altan Depter Jami Et Tavarikh  
 塔哩黑只罕庫沙亦(世界征服史)主費尼所撰。  
 Tarikh Jihankushai

別咧津譯蒙古史——元史譯文證補洪鈞撰。其太祖本紀譯證。譯別咧津書。

朶遜蒙古史——元史證文證補其定宗憲宗本紀補異及朶赤以下諸傳皆譯朶遜書。

和文譯本の標題。

此書の原名は、忙豁侖紐察脫卜赤顏なれども、今和文に譯したる書に蒙古語の名を題しては、耳遠く聞ゆ。明人の當てたる元朝祕史の名は、久しく廣く行はれたる名なれども、元朝と云へば、元史の如く一代の事を書きたる者の如く聞えて穩かならず。原名を譯して蒙古祕史とすれば、蒙古の名は元朝よりも廣くして、蒙古源流の如く近世までの事あるが如く聞えて、元朝と云ふよりも猶穩かならず。譯書に新しき名を與ふるは屢例ある事なれば、當らざる舊名を守らんよりは、此書の内容を表すべき佳名あらば、用ひまほしと考へたり。

初は蒙古古事記と名づけんかと思へり。いかに云ふに、我が古事記は、日本最古の古書にして、古傳を古傳のまゝに正直に書き表し、古傳を研究するには最も善き書なるに、日本紀出でて、古傳に文飾を加へ、何事も漢様に書き改めれば、後の人は、その文の漢めきたるに眩惑して、その眞傳に違へる事を忘れ、後の史書は、日本紀にのみ據る事となりたるを、近世に至り古學者起りて、復古を唱へたるより、始めて古事記の貴きことは、世に知れたり。



此書も、さる類にて、蒙古人の始めて文字を知りたる頃の書なれば、據るべき舊記も無く、語部などの語り継ぎ言ひ継ぎたる事をそのまゝに書ける者なり。沙漠の朝廷にも語部などの有りけんことは、此書に韻文の甚だ多きにて推料らる。徳義の程度卑くして、羞惡の心淺かりければ、後の人ならば諱むべき程の事も、忌憚らず直書せり。恰も我が古事記に當藝志美美命と伊須氣余理比賣命との御事、倭建命の御兄を殺せ給へる事、蝦夷の征伐を命せられて、父帝を怨み給へる事、仲哀天皇の神に忿られて崩り給へる事などを皆古傳のまゝに書きたるが如く、此書にも烈祖の毒殺せられたる事、太祖の囚虜となりたる事などは、言ふまでも無く、宣懿太后は本篋兒乞惕人の妻なるを烈祖の掠め取れる事、光獻翼聖皇后の敵人に汗Merkitされたる事、拙赤太子は敵人の子ならん疑はれたる事、太祖の弟を射殺せる事、筵會の席にて鬪へる事、忽闌皇后のまだ處女なりし時、人に姦されたらん疑ひて、その體を調べたる事などを有のまゝに書きて、更に忌憚る處なし。

然るを修正祕史は、是等の恥づべき事を删除したるは、さもあるべき事なれども、是が爲に事實の聯絡を失ひ、事實の順序を紊し、左右枝梧し、首尾衡決して、前に死にたる人は後に戦ひ、後に敵する人は前に降り、是が爲に英雄の大業も、確實なる詳傳を失ふに至れり。而して喇失惕額丁は之を用ひて集史を作り、察罕は之を譯して開天記を作り、元史の太祖本紀も之に依り、元史類編その外有らゆる史編は皆元史に依れり。朶遜の蒙古史出でて、歐羅巴の史學者は皆



之を以て太祖の實傳とし、洪鈞の元史譯文證補出でて、錢大昕の卓説も「非篤論矣」と誹られたり。然らば修正祕史の勢を得たるは、我が日本紀の如くにして、此書の位置は、前時の古事記に似たり。故に余は、此書の譯本を蒙古古事記と名づけんと欲したり。

然れども此書は、又古事記と異なる處あり。古事記は、千餘年の間に渉れる古傳を今より千二百年前に書ける者なり。此書は、百餘年の間の耳に聞き目に觀たる事を今より六百六十餘年前に書ける者なり。先世の系譜を述べたる處は、我が古事記に善く似たれども、そは篇首一卷にも満たす。古事記は過半神話なれども、此書は殆ど皆實傳なり。故に此書は、上古史に非ずして、近世史なり。古の事を追敘せる歴史に非ずして、當時の事を直敘せる記録なり。之を我が古事記に擬ふるは、僭に非ざれば妄なり。その體裁最も

實錄の書に近きが故に、今は古事記の名を罷めて、實錄の名を取れり。

實錄は、唐宋以來世毎に必ず撰述せらる。天子崩ずれば、嗣帝の世には大抵先朝の實錄の撰修に取掛れり。故に實錄は、史書の中にて、事實の起れる時代に最も近き記録なり。此書の正集は太祖の時に成り、續集は太宗の時に成りたれば、嗣帝の世に撰修せるに非ずして、今帝の事蹟を今帝の世に撰修せるなり。實錄よりは寧起居注に近し。されども起居注は、天子の言動を史官の即時に記録する者なり。蒙古には固より起居注官とても無く、語部などの語れることを後に至りて書き集めたる者なるべければ、起居注には非ずして、猶實錄なり。



實錄云へばさて、事事皆確實なる者には非ず。唐の高祖實錄は、太宗の朝に成りたれば、高祖の徳を抑へて太宗の功を揚げ、宋の神宗實錄は、元祐紹聖の兩黨にて代るく、改修せり。元の實錄の疏漏なる、明の實錄の誣罔あるは、著しき事なり。この實錄にも誤りあり。南征の役に、者別の居庸關を破りたるは、太祖の八年癸酉なるを、六年辛未九年甲戌の二回とし、九年甲戌の再征は、金の遷都の後なるを、再征に由りて遷都せりとし、拖雷、出古二人の奮戦は七年壬申、潼關の戦は十一年丙子なるを、皆九年再征の時とし、潼關の寄手の大將は撒木合なるを、太祖とせり。最も甚しきは、使者主卜罕の殺されたるは、太宗三年の事なるを、この九年の處に記して、再征の役はそれが爲に起れりこそせり。西征の役、者別、速別、額台、脱忽察兒の三將を

して西域王を追はしめたるは、不合兒、薛米思堅を降したる後にあ  
るを、この役の初に書き、兀都喇兒、不合兒、薛米思堅を取りたるは、こ  
の役の初にあるを、申河(信度)の戦の後に書けり。然のみならず是等  
の征伐、世界を震盪せる大征伐の記述は、客喇亦惕、乃蠻などを敵手  
にせる戦よりも簡略なり。蓋漠北の斡兒朶に仕へたる稗田の阿禮  
は、遊牧諸國の興亡の物語をば善く記憶すれども、南夏西域の征服  
の如き世界の大局に關する入組たる事件は、理會すること能はざ  
りけらし。故に太祖太宗兩朝の事迹を論次する者は必ず此書に依  
りて折衷すべき事は、錢大昕の云へるが如くなれども、南征の事は  
親征錄、金史、元史に依り、西征の事は、主費尼喇失惕、額丁に依りて補  
はざるべからず。



此書は、太祖の祖先より書き始めて太宗の世まで及べるに、今の譯本の名に唯太祖のみを標するは、何故ぞ。祖先の事を記したるは、一卷に満たず、太宗の紀も一卷に満たず。十二卷の内十卷餘りは、皆太祖の紀にして、祖先の紀は、太祖の實錄の發端に過ぎず。太宗の紀も、太祖の實錄の結末と見らるゝが故に、太祖の名を專に用ひて標題とせり。

元太祖實錄と云はずして、成吉思汗實錄と名づけたるは、何ぞや。成吉思汗は、當時通行の尊號なり。太祖は、世祖至元三年の追號なり。數十年の後なる追號を以て題すれば、數十年の後に成れる書の如く聞ゆる嫌あり。且大徳七年に奏進せる太祖實錄は、蓋今の太祖本紀の本源にして、疏漏なりし者と見ゆれば、その疏漏なる書と名を

同じうすることを選び、當時の尊號を以て題したるなり。

成吉思合罕Chinghis Khaghanと云はずして、成吉思汗Chinghis Khanと云へるは、何ぞや。成吉思合罕は、當時の本號、成吉思汗は、後世の略稱なり。汗は、君なり。可罕は、罕の罕、君の君にして、大君なり。此書には、一たびも成吉思可罕の可を略きたる事なし。然れども太祖の大なる所以は、名に關らず。故に便宜に従ひ略稱を用ひたり。

蒙古の古文と和譯文。

蒙古語は、阿勒泰語族に屬して、我が國語と文法甚だ近く、殊にその措辭法は殆ど同じければ、語ごとに適當の譯語を當て、名詞代名詞の格、動詞の言方などを誤らざれば、自ら我が文章と爲る。譯讀するにも、漢文歐文を讀むが如く飛返り跳返る必要なし。



唯名詞代名詞に單複の別ありて、之を譯するに一一區別するこ  
 こは頗る煩はし。代名詞の複數は、我等汝等、此等、其等の如く、大抵「ら」  
 を附けたれども、此等の、其等の云へる場合には、往往「この」「その」を  
 譯したる處あり。名詞の複數も「ら」「ごも」「だち」などを附けて穩かな  
 る處、附けざれば意味の明瞭を缺く處は、必ず附けたれども、然らざ  
 る處には略けるも有り。姓氏種族の名は、單複共に原譯字のまゝに  
 書きて、複數の處には注を加へたり。例へば乞顏氏の複數は乞牙惕  
 なれば、乞牙惕(乞顏)と書けり。

否定の詞は、我にては助動詞なれども、彼にては副詞なり。その否  
 定の副詞は、兀祿と額薛との二つあり。兀祿は漢語の「不」、額薛は漢語  
 の「未」なり。例へば幹惕罷は去りきにて、兀祿幹惕罷は去らざりきな

り。額薛も殆ど之に同じく、大抵は「いまだ」云ふ副詞を添ふるに及  
 ばず。又この副詞は、必ず動詞のすぐの上にありて、漢文の如く間に  
 他の詞を挿むこと無し。否定命令即ち禁止の詞も、副詞なり。例へば  
 幹惕秃該は去れなり。これの上に禁止の副詞布を添ふれば、去るな  
 の意となる。幸に我が古語に勿云ふ禁止の副詞ある故に、それを  
 用ひて「勿去りそ」を譯せり。

持格の代名詞は、大抵は必ずその屬する名詞の下に入る。我が子  
 來よ「こ云ふ」ことを「子我が來よ」云ひ、「汝の父居るか」云ふことを  
 「父汝の居るか」云ふ。此等は、我が措辭法に従ひ、語の順序を改めて  
 譯せり。主格の代名詞は、大抵には必ず動詞の下に入る。「我大に喜べ  
 り」云ふことを「大に喜べり、我」云ひ、「汝我」然言はざりしか「を」我



然言はざりしか、汝なんぢ云ふ。目的格の代名詞も、動詞の下に廻まはさる  
 ることあり。我等力を盡して彼等を助けんを、我等力を盡して助け  
 ん、彼等を、又は力を盡して助けん、彼等を我等と云ふ。此等は、皆原の  
 順序のまゝに譯せり。又敘事の文に、主格は必ずしも上にあらず。帖  
 木眞を泰赤兀惕執へ往きて、甲の逃げたるを見て乙は急ぎ、甲を  
 乙に追はしめて丙は續き、甲に勧められて乙を丙は云云など。此等  
 は、本のまゝに譯すべきは、云ふまでも無く、すべて主格の位置を場  
 合に由りていづこにも自由に動かし得るは、てにをはを多く用ふ  
 る國語の特長にして、我が國語にても、漢文訓讀體の流行らぬ頃ま  
 では、蒙古文の如くなりしなり。

又蒙古の古語は、沙漠の外に獨立して、漢語梵語の影響を少しも

蒙らず、純粹清淨なる處女國語なり。支那印度の文物宗教の影響を受けざ

りども、本論の外なれば、こゝには言はず。數千の名詞の中にて、漢語の轉訛おほしきものは、

兀眞は夫人の轉、大石は太師の轉、領昆は令公の轉の類に過ぎず。外

國の地名人名を呼ぶにも、大抵蒙古名あり。支那人を乞壇、その複乞

塔惕、高麗人を莎郎合、その複莎郎合、思金國皇帝を阿勒壇罕、宋を趙

官趙家の轉、西夏を合申河野、狐嶺を忽捏堅、荅巴居、庸關を察卜赤牙

勒龍虎臺を失喇客額兒、黃河を失喇木唵と云ふ。又外國の名稱を採

用ひても、何程か音を易へ、又は蒙古の語尾を加ふ。幹惕喇兒を兀都

喇兒、兀兒堅只を兀隴格赤と云ひ、欣都人を欣都思惕、嚕思露西人亞を

幹魯速惕、乞卜察克人を乞卜察兀惕、阿昔人を阿速惕、中亞細亞の抹

哈篋惕、教徒なる撒兒惕人を撒兒塔兀勒と云ふ。此等は、皆蒙古の音

Mohammed Sartai Kipchak Uigherji Uronghechi Kibehant Asi Hindust Asut



をそのまゝに譯して、本名を注に擧げたり。

蒙古文の甚だ奇異にして甚だ面白きは、韻文多き事なり。その韻文は、皆巧に頭韻を排べたる者にして、漢文には固よりその法なく、同じ語族なる我が國語にもその例希なり。漢文には雙聲と云ひて、參差、綿蠻、鞠躬、踞踏の如く、發聲（の成音の首）同じき字を二つ重ねる詞は多けれど、蒙古の頭韻は、それには非ず。我が古歌に「たきのおこは、たえて久しくなりぬれぞ、なこそながれて、なほ聞えけれ」と云へる如く、毎句の頭又は毎語の頭に、同じ成音を置きて、雙音の如く、父音の音のみ同じき非ず。語調を面白くするなり。この語調は、日本語にては、かぐげん、古諺より、喜怒哀樂の情最も適して聞ゆれども、蒙古語にては、格言、古諺より、喜怒哀樂の情を抒ぶる辭、教訓の辭、詰責の辭、悔謝の辭に至るまで、皆この韻文を

用ふ。その中には物語を傳へたる人の作れる文句も多かるべけれど、ぐらんらいども、元來蒙古語にかゝる流行ありし故に、作れる人も作れるなるべし。然らばかゝる文章、しやうとく特種の修辭を加へたる言語は、もん蒙古人の文字を知らざりし時より行はれたるなり。日本人は千五百餘年の前、印度人は三千餘年の前、文字に依らずして文章ありし事あるは、文字は無くとも開化の度稍進みたる時なるが、馬の乳を飲み、羊の皮を着、穹廬に住みて、射獵を業とせる純夷の民にも夙くより文章ありしは、めづ珍しき事なり。

その韻文の例を少し述べん。童男女の眉目清秀なるを形容して「目に火あり、面に光あり」と云ふ。目は你敦、面は你兀兒にて、你を頭韻とせり。火は合勒、光は格咧にて、合と格と聲近きが故に通韻に用ひ



たり。余が譯文に你敦を眼と譯せず、你兀兒を顔と譯せずして、目と面とにしたるは、蒙古の頭韻に眞似たる洒落なり。この句の韻の踏方には非ず、戴方は、隔句韻にて、上句の頭と下句の頭と韻を押し、上句の腹と下句の腹と韻を押し。この隔句韻は、その例甚だ少し。普通の押韻は、上句の語ごもに或韻を重ね、下句の語ごもに他の韻を重ねるなり。例へば耳目の銳き事を、鼪となりて聽き、銀鼠となりて視る。云ふ。鼪は鎖耶合、聽くは莎那思にて、鎖と莎と通じ、銀鼠は兀年、見るは兀者にて、兀を韻とせり。もし之を譯して韻を合はせん。ならば、動物の名を換ふるより外にすべなし。狐となりて聽き、角鴟となりて視る。なごは、いかゞ。又窮乏子立の状を、影より外に伴なく、尾より外に鞭なし。云ふ。影は薛兀迭兒、尾は薛兀勒にて、薛兀を韻

とせり。伴と鞭とは韻を成さざれば、隔句韻には非ず、二句を一句として、只一つの韻を押したるなり。日本語ならば、影の外に伴なく、體の外に物なし。なご云ひたし。すべて頭韻ある文は、對句より成り、短きは二句、長きは二節、或は二段なれども、稀には三句又は三節にして、三韻を用ふる。ここあり。又極めて稀には十句もありて、韻も屢換へて、對句を成さざるもあり。前に引きたるは、いづれも短き二句の例なれども、不兒罕嶽の神に太祖の感謝したる辭の中段なごは、二節づつの二段より成り、前段は不の韻を九つ疊み、後段は合の韻を九つ疊みたり。韻文は、譯すれば、全く興味を失ひて、散文よりも拙くなる故に、譯文の左に原字の韻語を一一書き添へて、その文の拙く語に穩かならざる處あるは、韻文の爲なることを知らしめん。とす。



蒙古語に、猶一つ面白き事あり。そは、梵語にて散提сандиと稱ふる協韻の法にして、蒙古語のみならず、滿洲語、突兒克語тукなど、阿勒泰語族に屬する諸國の言語に行はるゝ一種の音便なり。名詞の接尾語にては、助動詞動詞など組立まつる下下のことばは、上の名詞動詞のおもなる母音の力に依りて、己が母音を變へて、その母音に同じく化するなり。例へば、兄弟を阿合迭兀аха дауと云ひ、兄兄ども弟弟どもを阿合納兒迭兀捏兒аха нар дау неと云ふ。納兒も捏兒も「ごも」の意にして、上に合合あれば、納納と云ひ、上に迭迭あれば、捏捏と云ふ。てにををはの「に」を額額とも阿阿とも云ふ。幹難木幹難（河難）の帖哩溫帖哩溫（源）にに云ふ時は、帖哩兀捏帖哩兀捏と云ひ、不兒罕合兒敦不兒罕合兒敦にに云ふ時は、合兒都納合兒都納と云ふ。「より」又は「から」と云ふことを阿察阿察とも額扯額扯とも云ふ。仙臺仙臺よりを仙答牙察津輕仙答牙察津輕よりを津合喇察津合喇察と云ひ、越前越前よりを

越者捏扯越者捏扯と云ふ。此等は、皆阿阿と額額との變りの例なるが、幹幹と兀兀この變りも、これに同じ。この協韻あるが爲に、蒙古文の音讀には一種の興味あれども、譯文には全くその跡形をも失へり。

又蒙古語には、勒勒又は兒兒にて始まる詞なし。外國の人の名人種の名なごを表せる詞には、まれに刺刺又は喇喇に始まれる名あれども、蒙古の古き詞には、魯阿魯阿又は魯額魯額と云ふ名詞の接尾語の外には、詞の頭に勒兒勒兒の音あるもの更になし。魯阿魯額は、漢字の興興の字、日本語の「ごごも」の意にして、必ず名詞の尾に接く詞なれば、これも、詞の頭に魯魯の音ありとは言ひ難し。日本の古き詞にも、助動詞のらるゝらむらしの外には、漢字の等の意なる「ら」と云ふ接尾語一つあるのみにて、良行良行に始まれる詞の更になきは、蒙古語に善く似たり。蒙古



語も、近き世となりては、外國の詞あまた入り交りて、勒兒に始まる詞のふえたるは、日本語に良行の音に始まる詞のふえたるに異ならず。すべて蒙古語も、他の國國と同じく、古と今と變遷多ければ、亞細亞の諸國の言語を比較研究せんと欲する人は、その古語に依らずばあるべからず。それには、祕史の蒙古文は、最も善き材料なり。

今本は、廬州府の張太守以來、數回の轉寫を経たれども、通體完善にして、誤脱甚だ少し。字の偏旁の誤り、字の左なる音符の脱ちたるなどは、往往あれども、前後にある同じ語を探して比較すれば、改正せられざるこそ無し。稀には、慥に脱語脱文ありと思はるゝ處あり。補ひ得る限は、補ひて譯せり。又原文には脱語なければ、譯すれば語の足らざるこそあり。賴朝の妻政子と云ふべきを、蒙古文にては

賴朝の政子と云ふことあり。其等は「妻」の字を補へり。すべて補へる文には、蓋底この符」を用ひて、注釋に用ふる括弧の符」を區別せり。又明の時に已に解しかねたりと見えて、旁譯を施さざる處あり。其等は、解し得らるゝだけは譯し、解せられざる者は、敢てごまかさず、原語をそのままに挙げたり。其等も、今の蒙古語と比較して考へなば、解せられざる事も無かるべければ、他日又試みん。

此書の本文は、處處に段落を切りて、別項に書き出せり。其は、蒙古字の原本に初より然りしにはあらで、明人の譯したる時、譯文を本文の間に挿まんが爲に切りたりと見えて、無理なる處あり。例へば「何何を望み見て言はく云云」がある「見て」にて前段を止め、「言はく云云」より後段の始まるが如き類屢あり。今譯文のみの書にては、この



切方に拘るにも及ばざれども、數百年來この形にて傳はれる者を直すもいかゞと思ひて、姑く本の切方に従へり。續くべき處にて斷れたる處あるは、それが爲なり。

元朝祕史の音譯法。

此書は、明人の蒙古語を研究せんが爲に譯したる者なれば、蒙古文を音譯するに、顧炎武の「紐切其字、以諧其聲音」と云へる如く、父音の清濁輕重、母音の開合長短、皆善く諧ひて、七百年前の蒙古の聲音を蓄音器に蓄へたるが如し。

此書を譯せる史臣、一人は翰林侍講火原潔、一人は編輯馬懿赤黒にして、馬懿赤黒又は馬沙亦黒の蒙古人なることは、その名にて知らる。火原潔も、火と云ふ姓は漢人に聞き慣れざる姓なれば、蒙古の

火嚙刺思氏Khorlasなごの單姓たんせいとなれる者ならん。支那の字音は、南北朝以來常に南北に分れて、南音には、北音の如き淆訛なし。此書は、明の朝廷の南京に在りし時の譯なれば、音譯には南音を用ひたり。蒙古語に精しき蒙古人にて、淆訛少き南音を以て音譯したれば、此書の如く正しき音譯は、他に比類少し。

今此書に用ひたる音譯漢字を蒙古字の下に書き、我が五十音圖の如き横縦の列に排ぶれば、左の如し。二重音と撥ぬる音とは略けり。發下に書き添へたり。

阿行	阿の段	額の段	宜の段	幹の段	兀の段	變韻の段	父音
ア	ア	エ	イ	オ	ウ	ウ	ウ
ア	ア	エ	イ	オ	ウ	ウ	ウ
ア	ア	エ	イ	オ	ウ	ウ	ウ
ア	ア	エ	イ	オ	ウ	ウ	ウ
ア	ア	エ	イ	オ	ウ	ウ	ウ
ア	ア	エ	イ	オ	ウ	ウ	ウ
ア	ア	エ	イ	オ	ウ	ウ	ウ
ア	ア	エ	イ	オ	ウ	ウ	ウ
ア	ア	エ	イ	オ	ウ	ウ	ウ



塔行	牙行	札行	察行	沙行	撒行	中合行	中合行	哈行
ㄊ	ㄎ	ㄌ	ㄎ	ㄕ	ㄕ	ㄎ	ㄎ	ㄎ
塔	牙	札	察	沙	撒	中合	中合	哈
ta	ya	ja	cha	sha	sa	gha	kha	ha
ㄊ	ㄎ	ㄌ	ㄎ	ㄕ	ㄕ	ㄎ	ㄎ	ㄎ
帖	也	者	徹	雪	薛	格	客	赫
te	ye	je	che	she	se	ge	ke	he
ㄊ	ㄎ	ㄌ	ㄎ	ㄕ	ㄕ	ㄎ	ㄎ	ㄎ
的	亦	只	赤	失	昔	吉	乞	希
ti	yi	ji	chi	shi	si	gi	ki	hi
ㄊ	ㄎ	ㄌ	ㄎ	ㄕ	ㄕ	ㄎ	ㄎ	ㄎ
脫	約	勻	綽	莎	鎖	中豁	闊	訶
to	yo	jo	cho	sho	so	gho	kho	ho
ㄊ	ㄎ	ㄌ	ㄎ	ㄕ	ㄕ	ㄎ	ㄎ	ㄎ
禿	余	主	出	擲	速	古	中忽	許
tu	yu	ju	chu	shu	su	ghu	khu	hu
ㄊ	ㄎ	ㄌ	ㄎ	ㄕ	ㄕ	ㄎ	ㄎ	ㄎ
禿	余	主	出	擲	速	古	闊	許
tö tü	yö yü	jö jü	chö chü	shö shü	sö sü	gö gü	kö kü	hö hü
ㄊ					ㄕ	ㄎ	ㄎ	
惕					思	克黑	克黑	
t	y	j	ch	sh	s	g gh	k kh	h

汪行	刺行	刺行	馬行	巴行	納行	荅行
ㄎ	ㄎ	ㄎ	ㄎ	ㄎ	ㄎ	ㄎ
汪	刺	刺	馬	巴	納	荅
wa	ra	la	ma	ba	na	da
ㄎ	ㄎ	ㄎ	ㄎ	ㄎ	ㄎ	ㄎ
	列	列	篋	別	捏	迭
we	re	le	me	be	ne	de
ㄎ	ㄎ	ㄎ	ㄎ	ㄎ	ㄎ	ㄎ
爲	里	里	米	必	你	的
wi	ri	li	mi	li	ni	di
	ㄎ	ㄎ	ㄎ	ㄎ	ㄎ	ㄎ
	羅	羅	抹	孛	那	朶
	ro	lo	mo	bo	no	do
	ㄎ	ㄎ	ㄎ	ㄎ	ㄎ	ㄎ
	魯	魯	木	不	訥	都
	ru	lu	mu	bu	nu	du
	ㄎ	ㄎ	ㄎ	ㄎ	ㄎ	ㄎ
	魯	魯	木	不	訥	都
	rö rü	lö lü	mö mü	bö bü	nö nü	dö dü
	ㄎ	ㄎ	ㄎ	ㄎ	ㄎ	ㄎ
	兒	勒	木	卜		惕
	r	l	m	b	n	d

この表の蒙古字の形は、<sup>かたち</sup>搠米惕の蒙古字引に據れり。一音に二字づつ書きたるは、<sup>ことば</sup>語の頭に附く形と語の尾に附く形とを書分けた



るなり。變韻の段は、語の尾に附くこと稀なるが故に、その形を略けり。末の段なる母音なき音を表せる字は、語の頭に附くことなければ、中に挟まる形を尾に附く形を書分けたり。搦米惕の蒙古字引は、今の蒙古語を集めたるものにして、合行の合 か gha 闊 ko 忽 ku を ha ho hu の如く讀ませて、別に哈行の音に始まる語はあらざる故に、この表には、哈行の音を表せる蒙古字を闕きたり。されども秘史には明かに哈行の音を表せる譯字あれば、古代は別に哈行の音ありて、合行の字を以てその音をも表したらんと思はる。この表に依れば、蒙古の音には、撒行の濁音、即ち z を父音とせる成音なし。札行の只 ji は、察行の赤 chi の濁音にして、撒行の昔 si の濁音に非ず。又 f を父音とせる輕唇の清音も p を父音とせる重唇の清音 巴行の清音 もなし。 h を父

音とせる哈行の音は、唇音に非ず、喉音に屬して、合行の輕き音なり。合 か kha 忽 く khu 合 が gha 豁 ご gho の四字、實は左に中の字を小く附けたるは、この三字は本哈行の音 na hu ho なるを合行の清濁音に借用ひたることを示せる符號なり。罕 かん khan 含 かん kham 晃 こん khong 渾 こん khun 孩 かい khai 灰 かい khui など、それに同じ。刺行の六字、實は左に小舌の字あるは、この五字は、みな刺行の音、即ち l を父音とせる音にして、漢字には、l を父音とせる音なきが故に、刺行の字を借りて、捲舌音なることを示せる符號を附けたるなり。闌 らん ram 藍 れん ren 連 れん ren 廉 れん rem 鄰 りん rin 零 りん ring 林 りん rim 欒 ろん ron 侖 ろん run など、みな同じ。黑 く kh 克 く k 黑 ぐ gh 克 ぐ g 思 す s 惕 と t 惕 ど d ト ぶ b 木 む m 勒 る l の十字、七字は、父音のみにて母音なき音を譯したる字にして、此書には、必ず右に倚せて小く書けり。馬行の兀の段に木 む mu の字、變韻の段に木 む mü の字あれども、木 む mu 木 む mö mü は、大字に書けるが故に、



細字旁書の木<sup>m</sup>と混るゝここなし。刺行の兒<sup>er</sup>も、父音のみなれども、この字の音は、本より母音なきが如く聞ゆる音なれば、右にも倚せず、大字に書けり。

右の表を見ん人は、蒙古字のいかにも同じ形にて異なる音を表せるもの多きここに心附くなるべし。阿の段と額の段とは、阿行合行合行沙行の外はみな同じ。幹の段と兀の段とは、合行合行の外はみな同じく、その二行も、語の頭にては同じ。元來蒙古字の本なる委兀兒字は、失哩亞の文字より出でたるものにして、失哩亞の文字は、母音の表し方十分ならざりしかば、蒙古もその例に倣ひ、母音の符號備はらず。殊に蒙古語には協韻の法ありて、阿と額と互に變り、幹と兀と互に變る故に、阿幹の二段を以て額兀の二段を兼ねること

は、却て簡便なりしならん。又合行の濁音には、濁音の符號を附けたるもあり、附けざるもあり。塔行の濁音は、全く清音に同じく、何の符號をも附けず。我が國にては、古事記日本紀萬葉集など清濁音の區別正しかりしに、後の世の人人は不精になりて、濁點を附くることを厭ひ、歌人などは濁を打たぬを高雅なりと思ふに至れるを見れば、蒙古字の清濁音を區別せざるも怪むに足らず。蒙古字にはかくの如く同形異音頗る多けれども、蒙古語を語り居る人には、之を讀むに何の差支も無かるべし。されども外國人にて、蒙古文を讀み、その發音を誤らざらんことは、甚だ難き業なるに、幸にも此書の音譯は、阿額の二段、幹兀の二段、哈合合の三行、合の清濁二音を同字、塔塔の二行など、皆正しく譯し分けたれば、蒙古の古音を學ぶには、蒙古字の







知り、易からしめんが爲に、種種なる異字を用ひたり。河は木連なるを沐漣と書き、山の名の不兒罕を不喇罕と書き、貂鼠は不魯罕なるを不驢罕と書き、馬は抹里又は抹鄰なるを秣驪又は秣麟と書き、門は額兀顛なるを額閏と書き、弓は訥木なるを弩木と書き、望むは合刺なるを合喇と書き、行くは牙不なるを迓步と書き、食ふは亦迭なるを亦啞と書ける類なり。今固有名詞に其等の異字ある時は、みな一定の音譯字に改め書けり。

近世史書に用ひらるゝ音譯の内にては、乾隆の勅撰なる遼金元史語解は稍法則あり。その契丹女真蒙古の諸國語の解釋には誤り多く、三史の音譯字を悉く改定したるは、殆どみな附會杜撰なれども、一定の音に一定の字を當てたるだけは、從來の史書に勝れり。乾隆以後の史書は、多くその音譯法に従ふが故に、今祕史の音譯と比較せんが爲に、その音譯字を滿洲字の下に書いて排列するに左の如し。

阿行	喀行	噶行	哈行	薩行
イ	カ	ガ	ハ	サ
ア	カ	ガ	ハ	サ
イ	カ	ガ	ハ	サ
エ	ケ	ゲ	ヘ	セ
エ	ケ	ゲ	ヘ	セ
イ	キ	ギ	ヒ	シ
イ	キ	ギ	ヒ	シ
オ	コ	ゴ	ホ	ソ
オ	コ	ゴ	ホ	ソ
ウ	ク	グ	フ	ス
ウ	ク	グ	フ	ス
ナ	ナ	ナ	ナ	ナ
ナ	ナ	ナ	ナ	ナ
フ	フ	フ	フ	フ
フ	フ	フ	フ	フ
ク	ク	ク	ク	ク
ク	ク	ク	ク	ク
ン	ン	ン	ン	ン
ン	ン	ン	ン	ン
ス	ス	ス	ス	ス
ス	ス	ス	ス	ス











秘史にては阿行の幹の段。なれども、こゝにては幹行の阿の段なり。喇行の音に口扁をつけたるは、秘史の舌の字を書けるよりは簡便なり。克は、喀行の額の段 ke にも父音 k にも用ひ、特は、塔行の額の段 te にも父音 t にも用ひ、穆は、瑪行の烏の段 mu にも長烏の段 mū にも父音 m にも用ひ、呼は、喇行の額の段 re にも父音 r にも用ひて、父音の場合に細字旁書の法を取らざるが故に、父音と成音と常に混れ易し。これは秘史の書方より劣れり。近頃の人は、大抵父音なる勒、呼の代りに爾の字を用ふる故に、額の段なる勒、呼に混るゝことはなれども、その代りに拉行 l と喇行 r との區別を失へり。

蒙古字滿洲字の書方用法などは、この序論に詳説し難く、又詳説すべき限にあらざれども、余が譯本を讀まん人、明譯秘史に據れる

固有名詞の譯字の、近世通行の書に異なるを怪まんことを想ひ、又明譯秘史を讀まんとする人、近世通行の音譯法と異なるを知らずして、漢字音譯の蒙古文を音讀する塔都奇を得難からんことを憂へて、その特必奇にもとてかくなん。

札	客	兀	の	成	Chinghis	合	竿	騰	格	哩	昇	合	該	只	勒	より	六	百	七	十	九	年
jaura	ke ordo	u	choina	chin	khaghan	gagan	tengeri	morin	il	chaknai	ji	gagai	ji	terin	sara	khankhan	khaghan	ghoyar	ghoro	khan	ghoyar	ghoro
喇	兒	稱	亦	吉	思	罕	格	只	勒	の	納	木	兒	帖	哩	兀	的	撒	喇	に	納	訥
なる	朶	へ	納	合	罕	竿	哩	勒	納	木	兒	兒	帖	哩	兀	的	撒	喇	に	納	訥	忽
兀	朶	ら	なる	罕	竿	竿	哩	勒	納	木	兒	兒	帖	哩	兀	的	撒	喇	に	納	訥	忽
出	朶	ら	なる	罕	竿	竿	哩	勒	納	木	兒	兒	帖	哩	兀	的	撒	喇	に	納	訥	忽
干	朶	ら	なる	罕	竿	竿	哩	勒	納	木	兒	兒	帖	哩	兀	的	撒	喇	に	納	訥	忽
格	朶	ら	なる	罕	竿	竿	哩	勒	納	木	兒	兒	帖	哩	兀	的	撒	喇	に	納	訥	忽
兒	朶	ら	なる	罕	竿	竿	哩	勒	納	木	兒	兒	帖	哩	兀	的	撒	喇	に	納	訥	忽
に	朶	ら	なる	罕	竿	竿	哩	勒	納	木	兒	兒	帖	哩	兀	的	撒	喇	に	納	訥	忽
當	朶	ら	なる	罕	竿	竿	哩	勒	納	木	兒	兒	帖	哩	兀	的	撒	喇	に	納	訥	忽
れる	朶	ら	なる	罕	竿	竿	哩	勒	納	木	兒	兒	帖	哩	兀	的	撒	喇	に	納	訥	忽
阿	朶	ら	なる	罕	竿	竿	哩	勒	納	木	兒	兒	帖	哩	兀	的	撒	喇	に	納	訥	忽
喀	朶	ら	なる	罕	竿	竿	哩	勒	納	木	兒	兒	帖	哩	兀	的	撒	喇	に	納	訥	忽
吉	朶	ら	なる	罕	竿	竿	哩	勒	納	木	兒	兒	帖	哩	兀	的	撒	喇	に	納	訥	忽
溫	朶	ら	なる	罕	竿	竿	哩	勒	納	木	兒	兒	帖	哩	兀	的	撒	喇	に	納	訥	忽
都	朶	ら	なる	罕	竿	竿	哩	勒	納	木	兒	兒	帖	哩	兀	的	撒	喇	に	納	訥	忽
兒	朶	ら	なる	罕	竿	竿	哩	勒	納	木	兒	兒	帖	哩	兀	的	撒	喇	に	納	訥	忽
額	朶	ら	なる	罕	竿	竿	哩	勒	納	木	兒	兒	帖	哩	兀	的	撒	喇	に	納	訥	忽
朶	朶	ら	なる	罕	竿	竿	哩	勒	納	木	兒	兒	帖	哩	兀	的	撒	喇	に	納	訥	忽
豁	朶	ら	なる	罕	竿	竿	哩	勒	納	木	兒	兒	帖	哩	兀	的	撒	喇	に	納	訥	忽
囉	朶	ら	なる	罕	竿	竿	哩	勒	納	木	兒	兒	帖	哩	兀	的	撒	喇	に	納	訥	忽
罕	朶	ら	なる	罕	竿	竿	哩	勒	納	木	兒	兒	帖	哩	兀	的	撒	喇	に	納	訥	忽
豁	朶	ら	なる	罕	竿	竿	哩	勒	納	木	兒	兒	帖	哩	兀	的	撒	喇	に	納	訥	忽
牙	朶	ら	なる	罕	竿	竿	哩	勒	納	木	兒	兒	帖	哩	兀	的	撒	喇	に	納	訥	忽
兒	朶	ら	なる	罕	竿	竿	哩	勒	納	木	兒	兒	帖	哩	兀	的	撒	喇	に	納	訥	忽
富	朶	ら	なる	罕	竿	竿	哩	勒	納	木	兒	兒	帖	哩	兀	的	撒	喇	に	納	訥	忽
只	朶	ら	なる	罕	竿	竿	哩	勒	納	木	兒	兒	帖	哩	兀	的	撒	喇	に	納	訥	忽



成吉思汗實錄の序論終り。

成吉思汗實錄卷の一

(蒙古語の名は忙豁侖紐察脫卜察安ば蒙古

の秘史。忙豁侖は蒙古の紐察は秘密、脱卜察安は實錄なり。委しくは序論の初に言へり。明譯本には元朝秘史と題して、その下に分注二行あり。右は忙豁侖紐察の五字なり。左は、脱卜察安の四字なるべきを、今の鈔本には、卜の字を脱せり。トは、母音なき巴行の音を譯せる字にて、細字旁書なるが故に、影寫の際脱し易し。ト本文にも、卜の字の脱ちたるは、屢あり。二行の分注に、右五字に) 本左三字なる筈なれば、卜の脱ちたりけんこと疑ひなし。

元太祖在時、漠北文臣無名氏、以蒙古文委兀兒字撰述。明洪武十五年翰林

侍講火原潔等、漢字音譯俗語旁譯。日本明治三十九年、盛岡那珂通世、以和

文直譯附校注。

成吉思合罕の根原

上天より命ありて生れたる蒼き狼ありき。(蒙古語孛兒帖赤那、

源流布爾特齊諾。この注に引ける蒙古源流は、乾隆の史臣の翻譯せる漢文

元祖なる狼鹿



にて、蒙古源流の蒙古文の原本を得て寫し取れる由なり。その書は、蒙古文祕史に次ぎて、史學文學に益ある珍書なり。その書に據りて漢譯本を考訂せんには、恰も蒙古文祕史に據りて明譯俗文の誤謬を正し得るが如くなるべし。その妻なる慘白き牝鹿ありき。語

豁埃馬喇勒、源流郭翰瑪喇勒。郭翰は美騰吉思（海又は大）を渡りて來ぬ。幹難木噠（幹難河、鄂嫩河）の源に不兒罕合勒敦（不兒罕嶽、即史闡闢の傳）不里罕哈里敦、源流布爾干噶拉敦（今大肯特山）に營盤して、生れたる巴塔赤罕（源流必塔察干）ありき。

巴塔赤罕より合兒出まで八世

巴塔赤罕の子塔馬察（源流特墨徹克）塔馬察の子豁哩察兒篋兒干（篋兒干は善射者なり、蒙古源流）和哩察爾墨爾根（豁哩察兒篋兒干の子）阿兀站孛囉兀勒（源流阿固濟木博郭囉勒）阿兀站孛囉兀勒の子撒里合察兀（源流薩里噶勒濟固）撒里合察兀の子也客你敦（譯すれば大眼、蒙古源流には尼格尼敦、譯すれば獨眼、下の都蛙鎖也客你敦の子、擣

鎖赤（源流薩木蘇齊）擣鎖赤の子合兒出（源流哈里哈爾楚）。

合兒出より曾孫まで

合兒出の子孛兒只吉歹篋兒干（孛兒只吉、善射者、蒙古源流）博爾濟吉台墨爾根（忙豁勒眞豁阿、蒙古部の美蒙古勒津郭翰哈屯）云ふ妻ありき。孛兒只吉歹篋兒干の子脫囉豁勒眞伯顏（譯すれば脱者、蒙古源流）都喇勒津巴延（孛囉黑臣豁阿、源流博囉克沁郭翰哈屯）云ふ妻、孛囉勒歹速牙勒必（云ふ若黨、答亦兒孛囉）云ふ二匹の駿れたる駟馬ありき。脱囉豁勒眞の子、都蛙鎖豁兒（源流都幹索和爾）朶奔篋兒干（元史太祖本紀、宗室世表、陶宗儀の輟耕錄）脱奔咩哩健、源流多本墨爾根（二人ありき）。

都蛙鎖豁兒の獨眼

都蛙鎖豁兒は、額の中に獨眼あり、三日程の地を望むなり。



一日都蛙鎖豁兒は、朶奔篋兒干なる弟、不兒罕嶽の上より望みて、統格黎克  
上れり。都蛙鎖豁兒は、不兒罕嶽の上より望みて、統格黎克  
豁囉罕（統格黎克小河。元史本紀統急里忽魯源流通格里克呼魯歡）に沿ひ一  
羣の民起ちて入りて來ぬるを望みて見て、

言はく彼の起ちて來ぬる民の内、一つの黒き輿ある車  
の完勒只格（明譯車前）に一人の女子妍きあり。與へられず（嫁が）  
あらば、朶奔篋兒干弟、汝が爲に求めん。云ひて朶奔篋兒干  
弟を見に遣りぬ。

朶奔篋兒干彼の民の處に到れば、實にも美しく（蒙語）妍く  
聲（譽）聞え名の大なる阿闌豁阿（阿闌媛。豁阿は、美より轉じて、媛即ち  
美女なり。元史本紀世系表、輟耕錄、  
阿闌果火源流阿掄郭幹（阿闌媛。豁阿は、美より轉じて、媛即ち  
美女なり。元史本紀世系表、輟耕錄、の名ありて、人にも與へられざる女

子なりき。

彼の羣居る民は、又闊勒巴兒忽眞脫古木（闊勒巴兒忽眞の隘  
處。親征錄、元史本紀

八元忽眞之隘（額兒忒曼は、巴兒古臣秃古嚕姆と  
云ふ。今の拜喀爾湖の東岸なる巴爾古精（巴兒古臣  
之隘。額兒忒曼は、巴兒古臣秃古嚕姆と云ふ。今の拜喀爾湖の東岸なるの主人

巴兒忽歹篋兒干（巴兒忽惕部  
の善射者）の女巴兒忽眞豁阿（巴兒忽惕部の美女。蒙  
古源

流巴喇郭沁郭幹（巴兒忽惕部の善射者）云ふ女子を豁哩秃馬惕（喇失惕額丁の  
蒙古集史に依

れば、秃馬惕は、巴兒古惕の中の一部落にして、巴兒古臣秃古嚕姆の地に住めり  
と云ふ。されども下の阿哩黑兀孫は、今の伊爾庫河ならば、秃馬惕の地は、拜喀爾

湖の西に在るべし。元史兵志に、太僕寺の官人豁哩刺兒台篋兒干（蒙古  
源流

郭哩岱默爾根（巴兒忽惕部の善射者）に與へられたりき。豁哩秃馬惕の地にて阿

哩黑兀孫にて（阿哩黑の水。阿哩克烏遜。高寶銓の說に、今の伊爾庫河なりと云ふ。）

豁哩刺兒台篋兒干の妻巴兒忽眞媛より生れたる阿闌媛（阿闌媛。豁阿は、美より轉じて、媛即ち  
美女なり。元史本紀世系表、輟耕錄、

云ふ女子然り。



豁哩刺兒台篋兒干は、豁哩秃馬惕の地の内、貂鼠青鼠野獸ある地を差止め合ひて(仲間内にて)互(譯)憂へ合ひて(明)豁哩秃馬敦地面貂鼠青鼠野物被自火裏禁約不得打捕的上頭煩惱了(譯)豁哩刺兒(禁約の蒙語。親征錄、元史本紀、火魯刺思)姓となりて、不兒罕嶽の野獸を捕るに好くある地好し(こて)不兒罕嶽の主人不兒罕孛思合黑三晒赤伯顏兀噶孩(譯すれば、不兒罕を起したる。名は晒赤長者、姓は兀噶孩)の處に起ちて來たりき。豁哩秃馬惕の豁哩刺兒台篋兒干の女にて阿哩黑兀孫に生れたる阿蘭媛をそこに求めて朶奔篋兒干の取れる縁故は、かくあり。

朶奔篋兒干の子

阿蘭媛は、朶奔篋兒干の處に來て、二人の子を生めり。不古訥台(蒙古源流)伯袞德依(別勒古訥台)源流伯勒格特依(蒙古源流)と云へるなりき。(下文に依れば、不古訥台は弟、別勒古訥台は兄なり。)

都蛙鎖豁兒の子

都蛙鎖豁兒なる其の(兒干の)兄は、四人の子ありき。然ある程に、都蛙鎖豁兒なるその兄は、無くなれり(死に)。都蛙鎖豁兒無くなれる後、その四人の子は、朶奔篋兒干叔父を親族と爲さず、侮りて分れて棄て、起てり。朶兒邊姓となり(朶兒邊は四人なるが故に、四つを以て姓となし)て、朶兒邊(親征錄、元史本紀)朶魯班部(史本紀)の民と彼等の(子孫)は爲れり。

兀噶罕より鹿の焼肉を朶奔篋兒干の得たる

その後、一日朶奔篋兒干は、脱豁察黑温都兒(脱豁察黑高地、即ち脱豁察黑岡)の上に獸狩に上れり。林の中にて兀噶罕(種族の名。即ち前の晒赤)の人、三歳鹿を殺して、その肋その臟腑を焼きて居るに遇ひて、



朶奔篋兒干言はく「友よ、焼肉を」云ひき。「與へん」云ひて、その肺臟ある腹の皮を取りて、三歳鹿の肉皆を朶奔篋兒干に與へたり。

鹿の肉と伯牙兀  
揚の子との交易

朶奔篋兒干は、その三歳鹿を馬に駄けて來ぬるに、路にて一人の貧しき人その子を引きて行くに遇ひて、

朶奔篋兒干「何人ぞ、汝」問へば、その人言はく「我は、馬阿里

黒（名。蒙古源流）瑪哈賚（伯牙兀歹）伯牙兀歹（元史伯岳吾耕錄伯要歹）困窮して行

くなり。その獸の肉より我に與へよ。我この子を汝に與へん」

云ひき。

朶奔篋兒干は、その言につき、三歳鹿の片方の腿を折りて

與へて、彼のその子を伴れ來て、家の内に使ひて住みたりき。

男なき阿闐媛より  
三子の生れ

かく住める程に、朶奔篋兒干無くなれり。朶奔篋兒干を無くなしたる後、阿闐媛は、男無きに三人の子を生めり。不忽合

塔吉（元史本紀、世系表、輟耕錄）博寒葛荅黒（蒙古源流）布固哈塔吉（不合秃撒勒只

耕錄）博合親撒里直（蒙古源流）博克多薩勒濟固（孛端察兒蒙合黒

蒙古源流、勃端察兒）云へるなりき。

母の行ひを前の  
二子の疑ひ

前に朶奔篋兒干より生れたる別勒古訥台、不古訥台、二人の子は、その母阿闐媛の背處にて言ひ合へらく「この我等の

母は、兄弟なる房親の人（兄弟）無く男（外）無くありつゝ、この三

人の子を生めり。家の内に猶馬阿里黒伯牙兀歹の子あり。（子

原文に古温とありて、語譯には人と譯し、文譯には家人と）この三人の子

は、彼のなるぞ」云母の背處にて噂し合へるを、その母阿闐媛



覺りて、

束ねたる箭の譬

春の一日臘羊を煮て別勒古訥台不古訥台不忽合塔吉不  
合禿撒勒只孛端察兒蒙合黑この五人の子ごもを列べ坐  
て一條づつの箭を折れ云ひて與へたり一條づつをいか  
で畱めん折りて去けたり又五條の箭を一つに束ねて折れ  
云ひて與へたり五人にて五條束ねたる箭を人ごとに取  
りて廻して折りかねたり。

阿闌媛の辯解

そこに阿闌媛なる彼等の母は言へり汝等別勒古訥台不  
古訥台なる我が二人の子よ我をこの三人の子を生めり誰  
の何の子なるか云疑ひ合ひて噂し合へり汝等の疑ふも是  
なり。

皇天の御子

夜ごとに光る黄色の人房の天窓の戸口の明處より入り  
て我が腹を摩りてその光は我が腹の内に透るなりき出づ  
るには日月の光にて黄狗の如く爬ひて出づるなりき輕率  
に何ぞ言ふ汝等これにて察れば明かに彼の(光る人)は皇天  
の御子なるぞ黒き頭の人(謂はゆる黎)に比べて何ぞ言ふ汝  
等合木渾合惕(合木渾罕の複稱)云ならば民草はそこに覺らん  
ぞ云へり。

和合の訓へ

又阿闌媛は五人の子を教ふる言に言はく汝等我が五人  
の子は獨の腹より生れたり汝等は恰も五條の箭の如し獨  
獨にならば彼の一條づつの箭の如く誰にも容易く折られ  
ん汝等彼の束ねたる箭の如く諸共に一つの商量あることな



家産の分け合ひ

らば、誰にも容易くは何ぞならん(何ぞ敗)、汝等らと云へり。かく住める程に、阿闐媛なる彼等の母は無くなれり。

その母阿闐媛を無くなしたる後、兄弟五人にて、馬羣糧食を分け合ふに、別勒古訥台、不古訥台、不忽合塔吉、不合禿撒勒、只、四人にて共に取れり。孛端察兒、蒙合黑は弱くありて、親族に算へず、分前を與へざりき。

孛端察兒の侂住

孛端察兒は、親族に算へられずして、ここに住みて何と云

ひて、脊瘡ある尾短の脊黒の青馬に乗りて、死なば彼等の(弟)

死なん。活きば彼等の(弟)活きんと云ひて、幹難河に沿ひ去り

て放ちたり(その身を自)。去りて巴勒諄阿喇(明本語譯には地名。阿喇は、阿

幹難河の島なるべし。元史本紀、八里屯阿懶之地に到りて、そこに

草の菴の房を作りて、そこに住み居たり。

黄鷹の育て

かく住める時に、雛なる黄鷹の野雞を捕へて喫ひ居るを見て、脊瘡ある尾短の脊黒の青馬の尾の毛にて套作りて捕へて育てたり。

食物の乏しき

喫ふ食物なく住めるには、狼の崖にて取巻ける獸を窺ひて射て殺して喫ひ合ひ、狼の喫へる(喫ひ殘)を拾ひて喫ひ、己の喉を又黄鷹を養ひ合ひ、その年過ぎたり。

鷹狩の獲物

春になれり。鴨ごも來ぬる時に、黄鷹を飢ゑさせて放てり。鴨雁ごもを、枯木ごに臭氣を、乾ける木ごに腥き氣を聞

くまで(明)に置きたり(譯)。拏得鶯鴨多了、喫不盡掛在各枯樹上都



都亦噠(山明譯)の背より統格黎克小河に沿ひ、羣民起ちて來ぬ。孛端察兒彼の民の處に黃鷹を放ち往きて、晝は馬乳を求めて飲みて、夜は草の菴の房に來て寝ぬるなりき。

彼の民、孛端察兒の黃鷹を求むれども、與へざりき。彼の民、孛端察兒に誰のごも何のごも問ふこと無く、孛端察兒も彼の民に何民と問ひ合ふこと無く行ひ合へり。

不忽合塔吉なるその兄は、孛端察兒蒙合黑弟をこの幹難河に沿ひ去れり。さて尋ね來て、統格黎克小河に沿ひ起ちて來にける民にかくかくの人、かゝる馬あるなりき。さて問へば、

彼の民言はく「人も馬も、汝の間へるに似たるあり。黃鷹あ

彼の民の告げ

孛端察兒を兄の尋ね

るにぞある。日ごとに我等の處に來て、馬乳を飲みて去れり。夜は蓋いづくにか宿りけん。西北より風起れば、黃鷹に捕らせたる鴨雁どもの翎毛は、飄る雪の如く散りて刮かれて來るなり。こゝに近くあるぞ。今來る時となれり。暫く待て」と云へり。

弟を兄の伴れ歸り

暫くありて統格黎克小河に沂り一人の人來るあり。到りて來ぬれば、孛端察兒なりき。不忽合塔吉なるその兄見ること(蒙語、兀者額惕、見てすぐに、又は見るや否やの意にて、稍輕し。以下すべ)認めて、引き伴れて、幹難河に沂り馬を驅りて去りて放ちたり(自由の身に)。

頭と領との譬

孛端察兒は、不忽合塔吉兄の後より隨ひて、馬を驅りて行



譬の意の間

く行く言はく「兄、兄、身に頭あり衣に領ある善し」と云へり。その兄不忽合塔吉は、その言を何とも爲さ(思)ざりき。又その言を言へども、その兄は何とも爲さず、その答は聲せざりき。孛端察兒行きて、又その言を言へり。その言につき、その兄言はく「先程よりそれそれ何の言をか言へる、汝」と云へり。

襲ひ掠むる議り合ひ

それより孛端察兒言はく「只今の統格黎克小河に居る民は、大(おほ)き小(ちひ)き悪(あ)き好(よ)き頭蹄(かしらひづめ)下(下)なく齊(ひと)等(な)なり。容易(たやす)き民(たみ)なり。我等(われら)は彼等(かれら)を襲(おそ)はん」と云へり。

それよりその兄言はく「諾(うべ)。(蒙(ちえ)語(ご)者(ぢ)も唯(ただ)とも諾(うべ)とも善(よ)しと)然(しか)あらば、家(いへ)に到(いた)りて、兄(あに)弟(おとこ)ども議(はか)り合(あ)ひて彼(か)の民(たみ)を襲(おそ)はん」と云ひ

合(あ)ひて、

家(いへ)に到(いた)るに、兄(あに)弟(おとこ)ども談(かた)り合(あ)ひて馬(うま)に乗(の)れり。(蒙(ちえ)語(ご)抹(も)哩(り)刺(ら)罷(はい)。抹(も)哩(り)刺(ら)の本(ほん)義(ぎ)は乘(の)馬(ば)なれども、馬(うま)に乘(の)りて征(せい)伐(はく)するを云(い)ふ。以下(以下)は、出(い)馬(ば)出(い)征(せい)な(な)ど譯(わけ)せり。)その孛(は)端(どん)察(ちや)兒(る)を先(さ)驅(がけ)に奔(は)せたり。

孕める婦人の掬

孛(は)端(どん)察(ちや)兒(る)は、先(さ)驅(がけ)に奔(は)りて、孕(は)める婦(を)女(な)を拏(とら)へて、何(なに)姓(せい)の人(ひと)ぞ、汝(なんぢ)と問(と)へり。その婦(を)女(な)人(ひと)言(い)はく「札(ぢや)兒(る)赤(ち)兀(う)惕(と) (名(な)阿(あ)當(だん)罕(かん)兀(う)唃(りやん)合(か)姓(せい)兀(う)唃(りやん)罕(かん)族(しゆ)我(われ)と云(い)へり。

虜へ掠め

彼(か)の民(たみ)を兄(あに)弟(おとこ)五人(いつたり)にて虜(とら)へて、馬(ば)羣(ぐん)糧(りやう)食(しょく)家(か)人(にん)の召(めし)使(つかひ)住(す)む居(あ)處(ところ)に有(あ)り付(つ)きたり。

札(ぢや)答(た)喇(ら)姓(せい)の祖(そ)なる札(ぢや)只(ぢ)喇(ら)歹(たい)

その孕(は)める婦(を)女(な)人(ひと)は、孛(は)端(どん)察(ちや)兒(る)の處(ところ)に來(き)て子(こ)産(う)めり、他(あ)人(ひと) (蒙(ちえ)語(ご)札(ぢや)惕(と)亦(い)兒(る)堅(げん))の子(こ)なりとて、札(ぢや)只(ぢ)喇(ら)歹(たい)と名(な)づけたり。(は、札(ぢや)答(た)喇(ら)歹(たい))



歹とも云ふ。あだしの蒙語なる札惕の尾を變は幹濟爾台元史世系表挿只來（） 札惕の遠祖その人（ひと）は爲れり。その札惕の子土古兀 歹と云へるありき。土古兀の子不哩不勒赤嚕ありき。不哩 不勒赤嚕の子合喇合苔安ありき。合喇合苔安の子札木合（親征） 史元 札木合ありき。札惕（源流）幹濟爾台（元史）赤刺歹（姓） 彼等は爲れり。

巴阿嚕姓の祖なる巴阿哩歹

その婦人又孛端察兒より一人の子を生めり。孛へ（蒙語） 取れる婦人なり。その子を巴阿哩歹（源流）巴噶哩台（）と名づけたり。巴阿嚕（親征）霸鄰（元）八鄰（）の遠祖その人（ひと）は爲れり。巴阿哩歹の子赤都忽勒孛闊（赤都忽勒力士）赤都忽勒孛闊は婦人多くありき。その子眾多（蒙語）篋捏木（）生れたり。篋年巴阿嚕（阿嚕）

兄弟五人より出でたる五つの姓

姓と彼等は爲れり。別勒古訥台は別勒古訥惕姓と爲れり。不古訥台は不古訥惕姓と爲れり。不古合塔吉は合塔斤（親征）元哈苔斤（史本紀）姓と爲れり。不合禿撒勒只是撒勒只兀惕姓と爲れり。（親征）元散只兀部（元史）玳竹散朮台散竹台（玳竹）孛端察兒は孛兒只斤姓となれり。（こは）曾祖父孛兒只吉歹（篋兒干）博爾濟錦（その）複稱は孛兒只吉惕にし。偶得を引きて今の蒙古の元裔は、（） 孛端察兒の通へる婦人より生れたる巴唎失亦喇禿合必

孛端察兒の子合必赤沼咧歹

赤（元史）輟八林昔黑刺禿哈必畜（蒙古）源流哈必齊巴圖爾と云へるありき。その合必赤巴阿禿兒（合必赤）の母の從婦（嫁ぎに）從人（）を孛端察兒扯きて居りき。一人の子生れたり。沼咧歹と云へるな



りき。(原書には、沼兀咧歹と書けり。沼兀と書きても沼の一字と音同じき故に、兀の字を略けり。かゝる例は、後にもあまたあり。一一には註せず。故) 沼咧歹は、前に主格黎(明本に、以竿懸肉祭天處)に入りたりき(明) 孛端察兒在時、將他做兒、祭祀時同祭祀有來。

沼咧亦惕姓

孛端察兒無くなれる後、その沼咧歹を家には常に阿當合兀(即ち前の阿當)の人住めり。彼のなるぞ云ひて、祭天處より出して、沼咧亦惕姓を爲して、沼咧亦惕(親征錄、照烈、召烈台)の遠祖こそその一人は爲れり。

篋年土敦の七子

合必赤巴阿秃兒の子、篋年土敦ありき。(元史、咩撚篤敦、表、世系、誤れり。蒙古源流、瑪哈圖丹、孫とせり。篋年土敦の子、合赤曲魯克、(古)源、流、哈、齊、庫、魯、克、元史、世系、表、輟耕錄、は、誤り)合臣(表、世系、合、産、敦、必、乃、の、第)合赤兀(表、世系、葛、朮、虎、敦、必、乃、の、長)合出刺(表、世系、葛、忽、刺、急、里、擔、乃、敦、必)

第二子)合赤温(表、世系、葛、赤、渾、五子とせり)合喇歹(表、世系、哈、刺、喇、歹、敦、乃、の、第、四)納臣巴阿秃兒(納臣勇士、元史、納、眞、朮、赤、台、刺、眞、八、都、の、傳、刺、眞、八)七人ありき。(輟耕錄の宗室世系は、大抵元史の世系表に同じ。蓋世系には、輟耕錄をば)必すしも引かず。

七子の子孫の姓

合赤曲魯克の子、海都(元史、海、都)は、那、莫、命、額、客(那、莫、命、と)より生れたるなりき。(元史、本紀、莫、拏、倫、海、都、の、祖、母、と、せり)合臣の子、那、牙、吉、歹(云へるありき)官人(蒙語、那、顔)ぶる性ある故に、那、牙、勤、姓、こなれり。(親征、那、也、勤、元史、那、哈、合、兒、孫、と、せり)合赤兀の子、巴、嚕、刺、台(云へるありき)大きな身にて、食物に健く(蒙語、巴、嚕、ありき)巴、嚕、刺、思、姓(健、啖)こなれり。(世系表、八、魯、刺、斯、大、小、二、族、あ)合、出、刺、の、子、も、食、物、に、健、き、故、に、也、客、巴、嚕、刺(嚕、刺、大、巴)兀、出、干、巴、嚕、刺



(小巴) 魯刺(小)と名づけて、巴魯刺思姓と爲して、額兒點圖巴魯刺、脱朶延巴魯刺が頭たる(とせる頭)巴魯刺思と彼等は爲れり。(表)世系八魯刺斯のみは、葛忽刺急里擔の子孫に(合)欄歹の子ごもは、粥飯(語)蒙不荅安を争ひ、腦頭無き(兄弟の間に)故に、不荅阿惕(表)博歹阿替姓と彼等は爲れり。合赤温の子阿荅兒乞歹と云へるありき。兄弟の間に(蒙)阿荅兒黑(語)故に、阿荅兒斤(親征録同)阿荅里急)姓となれり。納臣巴阿秃兒の子兀魯兀歹(元史)赤兀魯兀台)忙忽台(朮赤台)忙兀、畏荅兒)忙兀兒と云へるありき。兀魯兀惕(親征録)兀魯吾(表)兀察兀秃(察は、魯に作るべし。輟)忙忽惕(元史)忙兀)の姓と彼等は爲れり。納臣巴阿秃兒の通へる婦人より生れたる失主兀歹、朶豁刺歹と云へるありき。

海都の三子の子孫の姓ども

海都の子、伯升豁兒多黑申(元史)拜姓忽兒(世系表)輟耕録は、姓を拜星呼爾多克申、哈齊庫魯克の)察喇孩領忽(領忽は、漢語令公)察刺哈寧昆(輟耕録に察刺罕寧兒とあり)抄眞幹兒帖該(表)獠忽眞兀秃迭葛(秃は、兒の)三人ありき。伯升豁兒多黑申の子屯必乃薛禪(屯必乃賢)敦必乃(蒙古)托木巴該徹辰(ありき)察喇孩領忽の子想昆必勒格(世系表)直孛斯(ありき)。(この)閑脱文あり。明譯に)想昆必勒格、生子名俺巴孩(元史)本紀)咸補海罕(蒙古)源流)阿木拜汗)等は、泰赤兀惕(親征録)元泰赤烏(表)大丑兀秃、源流)岱齊果特)姓となれり。察喇孩領忽の嫂妻(明)收嫂爲妻)より生れたる別速台と云へるありき。別速惕姓(元史)抄別速氏)と彼等は爲れり。抄眞幹兒帖該の子ごもは、幹囉納兒(元史)幹刺納兒氏、又)幹耳納氏)晃豁



壇(八の史伯合丹氏)阿魯刺惕(元史阿魯刺氏)阿兒刺氏(雪你惕)合卜秃兒合思格泥格思の姓と彼等は爲れり。

屯必乃の二子

屯必乃薛禪の子、合不勒合罕(合不勒大葛不律寒源流哈布勒汗)、擣薛出列二人ありき。擣薛出列の子、不勒帖出巴阿秃兒

合不勒合罕の子

(親征奔搭出拔都)ありき。合不勒合罕の子七人ありき。その長は幹勤巴兒合黑(をとめ巴兒合黑顔好きが)、窠斤八刺哈哈(窠は、窩の二字に誤れり)。次は巴兒壇巴阿秃兒(元史八哩丹源流巴爾達木)

巴圖兒忽秃黑秃蒙古兒(卷四に古を列ふ)、親征錄忽都徒忙納兒(元史忽都魯)

咩聶兒忽圖刺合罕(忽圖刺大忽脫蘭可汗)、世系表 忽魯刺罕、忽蘭

(親征錄忽蘭)、合答安(世系表)、合丹八都兒、脫朶延幹惕赤斤(親征と世系表)、掇端幹赤斤(幹惕赤斤は、窠なり。轉じて家産の義となる。蒙古の俗、少子は父の遺産を受くる故に、幹惕赤斤即ち窠君と)

幹勤巴兒合黑の胤なる禹兒乞姓

稱す。元史には、幹赤斤、幹眞、幹噴、幹陳など書けり。この七人ありき。

幹勤巴兒合黑の子、忽秃黑秃禹兒乞ありき。(この人は、卷三にも莎兒)

合秃主兒乞とあれば、忽秃黑秃は、莎兒合秃の誤りにして、忽秃黑秃蒙古兒と混じたるなり。忽秃黑秃禹兒乞の子、薛

批別乞(別乞は、族長の稱)、薛徹別吉、台出(親征錄、元史本紀)、大丑(二人あり)

禹兒乞(親征錄)、月兒斤(親征錄)、姓と彼等は爲れり。

巴兒壇の四子

巴兒壇巴阿秃兒の子、忙格秃乞顔(乞顔は、合不勒合罕の子孫、蒙古

端察兒の子孫、總體の姓にして、我が經基王の子孫みな源氏と稱するが、奇渥

如く、乞顔は、その宗家に限られ、我が新田足利徳川の如し。元史本紀の、奇渥

濫(音正)、世系表 蒙奇猪黑顔(源流)、孟格圖徹辰(捏坤)、太石(太石は、漢語

して、遼代以來北人の美稱となれり。今は台吉と書き、タイヂと呼びて、蒙古の爵

の名となれり。明本音譯に太子と書けるは、譯人の誤りなり。蒙古には、儲君なし。太子は、儲君にして、タイツと呼び、音義みな違ふ。後來元帝の諸子を、聶昆太

みな太子と稱するは、皇子の義にして、太石とは、又別なり。世系表 司、源流、訥袞、泰實、也速該、巴阿秃兒(親征錄)、烈祖、神元、皇帝、也速



忽禿黑禿蒙古兒の子

該（蒙古源流）伊蘇凱巴圖兒（巴圖兒）答哩台（親征）翰惕赤斤（親征）答里台（元史）答力台（表）世系（表）答里眞（眞は直の誤りか。然らざれば里眞の閑）達哩岱（達哩岱）諤濟錦（諤濟錦）この四人ありき。忽禿黑禿蒙古兒の子不哩孛闊（不哩孛闊）ありき。翰難（翰難）の林（原の林）に筵會（筵會）せる時別勒古台（成吉思汗の弟）の肩を劈き斫りたるは、この人の業（業）なりき。（この事、卷四にあり。）

忽圖刺合罕の子

忽圖刺合罕の子拙赤（親征）朮只可汗（朮只可汗）吉兒馬兀（吉兒馬兀）阿勒壇（親征）紀（史本）按壇（按壇）三人ありき。忽蘭巴阿禿兒（表）忽蘭八都兒（忽蘭八都兒）の子也客扯（客扯）噠（噠）ありき。巴歹（巴歹）乞失黎黑（乞失黎黑）二人の答兒罕（答兒罕）の官人は、この人の家人（家人）なりき。（この二人の事は、卷五卷六にあり。）合答安（合答安）脫朶延（脫朶延）二人は、子孫なかりき。

忽蘭の子

合不勒の後俺巴孩の管き

普（普）忙豁勒（忙豁勒）合不勒（合不勒）合罕（合罕）管（管）きたり。（蒙古の會長は、合不勒に至り始めて合罕と

稱したり。大金國志の熙宗皇統七年の處に「（蒙古會長熬羅孛極烈、自稱祖元皇帝）とある熬羅は、即ち合不勒なり。金の皇統七年は、我が近衛天皇久安三年丁卯宋の高宗紹興十七年、西紀一四四四年、成吉思汗の生るより十五年、前なり。」合不勒合罕の後、合不勒合罕の言にて、その七人の子あれども、想昆必勒格の子俺巴孩合罕は、普（普）忙豁勒（忙豁勒）を管（管）きたり。（忙豁勒の名は、甚だ古し。唐書室韋の傳丹國志の蒙骨、蒙古里、遼史の萌古、蒙韃備錄の蒙古斯、大金國志の蒙骨子、蒙骨萌骨等は、皆この忙豁勒なり。）

俺巴孩の拏はれ

不余兒（不余兒）納兀兒（納兀兒）闊連納兀兒（闊連納兀兒）布伊爾諾爾（布伊爾諾爾）呼倫諾爾（呼倫諾爾）二湖（二湖）の閒なる兀兒失溫木噠（兀兒失溫木噠）烏爾順河（烏爾順河）に居る阿亦里兀惕（阿亦里兀惕）備嚕兀惕（備嚕兀惕）姓（二）なる塔塔兒（塔塔兒）の民に俺巴孩合罕は、女を與へて、自らその女を送りて往きたるに、塔塔兒の主因（姓種）の民は、俺巴孩合罕を拏へて、乞塔惕（乞塔惕）の契丹（契丹）の復稱（復稱）蒙古人（蒙古人）は、支那人（支那人）を乞塔惕（乞塔惕）阿勒壇合罕（阿勒壇合罕）に（阿勒壇は、黄金なり。蒙語乞塔敦阿勒壇合罕は、支那の）率て



往く時、俺巴孩合罕は、別速惕の人、巴刺合赤なる使もて言ひて遣るに、「合不勒合罕の七子の中なる忽圖刺に言へ、「又我が」十子の内合荅安太石に言へ、「こて言ひて遣るに、「合木渾合罕（普き大君すめ）國の主人となりて、女を自ら送れることを我により戒めよ。塔塔兒の民に拏へられたり、我五つの指を爪刷すまで、十の指を磨滅すまで、我が仇を報い試みよ」と云ひて遣りき。

也速該の妻狩

その頃也速該巴阿秃兒は、斡難河に鷹を使ひ行く時、篋兒乞惕（元史親征錄）篋里乞部（源流伊克齊埒圖）の也客赤列都（源流蒙古）斡勒忽訥兀惕（源流鄂勒郭諾特）の民より女子を取りて送りて來ぬるに遇ひて、偵ひて見れば、顔色の殊なる（殊色）童女貴女なる

訶額侖兀眞の夫別れ

を見て、家に回り奔りて、捏坤太石なる兄、荅哩台斡惕赤斤なる弟を率ゐて來ぬ。到れば、赤列都懼れて、「速き淡黄色の馬ありき。―その淡黄色の馬の腿を打ちて、岡を越え躲れたれば、その後より三人にて續き合ひたり。赤列都は、山の鼻を繞り回りて、車の處に來ぬれば、そこに訶額侖兀眞（兀眞は漢語夫、元史宣懿皇后月倫、源流烏格楞哈屯）言はく、「彼の三人の人を覺れるか、爾顔顔悪くあり。爾の命を取らん氣色あり。爾の命だにあらば、車前（車の前室）ここに童女、黒車（黒車）ここに貴女あらん。爾の命だにあらば、童女貴女は得らるゝぞ。爾異なる名のを訶額侖（訶額侖）又名づくべきぞ。爾命を遁れ、我が香を嗅ぎて行け」とて、短衣を脱ぎて、與へた



るを、赤列都馬の上より探りて取りたれば、三人にて山の鼻を繞りて到りて來ぬれば、赤列都は、速き淡黄色の馬の腿を打ちて、急ぎ走りて、幹難河に沂り走れり。

三人にて後より追ひて、七つの岡を越ゆるまで走りて、回りにて來て、訶額侖兀眞を(明譯つしみる)也速該(補足裏將去)也速該巴阿秃兒(牽きて、捏坤太石なるその兄嚮導して、答哩台幹惕赤斤なるその弟、轅に傍ひて來る時、訶額侖兀眞言はく「我が兄、蒙阿合、兄を云ふ。赤列都は、風に逆ひ髪を拂はれたること無く、荒野の地に腹を飢ゑさせたること無かりき。今はいか様に。二つの辮髪を一たびは背の上に遣りて、一たびは懷の上に遣りて、一たびは前に向け、一たびは後に向け、いか様に爲して去れる」

訶額侖兀眞の泣言

ご云ひて、幹難河を波立たするまで、林河原を震動すまで、大聲に哭きて來つる時、答哩台幹惕赤斤傍ひて行きて言はく「汝の抱ける人」は、峠を多く越えたり。汝の哭かる人」は、水を多く渡れり。叫ぶことも顧みて見ざらん。汝を跡追ふことも、彼(帖別哩)路を得ざらん。汝黙してよご云ひて諫めたり。訶額侖兀眞を、也速該は、かくてその家に伴れ來ぬ。訶額侖兀眞を也速該の伴れ來ぬる緣由、かくあり。

忽圖刺即位の筵會

俺巴孩合罕の合答安、忽圖刺二人を名ざして遣りたるに依り、普き忙豁勒泰赤兀惕は、幹難の豁兒豁納黑主不兒(豁兒小河の河原)に聚ひて、忽圖刺を合罕(罕の罕、君の君、大罕、お可汗)こなせり。忙豁勒の樂しき踊り筵會樂しくありき。忽圖刺を君



復讐の戦ひ

に戴くご、豁兒豁納黒の繁れる木の周圍に肋だけの溝、膝  
だけの窪くはみなるまで踊れり。  
合必兒合 合兀魯合額不都克

忽圖刺合罕合なるご、合答安太石二人、塔塔兒の民の處

に出馬せり。塔塔兒の闊端巴喇合、札里不花二人の處に十三

たび戦ひて、俺巴孩合罕の讎復し怨み報いかねたり。

そこに也速該巴阿秃兒は、塔塔兒の帖木眞兀格親征帖木

眞幹怯豁哩不花親征忽魯不花が頭たる一を始めとせる塔塔兒を

虜へて來つれば、そこに訶額兀眞孕みてありて、幹難の迭

里溫孛勒答黒迭里溫孤に、迭里溫孤、跌里溫盤陀山、源流德里袞布勒塔克

地方、捏兒臣思克に居りし露西亞の商人裕唎思奇、その地を尋ね得て、鄂居

る時、正にそこに成吉思合罕元史太祖法天啓運聖武皇帝號成

迭里溫孤山に成  
吉思合罕の生れ

也速該の四子一  
女

吉思皇帝、源流索多博克達青吉斯汗生れき。生るゝ時、右の手  
に髀石蒙古の羣兒擲ちて戯れとする玩具、獸失阿の如き血塊を握  
りて生れき。塔塔兒の帖木眞兀格を率て來つる時、生れたり  
さて、帖木眞親征同鐵木眞源流特穆津の名を與へたるここ、  
かくあり。この年は、我が二條天皇應保二年壬午、宋の高宗紹興

也速該巴阿秃兒の訶額兀眞より、帖木眞合撒兒合赤溫

帖木格、この四人の子生れたり。帖木侖云ふ一人の女生れ

たり。帖木眞九歳なる時、拙赤合撒兒元史哈撒兒本紀哈撒兒録淄王擲

只哈撒兒世系表、擲只哈兒王撒の字を脱せ、哈薩兒は七歳なりき。

合赤溫額勒赤録耕、濟王哈赤溫世系表、哈赤溫大王源流哈濟錦は、

五歳なりき。帖木格幹惕赤斤世系表、鐵木哥幹赤斤國王源流諤



楚肯（はつげん）は三歳なりき。帖木侖（ていむりん）（元史諸公主表昌國大長公主帖木侖）は、繡車（きゆうま）に在りき。（帖木眞九歳なる時は、我が高倉天皇嘉應二年庚寅、宋の孝宗乾道六年、金の大定十年、西紀一一七〇年なり。）

也速該と德薛禪の  
出遇ひ

也速該巴阿禿兒（あつがい）は、帖木眞（ていむじん）の九歳なる時、訶額侖額客（かえりん）（訶額母（かむ）の外家なる斡勒忽納兀惕（おくれこつ）の民の處にて、彼（かれ）（帖木）の母方の舅（おやし）たちより息女（むすめ）を求めんこて、帖木眞（ていむじん）を率（み）て往きたり。往く時、扯克徹兒赤忽兒古二山（ちやくちやくちやく）の閒（あひだ）にて、翁吉喇惕（おんぎらてい）（元親征錄弘吉刺（ほんぎさ）源流（げんりゅう）鴻吉喇特（わうきらてい））の德薛禪（とくせつぜん）（親征錄元史太祖紀迭夷（ていゐ）、元史本傳特薛禪（ていせつぜん）源流岱徹辰（たいちやくちん））に遇へり。（二山の地は、いまだ考へ得ず。只露西亞の地圖を見るに、呼倫諾爾の西南六十餘里、克魯倫河の北岸に齊克提喇克と云ふ處あり、二山の名と音）

德薛禪也速該の  
問答

德薛禪言（とくせつぜん）はく也速該忽荅（あつがいこつた）（也速該なる親（おや）、家即ち縁者）誰（たれ）の處を指してか來つる（き）こ云ひき。也速該巴阿禿兒言（あつがい）はくこの我が子の母

德薛禪の吉き夢

方（かた）の舅（おやし）なる斡勒忽納兀惕（おくれこつ）の民の處にて少女（せうにょ）を求めんこて來つ（き）こ云ひき。德薛禪言（とくせつぜん）はくこの汝（なんぢ）が子は、目に火あり、面に光（ひかり）ある子なり。（格例）也速該親家（あつがいしんか）我（われ）この夜（よ）（昨夜）夢（ゆめ）を夢みたり。我（われ）白き海青（かいせい）（鷹（たか）の一種）は、日月（ひつき）二つを拏（とら）へ、飛（と）びて來て我が手（て）の上に落ちたり。この夢を人（ひと）に語（かた）らく日月（ひつき）は、望（のぞ）みて見（み）らるゝなりき。今この海青（かいせい）は、拏（とら）へて持ち來て我が手（て）に落ちたり。白（しろ）き鳥（とり）は、又（また）（蒙語察罕保兀（モンゴ語察汗保兀））罷（はい）。察罕（さかん）は白（しろ）き、保兀（ほうご）は降（くだ）り、罷（はい）はたりなり。白（しろ）降りたりにては、意（い）通（と）ぜず。思（し）ふ何（なに）をもてかく善（よ）く見（み）せたらん（白き以下を、明譯は、節略し。）「こ云ひて（ありき）也速該親家（あつがいしんか）。この我が夢（ゆめ）は、汝（なんぢ）を、只（ただ）その子（こ）を引（ひ）きて來（く）るを見（み）たるなりき。夢（ゆめ）を善（よ）く夢（ゆめ）みたり。いかなる夢（ゆめ）ならん。



汝等乞牙惕(蒙古源流) 卻特(復稱)の民の吉兆を來て告げたるなりき。

美女を出す國

我等翁吉喇惕の民は、昔の日より甥女の姿、息女の顔色ある處にて、他國部落を争はず、腮美しき女子らを、汝等の大君(合察兒) となれる者に與へ、大車に載せて、黑駱駝を駕して、馭せしめて往きて、妃の位(合禰) に一つ(合撒黑帖兒堅) に(君と) 坐らせたり、我等部落人民を争はず、顔好き女子らを育て、車前ある車に載せて、青黑駱駝を駕して、送りて、往きて、高き位(完勒只格) に傍なる側(額帖惕) に坐らせたり、我等昔より翁吉喇惕の民は、妃の團牌(明譯) に從ふ、楯唐團扇のあり、女子らの奏事する、甥女の姿、息女の顔色に依る處なりき、我等。

息女を見せに徳薛禪の導き

我等の男の子は、營盤(譯) 家道を望む。我等の女の子は、顔色を見らる。也速該親家。我が家に往かん。我が息女は、小くあり。親家見よ。云ひて、徳薛禪は、その家に導きて、馬より下りたり。

許嫁の約

その女を見れば、面に光あり、目に火ある女子(なる) を見て、心に入らしめたり(適心へり)。帖木眞より一年大きく、十なりき。孛兒帖(元史) 孛兒台(源流) 布爾德(多遍) 云ふ。夜宿りて、明朝その女を求むれば、徳薛禪言はく、多遍求めさせて與ふれば、貴ばる。少遍求めさせて與ふれば、賤めらる。されども、女人の命(なる天) に生れたるは、門の内に老ゆること無し。女をも與へん。その子を壻とし置きて、往け。云へり。諾なひ合ひて、也速



該巴阿秃兒言はく「この子を壻むすことし置かん。我が子は狗いぬを恐おそる。親家しんか、我が子を狗いぬに勿驚おどろかせそ。」云ひて、その牽馬ひきうま（副馬）を結ゆひ納なふに與あたへて、帖木眞てつむじんを壻むすことし置きて去りて、

也速該を塔塔兒の民の毒害

也速該巴阿秃兒は、路みちに扯克扯兒ちやくちやくじ（即ち前の扯克徹兒山）の失喇客額兒しつらかくがくじ（黄なる）にて、塔塔兒の民の筵會うたげし居るに遇ひて、渴かわきて彼等かれらの筵會うたげの處ところに下馬げませり。彼等かれら塔塔兒たたとじ認めたりき。也速該えすがい乞顔ぎげん來きつ「云ふ昔むかしの虜とらへられたる恨うらみを想おもひて、陰ひそかに謀はかり害そこひて、毒どくを和ませて與あたへき。路みちに病やみ去りて、三宿みつしゆく行きて、家いへに到いたる。こ悪わるくなりて、

也速該の遺言

也速該巴阿秃兒言はく「我が胸むね悪くあり。傍かたへに誰たれかある。」云ひて、晃豁壇こんくわだんの察喇合額不堅しやくらがくがくふけん（察喇合翁親征錄元史）察刺海しやくらかいの子蒙力克もんりやく

「御前みまへに在り。」云へば、喚よびて來こさせて言はく「我が童子わらこ蒙力克もんりやくよ。子こごもは小ちひさくあり。我われ、我が子帖木眞てつむじんを壻むすことし置きて來きぬる路みちに、塔塔兒の民たまとに陰ひそかに謀はかられたり。我われ、我が胸むね悪くあり。幼をさなき遺のこれる者ものごも、孤ひとり弟あにごも寡婦あなよめなる嫂あによめを愛護あいごするここを。汝なんぢ知れ。我われ、我が子帖木眞てつむじんをば速すみかに往ゆきて率ひて來こよ。我が童子わらこ蒙力克もんりやくよ。」云ふ。破やぶりぬ。

成吉思汗實錄卷の一終り。



成吉思汗實錄卷の二

帖木眞を蒙力克の迎へ歸り

也速該巴阿秃兒の言に違へず、蒙力克往きて、德薛禪に言へらく也速該兒は、帖木眞を甚く想ひて、心を痛めたり。帖木眞を取りに來つと云ひき。德薛禪言はく親家その子を想ふならば往け。見えて速く來よと云ひて、蒙力克額赤格(蒙力克父。尊稱。元史忠義伯八の傳)明里也赤哥は、帖木眞を率て來ぬ。

祖の祭りに訶額命の後れ到り

その春、俺巴孩合罕の合秃惕(妃の蒙語なる)、斡兒伯莎合台二女(蒙語只鄰、二つと云ふ)は、祖の靈を地に祭り(明本旁譯)地裏燒飯祭



祀)に出でたる時、訶額侖兀眞往きて、後れ到りて漏らされて、  
 訶額侖兀眞は、幹兒伯莎合台二女に言へらく「也速該巴阿禿  
 兒を死にたりと云ひて、我が子ごもを、大きくならざるに依  
 り、御祖の〔御前の〕班列より、餘れる供物より、胙より何ぞ脱れ  
 させたる、汝等、見ると、食ふことを勧めず、に、起つことになれ  
 り、汝等」と云ひき。

俺巴孩の二妃の  
 怒り

その言につき、幹兒伯莎合台二女の妃言はく「喚びて與へ  
 られざる道あり、汝、遇へば食ふべき理あり、汝、請じて與へら  
 れざる道あり、汝、到れば食ふべき理あり、汝、(喚び請するにも及ば)  
 俺巴孩合罕を死にたりと云ひて、訶額侖に、到りつゝ、かく云  
 はるゝ、ことごとくなれり。

泰赤兀惕に訶額  
 侖母子の棄てら  
 れ

「考ふるに、この母子等を營盤の裏に棄てて起て、汝等も勿  
 率て行きそ」と云ひ、明日の日より、泰赤兀惕の塔兒忽台乞哩  
 勒禿黑(親征錄)塔兒忽台希憐禿(喇失惕額丁の集史を額兒忒曼の譯した、  
毒心と解塔兒不台。誤りなり。)脱朶延吉兒帖(親征錄)脱端火兒眞(  
せり。元史)等の泰赤兀惕は、幹難河に沿ひ動けり。訶額侖兀眞母子等を  
 棄てて起たれ、晃豁壇の察喇合翁往きて止むる時、脱朶延吉  
 兒帖言はく「深き水乾きたり。光る石碎けたり」と云ふと起ち  
 けり。察喇合翁をいかでか止むる、汝」と云ひ、後より槍にて背  
 を刺しけり。

察喇合翁の負傷

察喇合翁負傷となりて、家に來て艱み臥せる時、帖木眞見  
 に往きけり。そこに晃豁壇の察喇合翁言はく「汝の好き父の



棄てて起てる民を訶額侖の取戻し

收めたる部眾、我等のあまたの部眾を率ゐて起たる、時止めんとしてかく爲されたりと云ひき。その時帖木眞哭きて出でて去れり。訶額侖兀眞は棄てて起たれたる時、纛秃黑は白馬の尾を竿に繋けたる者、持ちて身づから馬に乗りて、半の民を取戻せり。その取戻せる民も、定まらず泰赤兀惕の後より起ちけり。

艱難なる訶額侖の子育て

泰赤兀惕の兄弟に、訶額侖兀眞を、寡婦を、子ごも、幼兒ごも、母子等を、營盤の裏に棄てて起たれて、訶額侖兀眞は、額篋篋兒干(即ち婦人の善射者)に生れて、幼き子ごもを養ふに、きりり身拵へして、裾紫すそむらげ帯締おびしめて、幹難河かんだんがを上り下り走りて、杜梨山とらじやまの實を拾ひて、晝夜喉を養へり。膽ありて生れたる兀眞額

帖木眞兄弟の魚取り

客(夫人)は、福ある子ごもを養ふに、檜の木ひのきの鋏はさみを執りて、人參赤赤吉納(明旁譯)を剉りて養へり。剛毅なる額客兀眞(人母夫)の野蒜辣菲のびらつにて養へる子ごもは、帝王を望むに至れり。整齊なる兀眞額客の山丹草の根にて養へる子ごもは、法度ある賢人けんじんとなれり。  
美しき兀眞の菲辣菲にて養へる合兀魯合(路又は溝の義あり)す。子ごもは、豁亦喇兀惕(これ能はす)好くなれり。男好くなり了へて、雄雄しく猛く但爲られたり。(詞のまゝに譯したれ)母を養はんこと話し合ひて、母幹難(母の如き)の岸の上に居て、釣する鉤を調へ合ひて、偏眼不具(額曠迭克詹迭克)の魚を釣りて、鉤に掛けて、針を鉤に曲げて、折不格合荅喇(魚二つ共に)を鉤に掛けて、漁網を結

赤魯篋古ト赤兀兒



兄弟の不和を訶  
額翁の誡め

びて、魚の子魚を撈ひて、却てその母を報い養へり。

一日、帖木眞合撒兒別克帖兒（蒙古源流伯克特爾）別勒古台（元史別

里古台大王、（輟耕錄廣寧王別里古台、即ち孛魯古歹、蒙古源流伯勒格德依。二人は皆帖木眞の異母弟なり。）四

人一處に居て、鉤を扯ける中に、一つの光る鎖豁孫（名魚の）入り

（取）けり。帖木眞合撒兒二人より、別克帖兒別勒古台二人奪ひ

て取れり。帖木眞合撒兒二人、家に来て、兀眞額客に言へらく

「一つの光る鎖豁孫、鉤を啣みたるを、別克帖兒別勒古台兄弟

二人に奪ひて取られたり、我等（薛兀迭兒）云へば、兀眞額客言はく、何

するぞや。兄弟ごも何ぞかく爲り合へる。汝等影より外に伴

なく、尾より外に鞭なし、我等泰赤兀惕の兄弟の苦めをいか

で報いん、我等（薛兀迭兒）云ひて居るに、昔の阿闌額客の五人の子の

如く、いかに談合無くぞある。汝等止めよ（薛兀迭兒）云へり。

別克帖兒を帖木  
眞合撒兒の射殺

それより帖木眞合撒兒二人喜ばずして言はく、先頃一度

雲雀を射取りたるをもかく奪ひて取れり。今又かくも奪

へり。一つにいかで過さん、我等云ふ、門を開けて出でて

去れり。別克帖兒は、小山の上に、韋毛の驢馬九匹を眺めて居

たるに、帖木眞は後より隠れて、合撒兒は前より隠れて、箭を

抽きて到れる時、別克帖兒見ると言はく、泰赤兀惕の兄弟の

苦めを受けかね（堪へず）、怨を誰か報い得ん（薛兀迭兒）云ひて居る

時、我を何ぞ目の毛、口の梗（合合孫）と爲せる。汝等影より外に伴なく、

尾より外に鞭なきに、何ぞかく思へる。汝等我が火盤を勿毀

り。別勒古台を勿廢て、そ（別勒古台は、別克帖兒と火盤を共に死便



訶額命の殿しき  
叱り

死しなん休やすら將をわが我わが別べ勒る古ぐ台たい棄すつ了る」云いひ、盤あん脚あし居まて待まてり。帖て木む眞ちん  
合かつ撒さ兒る二人ふたりは、前まへより後しりより塚あづちこして（射あ中ちゆうてて）去されり。

家いへに來きて入いりたれば、兀う眞ちん額え客けは、二人ふたりの子こを顔かほ色いろにて覺さりて言いはく殺ころしたる、（語は巴ば喇ら黑く撒さ惕ととも譯あすべし。動どう詞し上の形けい容よう

詞しにして、下したに名な詞し代だい名な詞しありと見みるなり。こゝにては、帖て木む眞ちんなる名な詞し、又または）  
汝ななる代だい名な詞しありと見みて、別べ克く帖て兒ちを殺ころしたる帖て木む眞ちんは」と云いへる意いならん。）

我わがが熱ねつ處とよりむくこ出いづる時とき、手てに黑くろき血ち塊こわりを握にぎりて生うまれ

たりき、此この「子こ」胞えん衣なを咬かむ合かつ撒さ兒る（名な狗いぬの）の狗いぬの如ごとく、崖がけを衝つく

合か卜ぶ闌らん（名な獸けつの）の如ごとく、怒いかりを抑おさふる能あたはざる獅し子しの如ごとく、活いき

たるを吞のむと云いふ、蟒をろちの如ごとく、己おのが影かげを衝つく海かい清せいの如ごとく、聲こゑ無な

しにて吞のむ出い喇ら合か（名な魚ういの）の如ごとく、その子こ駱らく駝だを後あと跟あしより咬かむ

駱らく駝だ（明めい譯やく）風ふう雄ゆう駝だ（明めい譯やく）風ふう雪せつに靠より「頭とう口こうを害せふ」（明めい譯やく）靠より風ふう雪せつ

害せ物ぶつ的てき）狼おほかみの如ごとく、その子こごもを追おひかねて（明めい譯やく）趕おひ不あ動うご兒せ子こ）

その子こごもを喫くらふ鴛しん鴦とうの如ごとく、その臥ふしど處とを動うごかせば黨たう護ごす

る豺さい狼らうの如ごとく、拏とらへて猶た豫めはざる虎とらの如ごとく、妄みだりに衝つく巴は嚙ろ思す

（名な獸けつの）の如ごとく、殺ころしたり影かげより外ほかに伴ともなく、尾おしより外ほかに鞭むちなき

に、泰たい赤ち兀う惕との兄あに弟おとこの苦くるめを受うけかね居をるに、怨うらみを誰たれか報むくい

ん」云いひて居をるに、いかに過すこさんこて、かくは爲なし合あへる、汝なんぢ

等ら」こて、その子こごもを、舊ふるき辭ことばを尋たづね、翁おきな等らの辭ことばを引ひき、甚いたく憂うれ

へたり。

かく住すめる程ほどに、泰たい赤ち兀う惕との塔た兒る忽たい台き乞り哩る禿と黑くは、その

侍じ衛ゑいを率ひきゐて「雛ひなごも、翎はね伸のびけん、羔こひつじごも（失しつ魯ろ格かく惕ていは、涎よだくりの）

生おひ立たちけん（明めい譯やく）文ぶんの意いに依より譯やくせり。原もと撤さつ下か的てき帖て木む眞ちん母は子し毎ら、如い

成せい吉きつ思し汗あせ實じつ錄ろく卷くわんの二

泰赤兀惕の襲ひ



今莫不似飛禽的雛兒般毛羽長了走獸的羔兒般大了」云  
 ひて來ぬ懼れて母子兄弟ども繁き林の中に寨作りて別勒  
 古台は木を折り引寄せて垣に據りて合撒兒は箭を射合ひ  
 て合赤温帖木格帖木侖三人を崖縫の間に投れて鬪ひ居る  
 時泰赤兀惕叫びて言はく兄帖木眞を出せ汝等外の者に用  
 なし」叫ばれて帖木眞を馬に載せて逃れん」林の中に走  
 りて去れるを泰赤兀惕見て逐ひて帖木眞は帖兒古捏温都  
 兒(捏兒古)の森の中に鑽りて入りたれば泰赤兀惕は入りか  
 ねて森を圍み守りて

森の中の九宿り

帖木眞森の中に三たび宿りて出でん」さて馬を牽きて來  
 る時馬よりその鞍脱れて落ちけり回りに見れば鞍は扳胷  
 したるまゝにて肚帶したるまゝにて脱れて落ちけり」肚帶  
 は、ごもあれ扳胷あるに、又いかで脱れたりけん皇天止め給  
 へるか」云ひて回りに、又三たび宿れり又出でて來つるに、  
 森の口に帳房ほごの白石口を塞ぎ倒れたりき皇天止め給  
 へるか」云ひて回りに、又三たび宿れり又九宿り食物なく  
 居て、名も無く何ぞ死なん出でん」云ひて彼の口を塞ぎ倒  
 れたる帳房ほごの白石の周圍に出づれば出でられず木ご  
 もを箭削り小刀にて切斷ち馬を滑らして出でたれば泰赤  
 兀惕守りて居りき拏へて牽て去れり。

虜はれを脱げて  
水溜の仰ぎ臥し

帖木眞を塔兒忽台乞哩勒秃黑牽て去りて、その部落の民  
 に命令して隣ごごに一たび宿し廻して行く時夏の首の月



(四)の第十六の紅く照る日に、泰赤兀惕は、幹難の岸の上に筵會し合ひて、日落つれば散りたり。帖木眞をその筵會に弱き子人率ゐてありき。筵會の眾を散らしめ、「帖木眞は」その弱き子より手枷を扯きて取りて、その項を一つ打つこ、走りて幹難の林の内に臥したれども、見られんこ云ひて、水の溜に仰ぎ臥して、手枷を水に順ひ流し、面出して臥したり。

幹難の林の人探し

彼の脱したる人、大聲に「拏はれ人脱げたり」こ叫びたるに、散りたる泰赤兀惕聚ひて來て、晝の如き月明に幹難の林を探したり。水溜に臥して居るを、速勒都思(源蒙古蘇勒德斯、元史月傳、遜都氏)の鎖兒罕失喇(錄、親征、梭嚕罕失刺、源蒙古托爾干沙喇)正に過ぎて見て言はく「正に只かく才あるが故に、その目に火

你敦 合勒

二たび人探し

あり、その面に光ありきて、泰赤兀惕の兄弟に然のみ嫉まるるなりき。汝然只臥してよ。告げざらん、我「こ云ひて過れり。

又「回り探さん」こ云ひ合へる時、鎖兒罕失喇言はく「本の路にて見ざりし地を見るこ、回り探さん」こ云へり。「然り」こ云ひ合へり。本の路に依り回り探して、又鎖兒罕失喇過ぎて言はく「汝の兄弟(族)は、口の牙を磨ぎ來ぬ。しか臥し慎めよ」こ云ひて過れり。

三たび人探し

又「回り探さん」こ云ひ合へる時、鎖兒罕失喇又言はく「泰赤兀惕の御子たち、汝等、明るき白き晝に全人脱げたり。今黒き夜に何ぞ得ん。我等又本の路にて見ざりし地を見るこ、回り探すこ、散りて、明日の晝聚ひて尋ねん。いづくにか往かん、彼



の手枷ある人ひとと云へり。然りしかと云ひ合ひて、回り探して、鎖兒  
 罕失喇又過ぎて言はく「かく探すさがと回りて明日尋ねんたづと云  
 ひ合へり。今我等を散らしめ了へて、母弟はなごもを尋ね去れ。我  
 を見たりみと、人に見られれば見られたりみと勿語りなと云ひて  
 過れり。

鎖兒罕失喇の家  
 を帖木眞の尋ね  
 往き

彼等を散らしめ了へて、帖木眞せん心に考へて、先頃隣に廻し  
 て宿したる時鎖兒罕失喇かんの家に宿りたれば、沈白ちん（親征せん 闖拜かん）  
 赤老温ち（親征せん 蒙古源流もんこげんりゅう 同）齊拉袞せいらんと云へる彼が二人の子は、胸の心  
 を痛めて、夜我を見て、我が手枷を取りて放して宿らしめた  
 り。今又鎖兒罕失喇我を見て告げず過りたり。今只彼等是我  
 を救はんぞと云ひて、鎖兒罕失喇の家を尋ね、斡難河おなんがに沿ひ  
 去れり。

鎖兒罕失喇の家  
 に帖木眞の匿ま  
 はれ

家の記號しごう（目印めいしんには非）は、生馬乳なまにゅう（馬うまのな）を注ぐそと（大甕おほづゑに）その  
 熟馬乳じゆく（の馬乳）を夜日出づるまで搔廻すかきまはことなりき。その記號  
 を聽きて行きたれば、搔廻す聲を聽きて到りて、その家に入  
 りたれば、鎖兒罕失喇母弟はなごもを尋ね去れと云はざりしか、  
 我何ぞ來ぬる、汝なんぢと云へり。沈白、赤老温なるその二人の子言  
 はく「雀すずめを土咻台どしんたい（明あきら龍多兒りゅうたご、一種いっしゆ）叢くさむらに逐おひ入るれば、叢は救ひ  
 き。今我等の處ところに來つるを何ぞ然しかと云へる、爾なむちとて、父の言を喜  
 ばず、その手枷を脱して火に燒きて、後の羊毛ひつじのけある車くるまに載せ  
 て、合あ答安たあんと云へる妹いもに「生きたる人ひとには勿語りなと云ひて  
 傳かしめたり。



第三の日に、泰赤兀惕は、「人匿したるぞ」と云ひ合ひて、「已  
 等が閒を捜し合はん」と云ひ合ひて捜し合へり。鎖兒罕失喇  
 の家、車床の下に至るまで捜して、後の羊毛ある車に上りて、  
 口にある羊毛を拖出して、奥に至る時、この鎖兒罕失喇又「か  
 かる熱さに羊毛の内に何ぞ耐へん」と云へば、捜す者ども下  
 りて去れり。

帖木眞の救はれ  
歸り

搜手ども去りたる後に、鎖兒罕失喇言はく「我等を灰の如  
 く搔立て危かりき。今母弟どもを尋ね去れ」と云ひて、口白き  
 駒生まぬ甘草黄の牝馬(蒙語忽刺黑臣、青黄色にて)に乗らしめて、  
 肥えたる羔(蒙語帖勒忽哩罕、明譯「一母乳的羔兒」)を煮て、皮桶  
 大皮桶を調へて、鞍を與へず、火鎌を與へず、弓を與へて、二條

乞木兒合小河の  
母子の再會

の箭を與へたり。かく調へて遣りぬ。

帖木眞かく去るこ、垣して楯籠りたる地に到りて、草の踏  
 分跡に依り、幹難河に沂り跡つけて、西より乞木兒合豁囉罕  
 入りて來るありき。(乞木兒合小河、水道提綱の呼馬拉堪河、内府輿圖の  
 齊母爾喀河にして、克魯倫河源の東南より出で、東  
 北に流れて濟爾夏朗圖河となり、)かく沂り跡つけて、「母と弟どもと」  
 乞木兒合小河の別迭兒豁失溫(別迭兒の鼻)の豁兒出恢孛勒荅黑  
 恢孤山に居るに遇ひ合へり。

桑古兒小河の邊  
の青湖の移住

そこに會し合ひて、去りて不兒罕嶽の前(南面)なる古咧勒古  
(山の名。)曲鄰居山(今の巴爾哈嶺)の内なる桑古兒豁囉罕(桑古兒小河、水道  
 親征錄)僧庫爾圖(の邊の)合喇只嚕堅(小山の名)の闊闊納兀兒(青湖)に營盤  
 して居る時、土撥鼠(蒙語塔兒巴合惕、塔兒巴罕の複稱。唐書の鼯鼠、本  
 書明譯の土撥鼠、元史伯顏の傳の)



塔刺不歡本草の荅刺不花みな塔兒巴罕の轉なり。穴居の小獸にして、形は獺の如し。肉は食ふべく、皮は裘とすべし。黑龍江外紀に獺爾とあるも、是なるべし。元史語解に「塔爾巴噶、獺」野鼠を殺して食ひ居りき。

騮馬の盗人を帖木眞の跡つけ

一日、葦毛の騮馬八匹、家の前に立ちて居るを盗人來て見つゝ、盗みて去れり。徒の者ども見て後れたり。別勒古台は、尾脫の栗毛の馬（蒙語晃豁兒、漢語の騮馬）に乗りて、土撥鼠を捕へに往きてありき。夕に日の落ちたる後、別勒古台は、尾脫の栗毛馬に土撥鼠を荷つけて、身を搖がしつゝ歩み、牽きて來ぬ。葦毛の騮馬どもを盗人取りて去れり。云へば、別勒古台言はく「我追はん」云へり。合撒兒言はく「汝能はず。我追はん」云へり。帖木眞言はく「汝等能はず。我追はん」云ひて、尾脫の栗毛馬に帖木眞乗りて、葦毛の騮馬どもを草の踏分に依り跡つ

孛斡兒出の授け

けて、三たび宿りて、朝早く路にて多き馬羣の中に一人の爽快なる子人、馬の乳を擠り居るに遇ひて、葦毛の騮馬どもを問ひたれば、その子言はく「この朝、日出づる前に、葦毛の騮馬八匹こゝを走りて去れり。彼等の路を我告げて與へん」云ひて、尾脫の栗毛馬を放たしめて、帖木眞を脊黒の青馬に乗らしめたり。己は快き淡黄色の馬に乗り、家にも往かず、大皮桶皮斗に野にて蓋して（明著草蓋了）置けり。伴よ。汝こそは甚く艱みて來にけれ。丈夫の艱みは一つなるぞ。我汝に伴こならん。我が父は、納忽伯顔と呼ばる。（納忽長者。元史博爾朮の傳の姓。阿嚕刺。我は、その獨子。我は、孛斡兒出。元史博爾朮、源流博郭惕の單稱。我は、その獨子。我は、孛斡兒出。元史博爾朮、源流博郭爾濟）云ふなり。云ひて、葦毛の騮馬どもの路に依り跡つ



けて三たび宿りて、夕に日岡を拍ち居る時、一團（蒙古語）古哩延、義  
 羣明譯（轉じて）圜子の民の處に到れり。葦毛の驢馬八匹、その大團の邊  
 に草食みつゝ立ちて居るを見たり。帖木眞言はく「伴よ、汝こ  
 こに立て。我葦毛の驢馬ごもは彼等なり、追ひて出でん」と云  
 へり。李幹兒出言はく「伴よ、汝こゝに何  
 ぞ立たん」と云ひて、同じく驅けて入り、葦毛の驢馬ごもを追  
 ひて出でたり。（閣復の撰れる廣平王玉昔帖木兒の碑文に）

帖木眞の逆へ戦ひ

後より人ごもぞろぞろ（蒙古語）兀不兒速不兒（明譯）陸續追ひて來  
 ぬ。一人の白馬の人、套馬竿を執りて獨にて追附きて來ぬ。李  
 幹兒出言はく「伴よ、弓箭を我におこせよ。我射合はん」と云へ  
 り。帖木眞言はく「我の故に汝害せられん。我射合はん」と云ひ

て、逆へ回り射合ひたり。彼の白馬の人、套馬竿にて指して立  
 たり。後方の伴等追附きて來ぬ。日落ちて去れり。（日去れなり）黄昏  
 となりて來ぬ。後方なる彼の眾は、暗くなられて立ちて残り  
 たり。

李幹兒出の廉潔

その夜行き通し、三日三夜行き通して到りぬ。帖木眞言は  
 く「伴よ、我汝の助に依る」より外に、この馬ごもを得べきあら  
 んや、分け合はん。幾つを取らん」と云ふか、「と云へり。李幹兒出  
 言はく「我、好き伴を汝を艱みて來ぬ」と云ひて、好き伴に助こ  
 ならん」と云ひて、伴となりて來ぬ。我外財と云ひて取らんや、我  
 が父は、納忽伯顔と云ふ者なり。納忽伯顔の獨子にて我あり。  
 我が父の貯蓄は、我に任せあり。我は取らず。我の助となりた



納忽伯顏の家に  
二人の歸着

るは、何の助ならん。取らずと云へり。

納忽伯顏の家に到れり。納忽伯顏は、その子孛斡兒出を失ひて、涕涙にて居けり。忽ち到られて、その子を見て、一たびは哭き、一たびは怪めり。その子孛斡兒出言はく、「いかに爲りなんや。好き伴艱みて來たりき。伴となりて去りき。我、今來ぬ。」と云ひて、馬を驅り去りて、野にて蓋したる大皮桶皮斗を持ち來ぬ。帖木眞には、肥えたる羔を殺して、行糧に與へて、大皮桶に盛れる物(乳馬)を調へて行糧とせしめたり。納忽伯顏言はく、「二人は、少年なり。汝等眷み合へ(眷顧)。この後勿棄て合ひそ。」と云へり。帖木眞去りて三夜三日往きて、桑古兒小河にその家に到れり。訶額命額客合撒兒等の弟ども憂へて居て、見て歡

桑古兒小河の家  
に帖木眞の歸着

べり。

孛斡兒帖兀眞を帖  
木眞の迎へ兩親  
の送り

それより帖木眞別勒古台二人は、德薛禪の(女)孛斡兒帖兀眞(元史)孛斡兒台旭眞追謚光獻翼聖皇后)を(帖木眞)九歳なる時見

て來たるに依り、分れて居りしを、客魯噠木噠に沿ひ尋ね往けり。(客魯噠河は、今の克魯倫河にして、元史には曲綠隣とも怯綠連とも怯魯連とも怯呂連とも書けり。一名は臚胸河とも云ひ、元史太祖紀十一年に臚胸河、丘處機の西遊記に陸局河、張德輝の紀行に北語云翁陸連、漢言臚胸河也)と云ひ、金幼孜の北征錄に臚胸河と云へり。)扯克徹兒

赤忽兒忽(卷一の赤忽兒古)二山の間に、德薛禪翁吉喇は、そこに居り

き。德薛禪は、帖木眞を見て、甚く大喜して言はく、「泰赤兀惕なる汝の兄弟嫉めり。知りて甚く憂へて絶望せり。やつこ見

たるぞ、汝を」と云ひて、孛斡兒帖兀眞を配せて送れり。(帖木眞の婚したるは、蒙古源流に據れば、戊戌の年にして、帖木眞十七歳の時なり。戊戌の年は、我が高倉天皇治承二年、宋の孝宗淳熙五年、金の大定十八年、西紀一一七八



り。年なを送り來つる德薛禪は、路にて客魯噠の兀喇黑啜勒の隅より回れり。その妻、孛兒帖兀眞の母は、搠壇しうたんと云ひき。搠壇は、女を送りて、古喇勒古の内なる桑古兒小河に帖木眞等居る處に致して來ぬ。

孛兒出の來屬

搠壇を回らしむるこ、帖木眞は、別勒古台を、孛兒出を伴ともならんこて喚びて遣りぬ。孛兒出は、別勒古台に到らるるこ、(原文には到らしむるとあり。すべて蒙古語には、日本語にて受動に、云ふべき所を令動に云へること多し。日本語として穩かならざる處は、受動に改)その父に語らず、拱脊の栗毛の馬に乗り、青き毛衣を馬に駄けて、別勒古台と同じく來ぬ。かく伴ともなれるに依り、この後長く事ふる緣故、かくあり。

不兒吉岸の移住

桑古兒小河より起ちて、客魯噠河の源なる不兒吉額兒吉

客喇亦揚の王罕に帖木眞兄弟のまみえ

(不兒吉が不魯吉崖に營盤せんこ下り(馬より)て、搠壇額客の引出物(蒙語失惕忽勒、明上見公姑的禮物)として黒き貂鼠の裘を持ち來てありき。その裘を、帖木眞合撒兒別勒古台三人、持ちて往きて、前さきの日也速該罕額赤格こ、(也速該罕なる父也。速該巴阿秃兒は、罕とならざりき。こゝに罕と云へるは、追王の義ならん)客喇亦揚の民の(親征克烈部、元史には、克烈、怯烈、怯列、亦、怯里)王罕(親征汪可汗、元史汪罕、八の傳王可汗)は、安達こ云ひ合ひたりき。(安達は、親交なり。元史太祖紀安答の注に「交物之」我が父に安達と云ひ合ひたるは、父の如くあるぞとて、王罕を土兀刺の合喇屯に在りこ知りて往きたり。)(土兀刺は、河の名なり。唐書鐵勒の傳に獨樂河、回鶻の傳に獨邏水、元史巴而朮阿而忒斤の傳に秃忽刺水、張德輝の紀行に獨渾刺河とあり。今の土拉河また圖拉河なり。合喇屯は、黒林にて、今の昭莫多即ち東庫倫の地、または)王罕の處に帖木眞到り今の庫倫の南なる汗山即ち汗阿林の地なり。



王罕の喜び

て言はく「前の日我が父に安達と云ひ合ひたりき、爾父にも等しくあるぞ」と云ひて、妻を下ろして被せ奉る、舅姑への禮物<sup>ぶつ</sup>を爾<sup>なむち</sup>に持ち來ぬとて、貂鼠<sup>てうそ</sup>の裘<sup>かほころも</sup>を與<sup>あた</sup>へたり。王罕<sup>わんかん</sup>甚<sup>いた</sup>く喜<sup>よろこ</sup>びて言はく「黒<sup>くろ</sup>き貂鼠<sup>てうそ</sup>の裘<sup>かほころも</sup>の返<sup>へん</sup>禮<sup>れい</sup>に、離<sup>はな</sup>れたる汝<sup>なんぢ</sup>の部眾<sup>ぶしう</sup>を集<sup>あつ</sup>めて與<sup>あた</sup>へん。貂鼠<sup>てうそ</sup>の裘<sup>かほころも</sup>の返<sup>へん</sup>禮<sup>れい</sup>に、散<sup>ち</sup>りたる汝<sup>なんぢ</sup>の部眾<sup>ぶしう</sup>を纏<sup>まと</sup>め合<sup>あ</sup>ひて與<sup>あた</sup>へん。腰<sup>こし</sup>の尖<sup>さき</sup>に腔<sup>こう</sup>子の胸<sup>むね</sup>に存<sup>あ</sup>れ<sup>し</sup>て忘<sup>わす</sup>れじ」と云へり。  
李可咧 李克薛 扯客咧 扯額只  
 そこより回<sup>かへ</sup>りて不<sup>ぶ</sup>兒<sup>る</sup>吉岸<sup>がし</sup>に居<sup>を</sup>る時<sup>とき</sup>、不<sup>ぶ</sup>兒<sup>る</sup>罕<sup>かん</sup>嶽<sup>だけ</sup>より兀<sup>う</sup>噶<sup>り</sup>罕<sup>かん</sup>の人<sup>ひと</sup>札<sup>ちや</sup>兒<sup>る</sup>赤<sup>ちやう</sup>兀<sup>う</sup>額<sup>がく</sup>不<sup>ぶ</sup>堅<sup>けん</sup>（札<sup>ちや</sup>兒<sup>る</sup>赤<sup>ちやう</sup>兀<sup>う</sup>額<sup>がく</sup>不<sup>ぶ</sup>堅<sup>けん</sup>翁<sup>おん</sup>蒙古<sup>もんこ</sup>源<sup>げん</sup>流<sup>りう</sup>札<sup>ちや</sup>爾<sup>る</sup>楚<sup>ちよ</sup>泰<sup>たい</sup>）は、鍛<sup>か</sup>冶<sup>ち</sup>の風<sup>ふう</sup>匣<sup>げい</sup>を負<sup>お</sup>ひて、者<sup>ぢえ</sup>勒<sup>る</sup>篋<sup>め</sup>（元<sup>げん</sup>親<sup>しん</sup>征<sup>てい</sup>録<sup>ろく</sup>折<sup>ちやえ</sup>里<sup>り</sup>麥<sup>め</sup>源<sup>げん</sup>流<sup>りう</sup>濟<sup>ち</sup>拉<sup>ら</sup>瑪<sup>ま</sup>）と云へる子<sup>こ</sup>を引<sup>ひ</sup>きて來<sup>き</sup>て、札<sup>ちや</sup>兒<sup>る</sup>赤<sup>ちやう</sup>兀<sup>う</sup>額<sup>がく</sup>不<sup>ぶ</sup>堅<sup>けん</sup>は、幹<sup>かん</sup>難<sup>なん</sup>の迭<sup>て</sup>里<sup>り</sup>溫<sup>うん</sup>孤<sup>こ</sup>山<sup>ざん</sup>に居<sup>を</sup>る時<sup>とき</sup>、帖<sup>て</sup>木<sup>ぼ</sup>眞<sup>しん</sup>生<sup>うま</sup>れたる時<sup>とき</sup>、貂<sup>てう</sup>鼠<sup>そ</sup>の襁<sup>むつき</sup>褌<sup>き</sup>（蒙<sup>もん</sup>語<sup>ご</sup>捏<sup>ね</sup>兒<sup>る</sup>克<sup>く</sup>明<sup>めい</sup>譯<sup>てい</sup>裏<sup>り</sup>）を與<sup>あた</sup>へたりき、我<sup>われ</sup>。

者勒篋の來屬

訶額命母を密阿  
黒臣嫗の喚び起

馬上の男女九人

この子<sup>こ</sup>者<sup>ぢえ</sup>勒<sup>る</sup>篋<sup>め</sup>をも與<sup>あた</sup>へたりき、我<sup>われ</sup>小<sup>わ</sup>しとて伴<sup>つ</sup>れて去<sup>さ</sup>れりけり。今<sup>いま</sup>者<sup>ぢえ</sup>勒<sup>る</sup>篋<sup>め</sup>に鞍<sup>くら</sup>を置<sup>お</sup>かせ、門<sup>かど</sup>を開<sup>あ</sup>けさせよ」と云ひて與<sup>あた</sup>へたり。  
額篋額勒 額兀額  
 客<sup>け</sup>魯<sup>る</sup>噠<sup>れん</sup>河<sup>が</sup>の源<sup>みなもと</sup>に不<sup>ぶ</sup>兒<sup>る</sup>吉岸<sup>がし</sup>に下<sup>お</sup>りて居<sup>を</sup>る時<sup>とき</sup>、一<sup>ひと</sup>朝<sup>あさ</sup>早<sup>はや</sup>く、白<sup>しろ</sup>み黄<sup>き</sup>ばみ明<sup>あ</sup>けんとす時<sup>とき</sup>、訶<sup>ほ</sup>額<sup>え</sup>命<sup>めい</sup>額<sup>がく</sup>客<sup>け</sup>の家<sup>いへ</sup>の内<sup>うち</sup>に働<sup>はたら</sup>ける密<sup>み</sup>阿<sup>あ</sup>黒<sup>くろ</sup>臣<sup>しん</sup>額<sup>がく</sup>篋<sup>め</sup>堅<sup>けん</sup>（密<sup>み</sup>阿<sup>あ</sup>黒<sup>くろ</sup>臣<sup>しん</sup>額<sup>がく</sup>篋<sup>め</sup>堅<sup>けん</sup>）起<sup>お</sup>きて言<sup>い</sup>はく「母<sup>はは</sup>、母<sup>はは</sup>、疾<sup>と</sup>く起<sup>お</sup>きよ。地<sup>ち</sup>搖<sup>ゆる</sup>げり。震<sup>とよみ</sup>聲<sup>こゑ</sup>聞<sup>き</sup>えたり。嘗<sup>かつ</sup>て脅<sup>おび</sup>したる泰<sup>たい</sup>赤<sup>ちやう</sup>兀<sup>う</sup>惕<sup>と</sup>來<sup>き</sup>つるならん。母<sup>はは</sup>、疾<sup>と</sup>く起<sup>お</sup>きよ」と云へり。  
 訶<sup>ほ</sup>額<sup>え</sup>命<sup>めい</sup>額<sup>がく</sup>客<sup>け</sup>言<sup>い</sup>はく「子<sup>こ</sup>どもを疾<sup>と</sup>く喚<sup>よ</sup>び覺<sup>さま</sup>せ」と云ひて、訶<sup>ほ</sup>額<sup>え</sup>命<sup>めい</sup>額<sup>がく</sup>客<sup>け</sup>も疾<sup>と</sup>く起<sup>お</sup>きたり。帖<sup>て</sup>木<sup>ぼ</sup>眞<sup>しん</sup>等<sup>ら</sup>の子<sup>こ</sup>どもも疾<sup>と</sup>く起<sup>お</sup>きて、馬<sup>うま</sup>どもを執<sup>と</sup>りて、帖<sup>て</sup>木<sup>ぼ</sup>眞<sup>しん</sup>一<sup>ひと</sup>つの馬<sup>うま</sup>に乗<sup>の</sup>れり。訶<sup>ほ</sup>額<sup>え</sup>命<sup>めい</sup>額<sup>がく</sup>客<sup>け</sup>一<sup>ひと</sup>つの



馬うまに乘のれり。合撒兒かつさる一つの馬うまに乘のれり。合赤溫かちうん一つの馬うまに乘のれり。帖木格幹惕赤斤てむげかんちやくしん一つの馬うまに乘のれり。別勒古台べれくぐたい一つの馬うまに乘のれり。李幹兒りかん出い一つの馬うまに乘のれり。者勒篋せれくせつ一つの馬うまに乘のれり。帖木侖てむるんをば、訶額侖かかくるん客懷かくわいに駄つけたり。「帖木眞てむしんのみは、」  
(原文に脱ちたるを、)一つの馬うまを牽ひ馬うまに備そなへたり。李兒帖兀眞りえんてうしんに  
は、馬闕うまけたり。

車くるまに乗のれる李兒帖兀眞

帖木眞てむしん兄弟あにも馬うまに乘のりて、夙つとに即すなち不兒罕ぶえかんに上のほれり。豁阿黑かくちん臣おんな嫗あなは、李兒帖兀眞りえんてうしんを匿かくさんご、一つの黒くろき輿こしある車くるまに乘のらしめて、腰花牛えうくわぎう（腰こしに花紋はなもん）に引ひかせて、騰格てん格里り豁囉罕かくらかんに（騰格てん格里りは、河、卷一の統格黎）（ある牛）沂さかり動うごきて來きつる時とき、曙あけぼのの仄ほのかに明あくる時とき、向むかり軍いくさの眾しう馬うまを走はしらして旋めぐりて到いたりて來きて、「何人なにびとぞ、汝なんぢ」と問とへ

り。豁阿黑かくちん臣おんな嫗あな言いはく「我われは、帖木眞てむしんのなり。大家おほやの内うちに羊ひつじの毛けを剪きりて來きつ。己おのが家いへに回かへりて來くるなり」と云いへり。それより「彼等かれら」言いはく「帖木眞てむしんは、家いへにありや。家いへは、いかに遠とほき」と云いへり。豁阿黑かくちん臣おんな嫗あな言いはく「家いへは、近ちかくあり。帖木眞てむしんには、有あり無なしには、心附こころづかざりき。」家いへの後うしろより起おくるご來きつ。我われ「ご云いへり。」

李兒帖等三女の慶はれ

彼かの軍人いくさびとごも、かくて驅かけ去されり。豁阿黑かくちん臣おんな嫗あなは、その腰花えうくわ牛ぎうを鞭打むちうつご、疾とく行ゆかんごして、車くるまの軸ぢくを折をり去されり。軸ぢくを折をられて、徒かちにて林はやしに走はしりて入いらん」と云いひ合あへる時とき、續つづきて彼の軍人いくさびとごも、別勒古台べれくぐたいの母ははを疊騎てふきせしめ（尻馬しんばに）て、その二ふたつの足あしを垂たれさせて、驅かけて到いたりて來きぬ。この車くるまの内うちに何なにを載のせてあるか」と云いへり。豁阿黑かくちん臣おんな嫗あな言いはく「毛けを載のせてあり。」



ご云へり。彼の軍人の兄ごも言はく「弟ごも子ごも下りて（馬りりて）見よ」ご云へり。彼等の弟ごも子ごも下りて、戸ある車の戸を取れば、内に妃らしき人居て、その人を車より拖きて降して、豁阿黒臣ご二女に疊騎せしめて率あるご帖木眞の後より草の踏分に依り跡附けて不兒罕に上れり。

不兒罕嶽の三繞り

帖木眞の後より不兒罕嶽を三たび繞りて獲かねたり。這廂那廂に急ぎ廻れば、陥る泥通れぬ林あり、飽ける地（草木の繁に鑽り入れば、入られずして險しく密く、その後より隨ひて獲かねたりき。彼等は、三つの篋兒乞惕なりき。兀都亦惕篋兒乞惕（親征録）兀都夷篋里乞の脱黒脱阿（親征録）脱脱、兀注思篋兒乞惕の歹兒兀孫合阿惕篋兒乞惕の合阿台荅兒麻刺。この三

三つの篋兒乞惕のし返し

つの篋兒乞惕は、前の訶額侖額客を赤列都（卷一の也）より奪ひて取られき。さて、今その怨を霽しに來つるなりき。彼の篋兒乞惕言ひ合へらく「訶額侖の讎を報いんご、今彼の婦人ごもを取れり。讎を報いたり、我等ご云ひ合ひて、不兒罕嶽より降りて己が家家に回りましたり。

不兒罕嶽に救はれたる帖木眞の感謝

帖木眞は、彼の三つの篋兒乞惕實に己が家家に回れりや伏したりやご、別勒古台、孛斡兒出、者勒篋三人を、篋兒乞惕の後より偵ひ、三たび宿り隨はせて、篋兒乞惕に離れさせて、帖木眞は、不兒罕の上より下りて、その胸を椎ちて言はく「豁阿黒臣額客が、（母の大功ありし故に）鼬（鎖耶合）ごなりて聽きたる故に、銀鼠（不噲兀敦）ごなりて見たる故に、本の身を（不噲兀敦）躲れんご、絆（不吉牙）せる（足繫ぎて）



馬うまにて鹿しかの徑こみちを徑わたりて、榆にれの條えだの家いへを家や作づくらんご、不ぶ兒る罕かんの  
 上うへに上のほりき、我われ、不ぶ兒る罕かんの御み嶽たけに、蝨しらみの如ごとき命いのちを匿かくされたり、我われ。  
 獨ひとりの命いのちを惜をしまんご、一ひとつの馬うまにて、罕かん荅だ孫すん（獸獣の）の徑こみちを徑わたりて、  
合黒察罕柳やなぎの枝えだの家いへを家や作づくらんご、御み嶽たけの上うへに上のほりき、我われ、御み嶽たけ不ぶ兒る罕かん  
合赤喇に蟻ありの如ごとき命いのちを救すくはれたるぞ、我われ、甚いたく恐おそれさせられたり、我われ。  
合兒察不ぶ兒る罕かんの御み嶽たけを朝あさごごに祭まつれ、日ひごごに禱いのれ、我われが子し孫そんの子し  
馬納合兒孫そん覺おほえ居をれごごて、日ひを迎むかへて、帶おびを項うなじに掛かけて、帽ぼうを手て（手左）に持もち  
兀合秃孩ち添そへて、手て（手右）に胸むねを椎うちて、日ひに向むかひ九ここのたび跪ひざまづきて、灌くわん奠てん（明明譯）  
 將を馬うま妳のち子し灑そ奠そなへ祈きたう禱たうを捧さげたり。

成吉思汗實錄卷の二終り。

成吉思汗實錄卷の三。

王罕の救を求め  
に帖木眞等の合  
喇屯往き

かく陳のべて帖て木む眞ちん合かつ撒さ兒る別べ勒る古ぐ台たい三み人たりは、客け喇れ亦い惕との脱と  
 幹お哩り勒る（親親征征）脱と憐れん、元元史史太太祖祖紀紀、脱と里り、哈は、王わん罕かんの處ところに、土と兀う刺ち木む噠た（土土兀兀）  
 の合か喇ら屯とん（林林黒）に居をる處ところに往ゆきて言いはく三みつの篋め兒る乞き惕とに、意おも  
 はず居をる處ところに來きて、妻つま子を虜とらへて取とられたり、我われが罕かん額え赤ち格げ  
 （罕罕父な）妻つま子を救すくひて與あたへよごて來きぬ、我われ等らご云いへり。その言ことばの  
 返かへり辭ことに、脱と幹お哩り勒る王わん罕かん言いはく我われ去こ年ぞ汝なんぢに云いはざりしか、貂てう鼠そ  
 の裘かほころもを我われに持もち來きつるに、父ちちの時ときに安あん荅だご云いひ合あひたるは、

王罕の返辭



父の如くあるぞ。さて被せられたれば、そこに我言はく「貂鼠の裘の返禮に、散りたる汝の部眾を纏め合ひて與へん。黒き貂鼠の裘の返禮に、離れたる汝の部眾を集め合ひて與へん。」さて、腔子の胸合埋兀に存れ、腰の尖合合察に存れ。云はざりしか、我。今彼の言に從はんぞ。貂鼠の裘の返禮に、都ての篋兒乞惕を滅す。まで、汝の孛兒帖兀眞を救ひて與へん。我。黒き貂鼠の裘の返禮に、普合木黒き篋兒乞惕を打破りて、汝の妃孛兒帖合不喇を回らせて伴れ來なん。我等。汝は、札木合迭兀合勒塔赤に（札木合なる弟、年少）傳言して遣れ。札木合弟は、豁兒豁納黒主不兒（豁兒豁納黒河原）に居るぞ。我は、此處より二萬人にて右の手となり出馬せん。札木合弟は、二萬人となりて左の手となり出馬せよ。我等の約會（會合の時）

札木合の救を求むる帖木眞の使

は、札木合より爲よ。云へり。

帖木眞、合撒兒、別勒古台三人は、脱鞞勒罕より回りて家に到りて、帖木眞は、札木合の處に、合撒兒、別勒古台二人を遣り、札木合安答に言へ（帖木眞と札木合と幼き時安答と）。さて、言ひて遣るには、三つの篋兒乞惕に、來て座を空（豁兒豁納黒主不兒）に爲されたり。我（妃を奪はれたり。この）扣子（二物を結び合）一つのもの（離れざ）ならずや、我等。讎をいかにか復さん。懷を半（額不見）にせられたり。我（この）は、音ハんにて、下（幹雪勒）肝の親族（肺腑）ならずや、我等。怨をいかにか報（哈赤刺）いん、我等。云ひて遣りぬ。札木合安答に言ひて遣りたる言、かくの如し。又客喇亦惕の脱鞞勒罕の言へる言を札木合に言ひて遣るには、前（額赤）の日、我が也速該罕額赤格（也速該罕）に



札木合の返辭

助を好く爲されたるを想ひて、伴ごならん、我二萬人となりて右の手となり出馬せん。札木合弟に傳言して遣れ。札木合弟は、二萬人にて出馬せよ。相合ふ約會は、札木合弟より爲よ。云へり。この言ごもを盡させ畢へて、札木合言はく「帖木眞安荅を、座空になれり。ご知りて、我が心痛めり。懷半になれり。ご知りて、我が肝痛めり。讎を復しに、兀都亦惕、兀注思篋兒乞惕を滅して、夫人孛兒帖を救はん。怨を報いに、普き合阿惕篋兒乞惕を打破りて、妃孛兒帖を回らせ救はん。今彼の鞍轡を拍つ時、鼓の音ごなして遽て驚く脱黑脱阿は、不兀喇客額兒に居るぞ。」  
不兀喇原、駝原、親征録、不刺川、內府輿圖に、恰克圖の東に布拉喀倫あり。喀兀喇原は、この布拉河の邊の原野なるべし。  
蓋ある箭筒を搖閃す時

反り走る歹兒兀孫は、今幹兒桓薛涼格二河の閒なる塔勒渾阿喇勒に居るぞ。  
（また） 唵昆水、元史太宗紀に、幹兒寒河、明宗紀に、幹耳罕水、虞集の句容郡王世績の碑に、幹歡河、歐陽玄の偃氏家傳に、幹爾汗河などあり。薛涼格河は、今の色楞格河にして、唐書回鶻の傳に、仙娥河、元史巴而朮阿而忒斤の傳に、薛靈哥水、耶律鑄の雙溪醉隱集に、錫蘭河、偃氏家傳に、偃輦傑河、瀚海集に、習靈靄河などあり。塔勒渾阿喇勒、即ち勇婦の島は、兩河合流の處にある出島なるべし。  
蓬に風戦ぐ時、黑き林を争ふ。合阿台荅兒馬刺は、今合刺只客額兒に居るぞ。  
（合刺） 只原、高寶銓の說に、今の哈拉河の今我等は直に乞勒豁木噠（乞勒豁河、水道提）を横ぎるに、猪鬃草は何處にも有れ、篋組みて入らん。彼の遽て驚く脱黑脱阿の天窓の上より入りて、彼の緊要なる帳房骨を倒すべく衝きて、彼の妻子を盡くるまで虜へん。彼の福神の帳房骨（大黒柱と云）を折るべく衝きて、彼の都ての部眾を空しくなるまで虜へん。



札木合が出陣の  
しらせ約會の地

札木合又言はく「帖木眞安荅、脱幹哩勒罕阿荅（脱幹哩勒罕なる兄）一人に言へて言はく「我には、遠く見ゆる麁を祭れり、我、黒き強牛の皮にて張りたる麁、音ある鼓を打てり、我、黒き快馬に乘れり、我、硬き衣裳を被たり、我、鋼の鎗を執れり、我、挑皮ある箭をかけたり、我、合阿惕篋兒乞惕の處に戦ひに出馬せん、便ちと言へ。長き遠く見ゆる麁を祭れり、我、牛の皮にて張りたる濁れる聲ある鼓を打てり、我、脊黒の快馬に乘れり、我、革被せたる鎧を被たり、我、柄ある環刀を執れり、我、扣子ある箭をかけたり、我、兀都亦惕、兀注思、篋兒乞惕の處に死に合はん（死戦）便ちと言へ。脱幹哩勒罕兄出馬するには、不兒罕嶽の前より帖木眞安荅を過ぎて來て、幹難河の源に亭脱罕亭

陣 王罕帖木眞の出

幹兒只に約會せん。此處より出馬するには、幹難河に沂り、安荅の部眾此處に在り。安荅の部眾より一萬人、我、此處より一萬人、二萬人となりて、幹難河を沂り往きて、亭脱罕亭幹兒只に約會の地に會し合はん」と言ひて遣りぬ。  
札木合の此の言を、合撒兒別勒古台二人來て、帖木眞に言ひて、脱幹哩勒罕に傳言を致せり。脱幹哩勒罕は、札木合の此の言を致さるゝと、二萬人にて出馬せり。脱幹哩勒罕出馬するに、不兒罕嶽の前なる客魯噠の不兒罕吉岸を指して來ぬ。こゝに、帖木眞は、不兒罕吉岸に居たるに、二路（脱幹哩勒罕の處にあり）とて、移りて統格黎克に（卷一の統格黎克小河と名同じけれども、彼は幹らず、却て卷二の騰格里）沂り起ちて、塔納豁兒歡（塔納小河、内府輿圖小河に同じきに似たり）沂り起ちて、塔納豁兒歡（塔納小河、内府輿圖



の上流に流)にて不兒罕嶽の前に下馬して帖木眞は、そこより  
 軍を起して脱幹哩勒罕は一萬人、脱幹哩勒罕の弟札合敢不  
 (親征錄 札阿紺孛)は一萬人、二萬人にて乞木兒合豁兒歡の(乞  
 兒合小河、豁兒歡)阿亦勒合喇合納に下馬して居るに會ひ下馬  
 せり。

王罕の後れたる  
 を札木合の咎め

帖木眞、脱幹哩勒罕、札合敢不三人一つになりて、そこより  
 動きて幹難の源なる孛脱罕孛兒只に到りぬれば、札木合  
 は約會の地に三日前に到りてけり。札木合は、この帖木眞、脱  
 幹哩勒、札合敢不等の軍ごもを見るに、札木合は、二萬の軍を  
 整へて立ちけり。この又帖木眞、脱幹哩勒罕、札合敢不、等も、そ  
 の軍ごもを整へて到り合ひて、さて認め合ひて、札木合言は

く「風雪になることも約束には、雨になることも聚會には勿後れ  
 李羅安 李魯 李勒札勒 忽喇勒  
 そこ語り合はざりしか、我等忙豁勒には、者(諾する聲にて、我等の)は  
 誓したるに異ならんや。者より後れたる者は、班列より出  
 さんご語り合ひき」と云へり。札木合の言につき、脱幹哩勒罕  
 言はく「約會の地に三日後れて立てりて、罰ふここ咎むる  
 ことを札木合弟知れ」と云へり。約會の咎めは、かく言ひ合ひ  
 て、

三將の篋兒乞揚  
 打破り

孛脱罕孛兒只より動きて、乞勒豁河に到りて篋組みて  
 渡るに、不兀喇原に、脱黒脱阿別乞(別乞は、族)の天窓の上より  
 緊要なる帳房骨を倒すべく衝き入りて、彼の妻子を盡くる  
 額兒勤 額額迭 俺不嚙 額篋可兀 額出勒  
 まで虜へたり。彼の福神の帳房骨を折るべく衝きて、彼の都  
 忽秃黑 忽忽嚙 豁脱刺



ての部眾を絶ゆるまで虜へたり。脱黑脱阿別乞に、睡りて居る程に到るべきを、乞勒豁河に居る魚取貂鼠取野獸取散りたる者ども、敵來ぬとて夜通し走り報告を致し去りき。その報告を致さるゝと、脱黑脱阿兀注思篋兒乞惕の歹兒兀孫二人合ひて、薛涼格河に沿ひ巴兒忽眞（今の巴爾古）に入り、僅にその身を走り遁れけり。

帖木眞李兒帖の再會

篋兒乞惕の部眾、薛涼格河に沿ひ夜走りて行く時、我が軍走りて行く篋兒乞惕を夜又追掛けて虜へ掠め行く時、帖木眞は、走りて來る民に、李兒帖、李兒帖と喚びて行く時遇ひて、李兒帖兀眞は、その走る民の中に居りき。帖木眞の聲を聽きて認めて車より下りるゝ走りて來て、李兒帖兀眞豁阿忽臣

二女は、帖木眞の轡繩手綱を夜認めて執りけり。月明ありき。見れば、李兒帖兀眞なるを認めて、抱き合ひに驅寄りたり。其處より帖木眞は、脱幹哩勒罕、札木合安荅二人に本夜便ち言ひて遣るには、尋ぬる所用を得たり。我夜は勿夜徹しせ。此處に下馬せん、我等と云ひて遣りぬ。篋兒乞惕の部眾走りて來るを、夜すがら散りて來る間に、その其處に下馬して宿れり。李兒帖兀眞にかく遇ひ合ひて、篋兒乞惕の民より救ひたる縁故、かくあり。

李兒帖を収めたる赤勒格兒の懺悔

初先に兀都亦惕篋兒乞惕の脱忽脱阿別乞、兀注思篋兒乞惕の歹兒兀孫、合阿惕篋兒乞惕の合阿台荅兒馬刺、この三つの篋兒乞惕三百人は、日の前（のさき）日脱黑脱阿別乞の弟也客赤







〔罕の〕復稱になれり告げられたり我此處に悪き人に配きて今  
 子ごもを面をいかで見ん我云ひ走りて密き林に鑽り入  
 りきかくて尋ねて得られざりき別勒古台那顏〔別勒古〕は、篋  
 兒乞惕の只骨ある人〔人云〕に我が母を伴れ來よ云ひて  
 は、骸頭箭にて射殺すなりき不兒罕嶽を圍み合ひたる三百  
 の篋兒乞惕を子孫の子孫に至るまで灰を吹拂ふが如く滅  
 せり残れる彼等の妻子は抱くべき者ごもをば抱けり門に  
 入らしめらるべき者ごもをば門に入らしめたり〔明他的其  
 餘妻子每、可以做妻的做了妻做奴婢的做了奴婢〕  
 脱幹哩勒罕、札木合二人を帖木眞感謝みて言はく我が罕  
 額赤格、札木合安荅二人に伴ご爲られて皇天后土に力を添

篋兒乞惕の勤滅

王罕札木合に帖  
木眞の感謝

へられて、稜威ある皇天に名のりて母なる土地に到らしめ  
 て、〔天を父とし、地を母とする故に、敵の國土をも母と〕男の怨ある篋兒  
 乞惕の民を、彼等の懐も空になしたり。彼等の肝も半にした  
 り、我等、彼等の位も空になしたり。親族の人をも失はしめた  
 り、我等、彼等の残れる者ごもをも掠めたるぞ、我等、篋兒乞惕  
 の民をかく壞りて退かん云ひ合へり。  
 兀都亦惕篋兒乞惕逃ぐる時、貂鼠の帽ある、牝鹿の蹄皮の  
 靴ある、粉皮と水の貂鼠と接ぎたる衣ある、五歳なる、曲出の  
 名ある、その目に火ある、幼兒を、我等の軍人ごもは、營盤の内  
 に遣りたるを得て、伴れ來て、訶額、額客に給事に率て與へ  
 て去れり。

敵營に遣れる幼  
兒曲出



帖木眞てむぢん脱幹だつかん哩勒罕りりかん札木台ぢまたい三人さんにん一ひとつになりて、篋兒けあき乞惕きていの奥向おくむきの房いへを推倒おしただして、和合わがふせる婦人をみなを掠かすめて、幹兒罕かんぢかん（即ち前の幹兒かんぢかん桓河かんぢかん）薛涼格せりやんげ二河にかの塔勒渾たたくん阿喇勒あららより退しりぞくに、帖木眞てむぢん札木台ぢまたい二人ふたりは、一ひとつとなりて、豁兒こくろ豁納こくなく黑河原くろがはらを指さして退しりぞけり。脱幹だつかん哩勒りり罕かん退しりぞくには、不兒ぶろ罕かん嶽だけの背うしろより訶闊兒かころ秃と主兒ちゅ不ぶを過すぎ、（兒不に字倒置せせる）合察兀喇かちやうら秃と速す卜赤惕ぶちてい忽里牙くりや秃と速す卜赤惕ぶちていを過すぎ、その野獸けだものを圍獵まきがりして、土兀刺とらの黑林くろはやしを指さし退しりぞきたり。

帖木眞てむぢん札木台ぢまたい二人ふたりは、豁兒こくろ豁納こくなく忽河原がはらに會あひ下馬げして、曩さきの安荅あんだを爲なり合あへるを想おもひ合あひて、安荅あんだを爲なり直なほし合あひて親したしみ合あはん云いひ合あへり。最前もともに安荅あんだを爲なり合あへるには、帖木眞てむぢん十一歳じふいっさいなる時とき、札木台ぢまたい合あは麿おほしかの（麿おほしかの骨ほねに）髀石ひせきを帖木眞てむぢんに與あた

帖木眞札木合幼  
き時二たびの安  
荅

へて、帖木眞てむぢんの銅灌どうくわんの（銅灌どうくわんの）髀石ひせきと換かへ合あひて、安荅あんだに爲なり合あひて、安荅あんだ云いひ合あひたるは、幹難かんなんの冰こほりの上に髀石ひせきを打うつ時とき、其處そこに安荅あんだ云いひ合あひたりき。（阮葵生えんきせいの蒙古もんこ吉林しん土風記どふうきに曰いく、手攤て擲ち爲なる戲あそ視し其假仰かやう横側こくわん爲なる勝負しょうぷ小者せうしや以もつ麿おほ大者おほ以もつ鹿か瑩澤えいさく如ごと玉ぎよく兒童こども婦女にょにょ圍坐ゐざ攤た擲ち以もつ相樂あひら以もつ薄圓はくゑん擊う之を則曰すなは曰い怕格ぱかく又また有あ較遠けうゑん之を戲あそ趨こ冰こほり上うへ以もつ中な爲なる勝名しょうな曰い撒罕さかんと云いへり。撒罕さかんは骨ほねなる蒙語まうご撒合さあの轉まなり。帖木眞てむぢん札木台ぢまたい合あの冰こほりの）その後の春はる木き作つくの弓ゆみにて箭やを射い合あひて居をる時とき、札木台ぢまたい合あは二歳牛にさいうしの二つふたの角つを粘つけて孔あなあけて聲こゑある響なり髀頭かぶら（髀かぶら鳴な）を帖木眞てむぢんに與あたへて、帖木眞てむぢんの柏ひのきの頭かしらある鏑矢かぶらやと換かへ合あひて、安荅あんだに爲なり合あへり。二ふたたび安荅あんだ云いひ合あひたる緣故こと、かくあり。

曩さきに老人としよりだちの言ことを聞ききて、安荅あんだの人は、命いのち一つひとにて棄すて合あはず、命いのちの護まもりとなるなりとて、親したしみ合あへる緣故こと、かくあり。今いま